ち徧く福音を宣傳ふ』(可十六〇二十)とある。パウロは『其聲は遍く世界に出その言は地の極にまで及べり』(羅十〇十八)と申された。(此地なる語は太二十四〇十四のオイコーメニーから出て居る)。

また彼は『此福音は……すでに天下の萬人に傳れり』(西一〇二三)と申された。

福音が萬國に普及せられたといふ之等の感ずべき言は決定的のものである。古代の弟子等の事業は實に偉大で、我等には到底これを疑ふ餘地がない。(此傳道の普及といふ特別なる點に關し、太二十四〇十四につける博士アダム、クラークや前に紹介せる諸大家の言ふところを參考とせられよ)。我等は太二十四〇十四に聖靈が用ひ給ひしオイコーメニーといふ語は、羅八〇十又は西一〇六と二十三に用ひたる語よりも尙ほ廣い意味があるやうに思ふてはならぬ。もし一の語を狹義に解するなれば、他の語をば然解するは適當なる事である。我等はパウロの行動に關しては充分の記錄を有て居るので、他の使徒や弟子等によりて成れたる行動を輕視する傾向がある。ペテロはバビロンに行た(彼前五)。言傳によれば其當時福音はペルシア、印度、エテオピヤ、シゼア、スペイン及び英國の諸國にも傳へられたと云ふ事である。

然らば西一〇二三の明文は、太二十四〇十四が實現したるものとして信賴する事が

出來るものである。何故なれば彼の時から今日に至るまで、此事に關し、信者と主の再臨との間に、何等の休徵も豫言せられたる出來事も無つた、また有もしないと思はれる。若し我等は、證が十分行屆いて居ないと獨で決め、または今後數世紀間かゝつても完成しないなどと臆測するなれば、これ實に神にのみ屬する所の特權を愚にも橫奪する事である。

神のみ知り給ふ

何時凡の民に對する證が完成するかは神のみが決定るところのものである。此全問題の眞髓はこゝにある。若し敎會が證の完成せらるゝまで福音を宣傳すべき使者であるならば、敎會としては今證を全ふする事ある耳で、何人も其時と決る事は出來ない。しかし敎會のみが其使者であるといふ證據が我等にない。敎會のみでなく、㊐默十四〇

㊁(西一〇六)この福音は世界に徧く如く爾曹にも來れり。且なんぢらが之を聞て神の恩を眞實に曉し日より爾曹の中に果を結び益大になれる如く世界にも果を結びて大になれり。

(西一〇二三)若なんぢら信仰に止り其基を定めかつ堅して福音の望より移ずば如此せらるゝことを得べし。此福音は卽ち爾曹の聞し所なり。且すでに天下の萬人に傳れり。我パウロその役者と作たり。

㊐(默十四〇六)我また一人の天使の穹蒼の中央を飛を見たり。彼地にすむ者卽ち諸國、諸族、諸音、諸民に宣傳へん爲に永遠ある所の福音を携へ。

六には外の使者もあると書てある。

されば教會が携へ擧らるゝ後までは證が完成せられぬだらう。この天來の他の使者は、地上に住る諸國、諸族、諸音、諸民に永遠の福音を宣傳ふるとある(默十四六)。此塲合に於ては、證を全ふする者は教會でない。されば其は教會にとりて休徵とならぬ事は明白なる事である。

そこでこれは日と時の如く、神のみが知り給ふ事で、教會が其に就て何等の休徵をもつ事が出來ぬといふ事に我等は結論する。されば我等には爲すべき事が外にない。たゞ忠實に來るべき王國の福音を斷へず宣傳へ、何時でも新郎を迎へ得るやう目を醒して居るのみである。

第十一、神の國を見るまでは死ざる者あり

㊤太十六〇二八、可九〇一、路九〇二七に基督と其王國の來るのは衆人の或者が生存して居る中に起ると書てあるとて反對する人がある。あの人等の意見では、耶蘇はかの衆人に語り給ひしところを以て見ると、基督の來るのと其王國は心靈的に解すべきもの、即ちペンテコステの日に於て聖靈が注がれて福音の能力の土臺が据られた事であるとなし、或は或人の如く、譬喩的に解すべきもの、即ちエルサレムの滅亡、羅馬

人に猶太が支配せらるゝ事、又は教會の建設であると言ふのである。委しく言ば、彼等の意見はこうである—基督はペンテコステの日に聖靈を以て來り給ふた、而して福音の宣傳と、奇蹟を行ふ事などによりて弟子等により其能力を顯はし給ふた—また主は羅馬の軍勢を以て來り、エルサレムを滅ぼし、ユダヤ國の政府を覆し給ふた—また彼の國は教會である、教會に由て今支配し居給ふ、また或人の言ふ如く、教會の中に、教會により、彼は今地上の諸國民を支配し居給ふといふのである。

これに對して我等はかく答へる—聖靈は別に一人格を有し給ふ御方で、基督の人格と混同せらるべきものでない。救主は『われ父に求ん父かならず別に慰る者を爾曹に

㊦(太二四〇三六)その日その時を知ものは唯わが父のみ天の使者も誰もしる者なし。

㊦(太十六〇二八)誠に爾曹に告ん人の子その國を以て來るを見までは此に立もの〻中に死ざる者あるべし。

(可九〇一)イエスまた彼等に曰けるは我まことに爾曹に告ん此に立もの〻中に神の國を見までは死ざる者あり。

(路九〇二七)われ誠に爾曹に告ん此に立者の中に神の國を見までは死ざる者あり。

㊦(可八〇三四)衆人と其弟子を共に召て彼等に曰けるは若し我に從はんと欲ふ者は己を棄その十字架を負て我に從へ。

賜ん』（約十四〇十六）と明白に言ひ給ふた。若し他の者であるならば主御自身ではない。㊥聖靈は約束によりて來り給ふた。それを基督の再臨の事柄と混同するは實に不當の事である。主は他の約束に基き、再び來り給ふのである。これはモーセとヨハネの誕生が相異つて居るやうに、全く異つた二の事柄である。

㊥基督は靈的に信者と偕に又其中に居る事は眞である。此意味に於て、主は常に偕に居り又決して信者から離れ給はないと云ふ事も眞である。『夫われは世の末まで常に爾曹と偕にあるなり』の聖言に注意せられよ。主は『ペンテコステ前の祈禱の時にも彼等と偕に居給ふた、而して何時も其民と偕に居給ふた。しかし突然慰る者（パラクレトス）即ち他の御方が特別なる榮光ある目的を以て來り給ふた。そこで聖靈がかく來り給ひしは神の臨在の顯現で、全く基督の靈的臨在と異りたるものである。基督の臨在は基督御自身の聖言によれば其民より決して離れた事はない。彼は決して靈的に離れた事はない。たゞ彼は有形的に體を以て行き給ふた。しかし同じ狀態で彼は歸り給ふのである。

㊥ペンテコステの日の後にも、弟子等は基督の來ることに就て語り續けて居つた。もし主の歸り來るといふ約束はかの日に成就したのであつたならば彼等はかく語らなか

つたであらう。エルサレムの滅亡後（紀元七十一年頃）に聖ヨハネは默示錄を書いた、（紀元九十六年頃）。其本の中に幾度も基督の再臨は、なほ將來である如く言て居る。其はエルサレムの滅亡の時に再臨が無つたと云ふ事を明瞭に示す所のものである。なほ前にも述たる如く、㊥教會は神の國でない、㊥基督の體即ち其新婦である。弗五

㊦（約十四〇十六）われ父に求ん父かならず別に慰ろ者を爾曹に賜て窮なく爾曹と偕に在しむべし。
（約十四〇二六）わが名に託て父の遣さんとする訓慰師すなはち聖靈は衆理を爾曹に教へ亦わが凡て爾曹に言しことを爾曹に憶起さしむべし。

㊦（約十四〇二三）イエス答て彼に曰けるは若人われを愛せば我言を守ん。且わが父は之を愛せん。我儕きたりて彼と偕に住べし。
（約十七〇二三）われ彼等に在なんぢ我になる。蓋彼等をして一に全ならしめ且世をして爾の我を遣しことを又なんぢ我を愛する如く彼等をも愛することを知しめんとなり。
（加四〇十九）我が小子よ我なんぢらの心にキリストの狀成までは復び爾曹の爲に產の劬勞をなす。

㊦（徒一〇十一）曰けるはガリラヤ人よ何故に天を仰て立るや爾曹を離て天に擧られし此イエスは爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く亦きたらん。

㊦（弗一〇二十二）また一切の物を彼の足下に置また彼を一切の物の上に首となし此を教會に賜ひて其首となす爲なり。

（弗一〇二三）教會は彼の身體なり。萬物を以て萬物に滿しむる者の滿る所なり。

章。教會は彼に支配せらるべきものでなく、基督と偕に苦しみ、基督と偕に王たるべきものである。教會は『神の國に入べき者とならん』とて患難を受て居るのである。されば パウロは弟子等（教會員）に向ひ『多の艱難を歷て我儕が神の國に至る可ことを教へ』（徒十四〇二二）たのである。またペテロは我等に神の恩を益々受ることを忘れず、『勤て……召れし事と選れし事とを堅固す』る事をすゝめ、『我儕の主なる救主イエスキリストの永遠國に入る』（彼後一〇五―十一）やうにと勸められた。

實に是等の言は教會と神の國との區別を明にし、而して神の國はなほ未來なる事を明言して居る。されば基督の再臨をば靈的にまた譬喩的に解釋する事は根據のない事であると我等は見て居る。

なほ他の說を出すものがある、基督は其國を以て來る事は（〇二八）ペンテコステの日に靈的に來り給ふた時に成就したといふのであつて、而して彼は天の雲に乘り、其父の榮を以て、聖き使と偕に來る云々は福音時代の終に於て眞に、人格的に、有形的に來るのであるといふ說である。（而して彼等も亦時と世の終といふ事を言て居る）。

此說はたゞ言の差異から起つて居るもので、事實に於ては何等の異つたところはない。何故なれば、主は其國を以て來るといふ事は、其榮光を以て顯はるゝ事でないか。

歷史は證明する―王者の榮光といふ觀念は其王國の尊嚴と其顯現によりて顯はるゝ榮光と均しきものであるといふ事實と一致するものである。

主は鐵の杖を以て萬國の民を治むるといふ事は、基督の王國にある事である。主

㊃（約十五〇十五）今より後われ爾曹を僕と稱ず。蓋僕は其主の行ことを知ざればなり。我さきに爾曹を友と呼り。我なんぢらに我父より聞し所のことを盡く告しに緣。

㊄（羅八〇十七）我儕もし子たらば又後嗣たらん 卽ち神の後嗣にしてキリストと偕に後嗣たる者なり。我儕もし彼と偕に苦を受なば彼と偕に榮をも受べし。

（提後二〇十二）我儕もし忍ばゞ彼と共に王と爲べし。我儕もし彼を知らずと言ば彼も我儕を知すといはん。

㊅（撒後一〇五）これ神の義 鞫 の表なり。爾曹をして神の國に入べき者とならしめん爲なり。爾曹いま神の國の爲に患難を受。

㊆（撒後一〇十）其時は 卽 ち主の臨りて其聖徒に由て榮光をうけ諸の信者に由て讚を得ん其日なり。爾曹も我儕の證を信ずる者なり。（また默十二〇五、十九〇十五。）

㊇（詩二〇八、九）われに求よ。さらば汝に諸々の國を嗣業としてあたへ地の極を汝の有として與へん。汝くろがれの杖をもて彼等をうちやぶり、陶工のうつはものゝ如くに打碎かんと。

は『福ある所の獨一の權威ある者諸〳〵の王の王もろ〳〵の主の主』として顯はるゝ事は、其王國に於てゝある。されば主は其國を以て來るとか又其榮光を以て來るといふ事は同じ事であつて、二ともなほ未來の事である。

彼等の或者は神の國を見た

しからば左の聖句は何と解すべきであるか、『誠に爾曹に告ん人の子その國を以て來るを見までは此に立ものゝ中に死ざる者あるべし』（太十六、〇二八）、『神の國の權威をもて來るを見まで』（可九、〇一）、『神の國を見まで』（路九、〇二七）

我等先づ第一に『死ざる者あるべし』との最後の句は、其處に立て居つた眞の信者は決して死を經驗せざるべしとの深い意味であると答へる。これは來二〇九にある言と同じ意味である。若し此意味でこれらの句を解するなれば、此語の成就は永遠に渉るべきものである。しかし茲に一言したい事がある。我等はこれに滿足せない。何故なればまでなる言は、或者が死するまでとか、又は靈魂と肉體とが分るゝといふ自然の死よりも、もつと深い意味のものであると信じて居るからである。

ペテロは神の國を見た

我等は今、其處に立て居つた或者が見たといふ事について、善く注意したいもので

ある。それから變貌山に行き、今我等は査べて居るところの聖言を言れてから後直に起りし所の光景を見たる所のペテロ、ヨハネ、ヤコブの眼を以て觀察したいものである。

視よ、主の聖顏は日の如く輝き、其聖衣は白く、雪の如くまた光の如く燦いて居る。主と偕に榮光の中に顯はれしモーセとエリヤを見よ。この崇められたる三人の語るところを聞れよ。それから無言の畏敬を以て拜する、超自然の榮光の雲が彼等を覆ふ、それより嚴かに語り給ふ神の聖聲を聞け、『此は我旨に適ふわが愛子なり爾曹これ

㋟ 提前六〇十四、十五）なんぢ我儕の主イエスキリストの現るる時まで玷なく責べき所なくして誠を守るべし。神その定め給へる期いたらば彼を顯さん。神は卽ち福ある所の獨一の權威ある者諸の王の王もろ〳〵の主の主。

（默十九〇十六）彼が衣と股に錄せる名あり曰く諸王の王諸主の主。

㋠ 約八〇五一、五二）われ誠に實に爾曹に告ん人もし我道を守らば窮なく死を見ざるべし。ユダヤ人かれに曰けるは今われらは爾が鬼に憑たる者なるを知。アブラハム既に死また預言者も死り。然るに爾いふ人もし我道を守らば窮なく死じと。

㋡（來二〇九）惟われら天の使等より少く遜されし者卽ち死の苦を受しに因て榮と尊貴を冠せられたるイエスを見たり。其死たるは神の恩に因て衆の人に代り死を嘗へんが爲なり。

に聽べし』。主に愛せられたる弟子等さへもこの超自然と威嚴と輝き渡る榮光の下に恐懼を以て戰慄したとは最の事である。弟子等に其再臨と王國との光景を示したるところのものは確にこの永遠に存在する我は在者なりであつた、彼等は然了解し、ペテロは殊に其を確證した。

『われら前に爾曹に我儕の主イエスキリストの能力と其顯れ給ふことを告るに巧なる奇談を用ざりき我儕は親しく其大なる威光を見し者なり至大なる榮光の中より聲ありて彼を呼こは我心に適ふ我が愛子なりと曰る此時われは神なる父より尊と榮を受たりわれら彼と偕に聖山に在し時この天より出し聲を聞り』(彼後一〇十六—十八)。

弟子等はかの携擧せられたる時に於て、未來の事に關し、如何ほど深く悟つたか、我等には分らない。しかし彼等は我等の主耶蘇基督は其國と榮光を以て來り給ふ事につきて特別なる異象を見た事は事實である。

ヨハネも神の國を見た

我等は今默示錄に目を轉ずるなれば『今在し昔在し後在す者』なる主はヨハネに最も明瞭に神の國を見るべく(默一〇二、)許し給ひし事を見るものである。彼が携へ擧られて見たる異象は數世紀に亘つたものであつた。彼には時は全く無關係で、彼はたゞ

其文字通の事實を見たのみであつた。彼は實際に其を見たのである。彼は三十六回『我見しに』と言ひ、七回『我視しに』と言ひ、五回『我眺しに』と言ふて居る、(英譯による)。他にも此に類する句が夥多ある。彼は左の聖句に記したる所の事を見たのであつた。

『我また天の闢を觀しに一匹の白馬あり之に乘るもの忠信また誠實と稱らる彼は義を以て審判と戰爭を爲せりその目は火焰の如く其首は多の冕を冠れり……かれ血に染たる衣を纏へり彼の名は神の言と云ふ天にある諸軍皎く輝ける細布をき白馬に乘て之に從へり……彼が衣と股に錄せる名あり曰く諸王の王、諸主の主。』

彼は獸と地の王等が集められ、取られて、火の池に投入らるゝのを見た。またサタンが縛られ、基督と其聖徒が千年の間地に王たるのを見た。彼は又我等は今査べて居る所の聖句の中にある事柄が悉く成就したのを見た。(默十九)。(〇二十)。

パウロも神の國を見た

パウロは榮光の中にある基督を見た。ヨハネが見た所のものは皆見、多分其よりもつと多く見たらう。何故なれば彼は人には言ふ事が出來ないところのものを見たとあ

(約八〇五八)イエス彼等に曰けるは誠に實に爾曹に告ん我はアブラハムの有ざりし先より在者なり。

るからである。（哥後十二〇四）。これらの事は耶蘇が或者が見ると仰せ給ひし事の文字通の成就であつて、疑問の聖句をば滿足するやうに説明するところのものである。

爾曹イスラエルの諸邑を廻盡さゞるべし

以上の説を維持せんとて、また別の聖句が引照されて居る。即ちペンテコステの日に於る靈的再臨またはエルサレムの滅亡に於る譬喩的再臨等と、『我まことに爾曹に告ん爾曹イスラエルの諸邑を廻盡さゞる間に人の子は來るべし』（太十〇二三）との聖句である。

これに對して我等はかく答ふる。これは耶蘇が其弟子等を二人宛遣はした時に十二の弟子に語り給ひし事で、殊にイスラエル人に限つて傳道する事を命じ給ふた時である。㋐可六〇三十と路九〇十を見るなれば、彼等は勿論諸邑を廻り盡さゞる間に主の許に歸つて來たのである。また彼等は同じ方法で『㋑天國は近けり』と宣傳しつゝ、諸邑を恒に訪ふたといふ證據は一もない。實は彼等には出來なかつた。何故なればイスラエル人は其王を拒んだから、王國は、㋒ある貴者が領地を受て歸んとて遠國へ往たやうになつた。

しかしまでといふ言の語勢から考へて見ると、神の言は不信のイスラエル人に對し、（多分敎會が携へ擧られてから後に二人の證者に由て）新に傳へらるゝと信ずる。其時

イスラエル人は故國に歸つて、㋓ユダヤ主義を再興するのである。彼等は再建したる諸邑を廻り盡さゞる前に神の子は再び顯はるゝのである。

第十二、未來につける心細き思想

此敎理は未來について心細き思想を抱かしむるものであると言て反對する人があ る。其人等の説によれば「これは絶望の哲學である」、一般の思想即ち此世は漸次良く

㋐（可六〇三十）使徒等イエスに集りて行へる事と敎し事とを悉く彼に告。
（路九〇十）使徒たち歸來りて其行しことをイエスに告。イエス彼等を携ひて潛にベテサイダと云る邑の邊なる野に退けり。

㋑（太十〇七）往て天國近に在と宣傳よ。

㋒（路十九〇十一、十二）衆人この言を聞る時また譬を設て曰り。此はエルサレムに近かつ衆人神の國ただちに顯明るべしと意が故なり。ある貴者みづから領地を受て歸んとて遠國へ往とき云々。

㋓（賽四十〇九—十一）よき音信をシオンにつたふる者よ、なんぢ高山にのぼれ、嘉おとづれをエルサレムにつたふる者よ、なんぢ強く聲をあげよ、こゑを揚ておそるゝなかれユダのもろ〳〵の邑につげよ、なんぢらの神きたり給へりと。みよ主エホバ能力をもちて來りたまはん、その臂は統治めたまはん、賞賜はその手にあり、はたらきの値はその前にあり。主は牧者のごとくその群をやしなひ、その臂にて小羊をいだき之をその懷中にいれてたづさへ乳をふくませる者をやはらかに導きたまはん。

なつて居るといふのに反對するものである。あるとの事である。また「若し此教理が眞理ならば、我等は寧ろ手を拱いて基督の再來するのを待つがよい」と皮肉な事を言ふ人もある。

公平に考へて見ると、かゝる反對論を起す人々は全く千年期前再臨論者の精神と行爲とを誤解して居るのである。

我等は失望しない

我等は失望もせず、空しく手を拱して眠るやうな事もせない。其反對に、我等は活る望（彼前一〇三）即ち最も福なる望（十三多二〇）を有されて居るのである。其間に我等は此世即ち俗化せる、罪に充る、姦惡なる世、詛に近く其終は焚るべき世から、數人を救はんとて努力するのである。

我等は世は益々良くなりつゝ居るといふ幻想を以て人々を欺く事をする者でない。使徒ヨハネは『我儕は神につき擧世は惡者に服するを我儕は知』（約壹五十九）と申された。されば我等は聖書の明らさまなる言を以て人々に語り、彼等は滅亡に至る濶き路に居るから（十三太七〇）、彼等は悔改めなければ沈淪ると告るものである。路十三〇三。なほ進んで、此世は一度洪水を以て洗はれたが、『今の天と地を蓄へ之を火にて焚ん爲に神

を敬はざる人を審判する淪亡の日まで存せり』（彼後三〇五—七）と告るものである。

我等は來らんとする天國の善き音信なる福音を信ずるにより、此恐しき運命より救はれ、『キリストと偕に後嗣となり』（羅八〇十六、十七）『我儕の爲に天に藏ある……嗣業を得しめ……信仰に由て神の能に護られ已に備ある所の末時に顯れんとする救を得なり……イエス、キリストの顯れ給ふ時に……來らんとする恩惠を疑はずして望』（彼前一〇四、五、十三）んで居る人のある事を喜ぶものである。

實に來らんとする運命について確固たる思想を有て居る事は、かの事物は益々進歩し、世は益々良くなつて居るといふ氣休の虛僞に比すれば、人の行動に對して遙かに

㋐（加一〇四）キリストは我儕の父なる神の旨に循ひ今の惡世より我儕を救出さんとて我儕の罪の爲に己が身を捨たまへり。

（來六〇八）然ど荊棘と蒺藜を生ぜば棄られ且詛に近く其終は焚るべし。

（馬四〇一）萬軍のエホバいひたまふ視よ爐のごとく燒る日來らん、すべて驕傲者と惡なおこなふ者は藁のごとくにならん、其きたらんとする日彼等を燒つくして根も枝ものこらざらしめん。

㋑（徒十四〇二一、二二）斯てその邑に福音を傳へ多の人を弟子となし又ルステライコニオムアンテオケに返り、弟子等の心を堅し其常に信仰に居んことを勸め、又おほくの艱難を歷て我儕が神の國に至る可きことを歎ふ。

大なる刺戟を與ふるものである。

此事は基督の千年期前再臨を信ずる所の教職、傳道者または平信徒の熱心にして忠實なる行動によりて、明白に證據立てられて居る事である。

千年期前論者は今の惡き時代（加一四）に於て、世が悉く悔改するとは望んで居らないのは實の事である。しかし彼等は平和の千年時代が來る事を信じ、『曲れる邪なる時代に在て……生命の道を保ちつゝ光の如く世に顯はれ』（腓二〇十、五、十六）、㊥新郎を迎ふる備をなす所の敬虔なる團體を增んがため、或燃柴を火の中より攫み出す爲に（馬四〇一、哥前三〇十三―十二五、猶二十三）努力する人々である。

しかるに何故この聖書的教理を傳ふる所の者は痛く反對せらるゝのであるか。彼等も同じく㊥基督の體に屬る者でないか。彼等は教會より最も温かき同情と祈禱を受るに足らぬものであるか。彼等は初代の教會の如く、使徒の言傳（賜はりし教）を有てる爲め、また基督の再來を信じて居るために、罰せらるべき者であらうか。決して然でない。我等は賓旅また寄寓者（來十一三）であつて、我等の國籍は天に在ることを忘れてはならぬ、（腓三〇）。また我等は『愛をもて眞理を行ひ……愛に由て德を建る』（弗四〇十五、十六）やうにし、『愛を以て行ひ』（弗五〇二）、また『機を窺ふべし是時惡ければなり』。

時惡ければ也

然り、時が惡い。此教理は今の惡き時代にありては未來を心細く思はしむる者と承認すべき事である。罪人の居る此世は不信仰に充ち、基督と㊥その民又其救に對して根本

㊥（太二五〇十―十三）かれら買んとて往しさき新郎きたりければ既に備たる者は之と偕に婚筵に入しかば門は閉られたり。斯て後その餘の童女きたりて曰けるは主よ主よ我儕の爲に開たまへ。答て我まことに爾曹に告ん我は爾曹を知ずと曰り。然れば愈らすして守れ（爾曹その日その時を知ざれば也。

㊥（哥前十二〇二五、二六）これ體のうち分事なく諸の肢たがひに相顧み扶けん爲なり。もし一の肢くるしまば諸の肢ともに苦み一の肢たふとばれなば諸の肢ともに喜ぶなり。

㊥（弗五〇十五、十六）然ば爾曹つゝしみて行を堅くすべし智らざる者の如くせず智者の如くし。機を窺ふべし。是時惡ければ也。

㊥（哥後六〇十四―十八）なんぢら不信者と耦なかれ。蓋義と不義と何の侶なることか有ん。光と暗と何の交ることか有ん。キリストとベリアルと何の合ことか有ん。信者と不信者と何の干ることか有ん。神の殿と偶像と何の同きことか有ん。夫なんぢらは活神の殿なり。神嘗て我かれらの中に住り且あゆまん。我かれらの神となり彼等わが民とならんと曰給ひしが如く、又なんぢら彼等の中より出て之を離れ污穢に捫ることなかれ。我なんぢらを納ん。われ爾曹の父となり爾曹わが子女と爲へしと曰る是全能の主の言なり。

（弗五〇十一、十二）なんぢら果を結ばざる暗行に與することなく反て之を責へし。彼等が隱にて行ふ所の事は之を言だにも愧べき事なり。

（約壹二〇十五）この世あるひは此世にある物を愛する勿れ。人もし此世を愛せば父を愛するの愛その裏に在なし。

的に反對するものである。彼等は神が和かんとて惠によりて行し給ふ事を拒み、狂人の如く怒の日に向て突進して居るのである。(默六〇十五—十七)。

しかし『前に立ところの望を執んとて怒を避たる』者にとりては、これは少しも心細き事でない。彼等は『子たる者の靈』を受たる者で、子であつて、又『神の後嗣にしてキリストと偕に後嗣たる者』である。『今時の苦は我儕に顯れん榮に比ぶべきに非ず』(羅八〇十五—十八)として居る人々である。

今世の人が善と惡とを計算する一般の遣方を見るに、藝術と科學の勝利、發明、發見等の進歩を以て道德上の善事と勘定し、平均すれば、世は良くなりつゝ居るといふ結論に達して居るやうである。

しかし此は全く誤謬で、サタンの大僞計である。

教會と此世

一、一體眞の教會と此世とを一所にして平均を取るなどの事はあるべきものでない。此二には少しも由緣がないものである。一は地より出で、他は天より出たもので、一は此世に屬るもの、他は此世に屬て居ないものである(約八〇三)。彼等は同し軛の下に

居るべきものでなく、友誼も交通も符合も一致もあるものでない。彼等は相分れて居るべきものである。眞の教會は世に居る。しかし其に屬て居る者でない。此世には三

㋙(哥後五〇二十、二一)是故に我儕召れてキリストの使者となれり。卽ち神われらに託なんぢらを勸め給ふが如し。我儕キリストに代て爾曹が神に和かんことを爾曹に求ふ。神罪を識ざる者を我儕の代に罪人となせり。是我儕をして彼に在て神の義となることを得しめん爲なり。

㋚(來六〇十八—二十)神の誑ることの能ざる此二件の易なきことは前に立ところの望を執んとて怒を避たる我儕を慰めんが爲なり。我儕が此望は靈魂の錨の如し堅固して動かず幔の内に入。我儕の爲にイエス前驅して其處に入メルキセデクの班の如く窮なく祭司の長となれり。

㋛(約十七〇十一—十六)われ今より世に在ず彼等は世になり我は爾に就る。聖父よ爾の我に賜し者を爾の名に在しめ之を守て我儕の如く彼等をも一になし給へ。我かれらと偕に在し時かれらを爾の名に在しめて之を守たり。爾の我に賜し者を我守りしが其中一人だに亡たる者なし。唯沈淪の子ほろびたり。是聖書に應せん爲なり。我いま爾に就る我世に在て此事を語れるは我喜樂を彼等に充しめん爲なり。われ爾の道を彼等に授たり。世は彼等を惡む。蓋わが世の屬に非ざる如く彼等も世の屬に非ざれば也。われ爾に彼等を世より取たまへと祈らず。惟かれらを守て惡に陷らす勿れと祈る。われ世の屬に非ざる如く彼等も世の屬に非ず。

派ある。即ち猶太人と異邦人と神の敎會である。猶太人は區別せられ、選み出された
る特別の民であるから、列國民の中に算へ入るべきものでない。その如く眞の敎會も
區別せられたる特別の民で、聖潔に召かれ、救の日の爲に神の靈によりて印せられ、
（弗四〇、三十）最早暗黑の子でなく『光の子』であり、『果を結ばざる暗行に與すること』（五弗
〇八一、十一）なきやう敎へられたるものである。彼等は神につき、擧の世は惡き者に屬て居
る、（約壹五、〇十九）。此二者の間には解く事が出來ない爭鬪があつて、到底調和する事が出來
ない。反つて此二者の主義も傾向も絕對的に相反して居る。されば此二の者を同一體
の者として話す事は極めて不合理の事である。

藝術、科學及び發明

二、藝術と科學の勝利、發見及び發明の進步なるものは敬虔の增加と言ふべきもの
でない。

今日科學と哲學に於て著名なる人の多は、其中の最高の地位に居る人でも公然の不
信者である。全くの不信者ではなくても、大多數は耶蘇基督の神性を否定する連中
である。

基督敎徒中の樂天家が、彼の喇叭の囂々たる中に於て、此重大なる事實を視損ふと

は奇怪なる事である。歷史は同じ證を立て居る。ダビデとソロモンの能力と榮華と智
慧の次にはアハブとマナセの偶像崇拜と無辜の血が流され、遂にエルサレムの滅亡と
なり、バビロンに捕へ移さるゝやうになつた。

㋷（哥前十〇三二）ユダヤ人をもギリシヤ人をも亦神の敎會をも礙かする勿れ。

㋸（出十九〇五、六）然ば汝等もし善く我が言を聽さわが契約を守らば汝等は諸の民に愈りてわが寶となる
ろべし。全地はわが所有なればなり。汝等は我に對して祭司の國となり聖き民となるべし。是等の言語を
汝イスラエルの子孫に告べし。

（出三三〇十六）我と汝の民とが汝の目の前に恩を得ることは如何にして知るべきや。是汝が我等と
ともに往たまひて我と汝の民とが地の諸の民に異る者となるによるにあらずや。（また申七〇六、詩一三五〇四。）

㋺（民二三〇九）磐の頂より我これを觀岡の上より我これを望む。この民は獨り離れて居ん。萬の民の中列
ぶことなからん。

㋻（多二〇十四）キリスト我儕の爲に己の身を舍給へり。是我儕を諸の罪より贖ひ出し且己の爲に一
民を潔め之をして熱心に善事を行はしめん爲なり。

（彼前二〇九）爾曹は選れたる族王なる祭司聖民神に屬る者なり。此は爾曹をして召て幽暗より出し
其異光に入給ひし者己の德を顯さしめん爲に爾曹を此の如き者となし給へる也。

㋼（哥後七〇一）然ば愛する者よ我儕この約束を得たれば肉と靈の凡の汚を去て自己を潔くし神を畏れて聖
潔ことを成就すべし。

また前五〇二五—二七。

ヘロデが建たる宮殿は建築術の最秀なるものゝ一であつた。其は華麗を以て輝き、其禮拜も壯嚴なるものであつた。當時のユダヤ人は學術に於て殊に秀でたものであつたが、主耶蘇を十字架に釘て殺した。

希臘人は文學、詩歌、藝術に於ては、凱旋の絶頂に達して居たが、其知識によりては神を見出す事が出來なかつた。神は彼等には識ざる神であつた。此事は哥前一章から三章までに明白に書れてある。『世人は己の智慧を恃て神を知ず是神の智慧に適へるなり是故に神は傳道の愚なるを以て信ずる者を救を善とせり』(一〇)。其困難は頭にあるのでなく、心情にあるのである。如何ほど學問したにしても、其人は新しき心を有ねばならぬ。これは教會に由て得らるゝものでなく、神の靈の行動に由るものである。コリントに於て神の恩を受たる人々は肉に於ては慧き人が少なく、むしろ賤しき者、藐視らるゝ人々であつた。『天地の主なる父よ此事を智者と達者とに隱して赤子に顯し給ふを謝す』(路十〇)と耶蘇は言給ふた。

此世は智慧や哲學や(西二〇八)科學と僞り稱ふるもの(〇二十)によりて神をば決して見出し得るものでない。此事については我等は現今の合理說、無宗教又は無神論によりて其證據を見出して居る。其服裝は如何に優美で、光彩を放ち、婉麗であつても、かの

『光明の使』として顯はれ得る惡魔の有毒なる好計である。誠にサタンは神の大敵である。今の惡き世に於ては(加一四)、此世は惡魔の權下に居り(約壹五十九)、而して惡魔は其好計を以て神の民を惱し、『政また權威また斯世の幽暗を宰る者』(弗六〇十一—十三)を備へて神の民に逆ふ事をして居る。されば基督信者は『この世或は此世にある物を愛する勿れ人もし此世を愛せば父を愛するの愛その衷に在なし凡そ世に在もの即ち肉體の慾眼目の慾また勢より起る驕傲これらは皆父より出るに非ず世より出るものなり』(約壹二〇十五、十六)

世は益々良くなつて居らない

そこで神に眞向から反對し、其大敵の直轄のもとにある此惡き世は良くなりつゝ居

(徒十七〇二三)われ途を行とき爾曹が敬拜ところの者を見しに識ざる神にと刻書し一の祭壇を見出せり。故に爾曹が識ずして敬ふ此者を我なんぢらに示さん。

(哥後十一〇十三—十五)かの輩は僞の使徒また詭譎を行ふ者にしてキリストの使徒の貌に變じたる者なり。これ奇しき事に非ず。サタンも自ら光明の使の貌に變ずるなり。是故に彼の役者たとひ義の使者の貌に變ずるとも大なる事に非ず。彼等の終は必すその爲ところに應ふべし。

るものでない。其反對に㊀審判と火と沈淪とが其前にあるのである。㊁危險なる時が來らんとして居る。『惡人と人を欺く人は益〻惡に進み人を惑し亦人に惑さる』。稗子は麥よりも速く育ちて、それは收穫の時まで續くものである。(太十三〇四十)。使徒時代に於て既に働いたところの『不法の隱たる者』は『罪の人』即ち人格を有せる僞基督に至りて其頂上に達し、㊂彼は主御自身が個人的に顯はれて滅亡すにあらざれば滅亡ないやうな大なる者となり、世界的の權威を以て支配するやうになる。

王なる基督が來る外に此世には望がない。此約束の故に神を讃美せよ。主は此時代の終に來り給ふのである。而して僞基督は滅亡さるゝやうになる。(撒後二〇八、九)。㊃凡て礙となる物は斂められ、正義の千年王國は地上に建らるゝやうになるのである。されば今の惡き時代にありては此世をば心細く眺るけれども、來るべき王國には輝ける榮光の望がある。

文明と慈善事業

しかし世は文明開化と慈善と個人の自由と萬國民の親密と基督教の事業等に於て、大に進歩したと主張する者がある。其證據として、奴隷の廢止、異端糺問所や其が爲

の殉教の中止、救濟所の設立、郵便及び商業上の交通の制度が蒸瀛及電氣の力によりて出來る事、又陪審制によれる裁判權、國際的媾和、宣教運動の勝利なども引照せらるゝのである。

これに對して先づ答ふる事は、文明開化は聖潔の源でないといふ事である。これは

㊀(彼後二〇二、三)また多の人かれらの好色に效はん。眞道これに由て謗讟を受ん。かれら貪婪心に由て造言を設け爾曹より利を取んとす。彼等の審判は昔より定あれば遲からじ。彼等の淪亡は寐ず。(彼後三〇七)それ神は其言を以て今の天と地を蓄へ之を火にて焚ん爲に神を敬はざる人を審判する滅亡の日まで存せり。　また猶七、可九〇四三—四八。

㊁(提前四〇一)然ども靈明かにいふ後に至らば或人信仰の道より離れて人を惑す靈と惡鬼の教に心を寄ん。

(提後三〇一)末世に艱の日きたらん爾この事を知。

㊂(約五〇四三)我は吾父の名に靠て來しに爾曹われを接ずもし他の人おのが名に靠て來ば爾曹これを接ん。　また雙二十八〇十五—二二。

㊃(撒後二〇八、九)其時に至りて不法の者あらはるべし。主イエス其口の氣を以て彼を滅さん。其臨るとき發す所の榮光を以て彼を廢せん。彼サタンの行爲に循ひて各樣の僞なる能と徵と奇跡云々。

㊄(太十三〇四一—四三)人の子その使者たちを遣して其國の中より凡て躓礙となる者また惡をなす人を歛めて、之を爐の火に投入べし。其處にて哀哭切齒することあらん。此とき義人は其父の國に於て日の如く輝かん。耳ありて聽ゆる者は聽べし。

頭腦を向上せしむるけれども、心情には達かぬものである。鍍金せる罪惡の宮殿は不善の暗き洞穴の如く、必然地獄へ陷るの門である。

教育を受たる科學的の無神論者は盜賊または殺人者の如く正にサタンに事ふる者である。耶蘇は曾て『我と偕ならざる者は我に背く者なり』(太十二、〇三十)と言て彼等を區別した。さればかの老蛇が如何ほど多く光明の使の如く顯はれても、また此世は如何ほど文明になつても構はない、サタンは依然として惡魔であり、此世は依然として世である。

彼の顯はれ方や方法が變るかも知れない、しかし暗黑の靈としては同じものである。されば奴隷賣買は無なつたにしても共產主義、社會主義又は虛無主義のやうなものが其無神無主權の形を發揚しつゝある。異端者虐殺時代よりも尙暗黑とならんとせる前兆がある。慈善事業と平行して、壓制的獨占、組織立つた官金私消及び詐欺が行はれて居る。郵便驛遞の法は新聞を運び通信するには極めて有益であるけれども、亦猥褻なる文書を洪水の如くに漲らすに極めて都合のよい使者であつて、青年の道德を害することが多い。陪審裁判法は善い制度であるけれども、たゞ形式に止まり、罪人を逃すやうな事がある。曾て宣敎の爲に道を開ひた國民が支那數百萬の生靈をして阿片の

恐るべき誣に罹らしめた。

外に於ては宣敎運動は大に祝福せられた（これ神に感謝すべき事である）のに、內には法王無過失說、儀式固執主義、懷疑說、また主の日を守らざる事などが一層其勢威を增して居る。この法王無過失說のやうな妖怪的假說が曾て基督の使徒的敎會であつたものゝ中に勝利を得て居るといふ事は忘れてはならぬ。

前世紀は戰爭と殺人を以て充された。今日に至つても、數々流血の慘狀を呈して居る。手短かに言ば、サタンは今油斷なく監視せられ、餘命いくばくもないから、各方面に向つて其詐欺を逞くし、千年王國の始に於て天使によりて鏈を以て縛らるゝまで、其惡事を繼續して行くのである。

教會は進步しつゝあるか

㊙（默二十〇一—三）われ一人の天使底なき坑の鑰と大なる鏈を手に携へて天より降るを見たり。かれ惡魔と稱へサタンと稱る龍すなはち老蛇を執て之を千年のあひだ縛置んとす。之を底なき坑に投入れ閉こめて其上に封をなし千年過るまで諸國の民を惑すこと莫らしむ。其後かならず暫時のあひだ釋放さるべし。

三、㊐基督信者は世の光また地の鹽なれば、信者と唱ふる者が大に殖たのは、即ち光と鹽が增加したのであるから、從つて此世もよくなつて居らねばならぬと、論ずる者がある。

耶蘇は實に世の光であつた。しかし彼は暗に照つた。而して暗は之を曉らなかつた。世の人は暗を愛し、之に執着したから、㊑その行の惡に因て光を見ることを欲まなかつた。されば其光に因て世がよくならなかつた。されば眞の基督信者なる者は天よりの光を反射するもので、其周圍にある暗黑を强くするのみである。暗は依然として暗で、改善せらるゝものでない。罪人は罪を棄て光に來る外に、救はるゝ道があるものでない。

鹽其味を失ふこと

主耶蘇は鹽が其味を失ひて何の役にも立たなくなり、又は斗の下に光を隱すべきものでないと言ひ給ふたが、これは注意すべき事である。また『爾曹心の中に鹽を有て』(可九〇五十)と勸め給ふた。ユダヤ人は確に其味を失ひ(太五〇十三)而して㊒折れたのである。そこで此嚴肅なる質問が起つて來る、所謂敎會なる者は信仰と其靈的生涯に於て進歩して居るか或は退歩して居るかとの事である。

㋐神の王國の奧義と基督が再來するまでの基督敎國の狀態については馬太傳十三章の譬喩について敎へられてあると我等は信ずる。

この譬喩

「種蒔の譬喩は神の言が種々にまた不完全に受納らるゝを示し、稗子の譬喩は聖徒中

㋑(太五〇十三)爾曹は地の鹽なり。鹽もし其味を失はゞ何を以か故の味に復さん。後は用なし。外に棄られて人に踐るゝ而已。

(腓二〇十五)これ爾曹が玷なく雜なく神の子となり曲れる邪なる時代に在て責べき所なからん爲なり。爾曹は此時代に在て光の如く世に顯はる。

㋒(約一〇四、五)之に生あり此生は人の光なり。光は暗に照り暗は之を曉らざりき。

(約三〇十九—二一)罪の定まる所以は光世に臨しに人その行の惡に因て光を愛せず反て暗を愛すれば也。凡て惡をなす者は光を惡み其行を責られざらんが爲に光に就らず。眞理を行ふ者は其行の顯れんが爲に光に就る。蓋神に遵て行へば也。

㋓(羅十一〇二十、二一)然ど彼等の折れたるは不信仰により爾が立るは信仰に因なれば誇ること勿たゞ戒懼よ。蓋神もし原樹の枝をさへ惜まずば恐くは爾をも惜まじ。

㋔(太十三〇十、十一)弟子等きたりて彼に曰けるは何故に譬をもて彼等に語り給ふや。答て曰けるは爾曹には天國の奧義を知ことを予たまへど彼等には予へ給ざれば也。

にサタンが居るので早くよりまた續ひて生ずる結果を示し、芥種の譬喩は罪惡を隱蔽する所の外部の發達を示し、麪酵の譬喩は眞理が漸次にまた全く腐敗する事を示し、畑に藏れたる寶の譬喩はイスラエルが此世の中にある事を示し、價貴き眞珠の譬喩は教會が基督に對して如何なるものであるかを示し、網の譬喩は基督の再臨の時其王國を潔むる事を示したものである。」

麪酵の譬喩

これらの譬喩の註釋については別に異論がなからうと思ふ。しかし麪酵の譬喩については反對がある。即ち福音と基督信者の生活に顯はるゝ能力と勢力が、世界の大多數に滲み渡つて、遂に全部が聖化するに至るといふ解釋とは全然異ふて居るのである。この反對は種蒔と稗子との二を考へて見ても分る。この二の譬喩は二とも罪惡は此時代の末期に至るまで存しなほ生長するといふ事を最も明確に示したものである。これは此句と之に關する他の句にある麪酵の模型的意義を示すに就て十分なる聖書的理由である。この麪酵については他にも澤山の句があり、其が皆惡の腐敗的勢力と死の表として用ひられてある。注意して太十六〇六—十二を見られよ。

そこで我等は最も力強くかく教へられて居る。即ち此世は益々良くならないのみな

㋐(路十三〇二十、二一)又いひけるは我神の國を何に譬んや。麪酵の如し。婦これを取て三斗の粉の中に納せば盡く發出すなり。

㋑(太十六〇六—十二)イエス彼等に曰けるは戒心してパリサイとサドカイの人の麪酵を愼めよ。弟子たがひに論じて曰けるは是パンを携へざりし故ならん。イエスこれを知て曰けるは信仰うすき者よ何ぞ互にパンを携へざりしことを論ずる乎。未だ悟らざるか。五千人に五のパンを予しとき幾籃ひろひしか。また四千人に七のパンを予しとき幾籃ひろひしや。爾曹これを記ざるか。パリサイとサドカイの人の麪酵を愼めとはパンにつきて言へるに非るを何ぞ悟らざる。是に於て弟子その麪酵にはあらでパリサイとサドカイの人の教を謹めと言へるなるを悟れり。

(可八〇十五)イエス彼等を戒めて曰けるは戒心してパリサイの人の麪酵とヘロデの麪酵を愼めよ。

(路十二〇一)そのとき數萬の人々相踵あふ程に集れり。イエス先弟子に曰けるは爾曹パリサイの人の麪酵を謹めよ是僞善なり。

(哥前五〇六—八)爾曹の誇るは宜しからず。少許の麪酵その全團をみな發すを知ざる乎。爾曹は麪酵なきが如き者なれば舊き麪酵を除きて新しき團塊となるべし。夫われらの逾越すなはちキリストは既に宰れ給へり。然ば我儕舊き麪酵を用ず、また惡毒と暴很の麪酵を用ず、眞實と至誠なる無酵麪を用ゐて節を守るべし。

(加五〇七—九)なんぢら前には善走りたり。誰が爾曹の眞理に循はざるやう阻ることを爲しや。その勸は爾曹を召者より出るに非ず、少許の麪酵は全團をみな發しむ。

らず、所謂教會さへも其鹽氣を失ふて、名ばかりの微溫いものとなり、たゞ主の口より吐出さるゝのみであるとの事である。神の聖言の全教訓は皆これと符合するものであると我等は信ずるものである。

この眞理なる事を知る爲に現今の教會を偏見を有ずに觀察すれば分る事である。かの有名無實の教會に屬る諸派が靈力に缺て居るのは、眞理を受入れなかつたからでなく、虛僞の教理を吸ひ込み、其が內部で業をなしたる爲で、其が麪酵の如く全體を發ましたのである。羅馬のある普通の監督が少しづゝ無過失の法王となつた事、偶像を拜む事、懺悔室で懺悔する事、俗化または千年期後再臨說などが、僅少の麪酵が粉全體を發ましたやうに、驚くべき發達をしたるものである。

かの大なる羅馬教會と希臘教會の壯嚴と儀式張る事と人氣に投合する事と今日の靈的虛弱をば、かの賤められたるナザレ人と其弟子に比べ、或は最初の二世紀間の迫害せられ、聖別せられ、また敬虔的なる集會（エクレシア）に比べたならば如何であらうか。

又今日の福音的の諸教派が此世と妥協し又は其中に聖書の天啓に關して疑惑が益々這入り込で居るのが同一の方向に傾く危險に居るのでなからうか。其會員中にこれよ

り離れて聖潔に入らんと叫んで居る者は實に僅少である。これを以て見れば、何人でも諸教會の中に行渡つて居る麪酵の腐敗力を見逃す事は出來ない。

我等はこれが實に恐るべき事實である事を確めて居る。かゝる事を語るは快きものでない。しかしノアの說教が之を耳にしたる當時の人々に不快であつたが、其は事實となりて顯はれ、洪水は來つた。その如くエレミヤの預言は極めて不快なものであつたが、其は眞實であつて、エルサレムは恐るべき運命に陷り、バビロニヤに俘虜となつた。(ヒ)耶蘇の說教は非常に激烈なものであつたが、其は眞實であるではないか。されば

(ヨ) 默三〇十六）爾すでに溫然して冷かにも有ず熱くも有ず。是故に我なんぢを我が口より吐出さんとす。

(タ)（約壹四〇十七）此の如く我儕の愛全備を得て鞠日に懼なからしむ。蓋主の如く我儕世に在ばなり。

(レ)（太十一〇二十—二四）厥時イエス多の異能を行たまひたる諸邑の悔改めざるに由て責いひけるは、あゝ禍なる哉コラジンよ。噫禍なる哉ベテサイダよ。爾曹の中に行し異能を若ツロとシドンに行しならば彼等は早く麻を衾灰を蒙りて悔改しなるべし。われ爾曹に告ん審判の日にはツロとシドンの刑罰は爾曹よりも却て易からん。既に天にまで擧られしカペナウンよ又陰府に落さるべし。蓋なんぢに行し異能を若ソドムに行しならば今日までも尙保存しならん。我なんぢらに告ん審判の日にソドムの地は爾よりも却て易かるべし。

（太十八〇七—九）此世は禍なる哉そは躓かする事をすればなり。躓く事は必ず來らん。然ど躓を

來らす者は禍なる哉。若し爾の手なんぢの足おのれを礙かさば斷て之を棄よ。兩手兩足ありて盡さる火に投入られんよりは跛または殘缺にて生に入は善なり。もし爾の眼おのれを礙かさば拔出して之を棄よ。兩眼ありて地獄の火に投入られんよりは一眼にて生に入は善なり。

(太二三〇十三—十五、二七、三一—三三)噫なんぢら禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ。蓋なんぢら天國を人の前に閉て自ら入ず且いらんとする者の入をも許さゞれば也。噫なんぢら禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ。蓋なんぢら嫠婦の家を呑いつはりて長き祈をなす。之に由て爾曹最も重審判を受べければ也。あゝ禍なるかな僞善なる學者とパリサイの人よ。蓋なんぢら徧く水陸を歴巡り一人をも己が宗旨に引入んとす。既に引入れば之を爾曹よりも倍したる地獄の子と爲り。……噫なんぢら禍なる哉僞善なる學者とパリサイの人よ。爾曹は白く塗たる墓に似たり。外は美しく見れども内は骸骨と諸〻の汚穢にて充。……然ば爾曹は預言者を殺し者の裔なることを自ら證す。なんぢら先祖の量を充せ。蛇蝮の類よ爾曹いかで地獄の刑罰を免れんや。

ば我等は謙遜に又忠實に神の言を宣傳したいものである、大に叫びて聲を惜みたくないものである。而して暗黑の日が來つりゝある事を信ずる我等は、異端の敎會と反逆と血を流せるイスラエルと罪の世に向ひて叫ぶべきである。

忠實なる遺れる者

しかし不信者に取りては實に凄き暗黑中にありても、忠實なる者に取りて輝ける榮

光の望がある。神は常に忠實なる遺れる者を有ち給ふた如く、今後も有ち給ふのである。盲目不信のイスラエル人中にもメシヤを待ち望み之を受入た者があるやうに(二路〇)、敎會の中にも來らんとする新郎を待望み(〇十撒前一)、また之を歡迎する者がある事と思ふ(太二十五〇十)。イスラエル人中の遺れる者が暗黑と火の中を通り(亞十三〇九)、而して彼等の王を受る事になるであらう。(亞十二〇十、羅九〇二、十一〇二五、二六)。また異邦人即ち不信の世人の中にも遺れる者があつて、主を求るやうになるであらう。

榮光神にあれ、主は來りて其榮光の位に座し給ふ時、この暗黑は其翼に醫す能を有する義の太陽が昇り來る時に逃去るのである。かの平和と榮光の輝ける千年王國時代には、主の家の山は堅立ち、諸の國民は流の如く之に就くのである。(賽二〇一—六、米四〇一—五を讀れよ)。

(賽五八〇一)大によばゝりて聲殘をしむなかれ。汝のこゑをラッパのごとくあげ、わが民にその愆をつげヤコブの家にその罪をつげしめせ。

(耳一〇十五)あゝその日は禍なるかな、エホバの日近く暴風のごとくに全能者より來らん。(歴五〇十八—二十)エホバの日を望む者は禍なるかな。汝ら何ぞエホバの日を望むや。是ば昏くして光なし。人獅子の前を逃れて熊に遇ひ又家にいりてその手を壁に附て蛇に咬るゝに宛も似たり。エホバの日は昏くして光なく暗にして耀なきに非ずや。(彼後二〇十七)此輩は水なき井なり。狂風に逐るゝ雲なり。黑暗われらの爲に窺なく存れり。

(提後四〇二—四)なんぢ道を宣傳ふべし。時を得も時を得ざるも勵みて之を務め各樣の忍耐と敎誨を以て人

此時代は『今の惡き世』（加一〇四）に續き來るもので、受造者さへ『みづから敗壞の奴たる事を脫れ神の諸子の榮なる自由に入ることを』（羅八〇二一）得るのである。『かくてわが聖山のいづくにても害ふことなく傷ることなからんそは水の海をおほへるごとくエホバを知の知識地にみつべければなり』（賽十一〇九）。

愈れる日來る、長く約せる朝なり、
時に武裝せる正義は聖き力を以て罪惡を一掃せん。
時に主なる神、諸人の悲しき叫を聞き給ひて、
程なく正しき審判の御手を凡の國に伸べ給ふべし。

驕れる虛言者の高慢は、更に空中に顯れず、
老若とも眞理を愛して、之を何處にも宣傳ふるに至らん。
亳も缺乏と悲哀より來る絕望の叫聲なく、
程なく爭は止み、全き平和は盛んになるべし。

オーかの聖き曙！これ我等目醒て、待望み、祈るところのもの、
かくて朝の光は憂愁を驅逐する時にまで至らん。
而して天の榮光天地を漲らす時、
程なく我等は聖語の故に主を崇め主を讃美すべし。

を督し戒め勸むべし。それ人眞の教を容す耳を悅ばしむる言を好み其私慾に循ひて己が爲に師を增加る時來らん。かれら耳を眞理より背け奇き談に向ふべし。　また提後三〇五—九、默十七〇。

ナ太（二七〇二五）民みな答て曰けるは其血は我儕と我儕の子孫に係るべし。

ラ（撒前五〇四—八）然ど兄弟よ爾曹幽暗に居ざれば其日盜賊の來る如く爾曹に來ることなし。爾曹みな光の子ども晝の子ども也。われら夜に屬るもの暗に屬る者に非ず。然ば我儕他人の寢るが如く寢ることなせず醒て愼むべし。寢る者は夜ねむり酒に醉ものは夜ふる也。晝に屬る我儕は信と愛の護胸をき救の望を冑として愼むべし。

（彼前一〇十三）然ば爾曹心の腰に帶して愼みイエスキリストの顯れ給ふ時なんぢらに來らんとする恩惠を疑はずして望むべし。

ム（王上十九〇十八）又我イスラエルの中に七千人を遺さん。皆其膝をバアルに跼めず其口を之に接ざる者なりと。

（羅十一〇五）是の如く今もなほ恩の選に由て遺れる者あり。

ウ（徒十五〇十六、十七）此後われ反て已に傾圮たるダビデの幕屋を復び起し其破壞の跡を再び造て之を建べし。是その餘の民および凡て我名をもて稱らるゝ異邦人に主を尋させん爲なり。此すべての事を行ふ神これを言と錄されたるが如し。

ヰ（太十九〇二八）イエス彼等に曰けるは我まことに爾曹に告ん我に從へる爾曹は世あらたまり人の子榮光の位に坐する時なんぢらも十二の位に坐してイスラエルの十二の支派を鞫べし。

ノ（馬四〇二、三）されど我名をおそるゝ汝らには義の日いでゝ昇らん。その翼には醫す能をそなへん。

汝らは牢よりいでし犢の如く躍跳ん。又なんぢらは惡人を踐つけん。卽ちわが設くる日にかれらは汝らの脚の掌の下にありて灰のごとくならん。萬軍のヱホバこれを言ふ。

㋟(徒十七〇三一)蓋神すでに其立し所の人により義をもて世を鞫べき日を定め此事に就ては彼を死より甦らせて其證を衆の人に予たまへば也。

(羅十三〇十二)夜すでに央て日近けり。故に我儕暗昧の行を去て光明の甲を衣べし。

(默二十〇四—六)我おほくの座位を見しに其上に坐する者あり。彼等審判の權を予らる。又イエスの證および神の道の爲に首斬れたる者の靈魂を見たり。此は獸と其像を拜せず其印誌を額あるひは手に受ざりし者の靈魂なり。皆生てキリストと共に千年の間王と作り。其他の死人は千年終まで甦らざる也。これ第一の復生なり。この第一の復生に與る者は福なり。是聖者なり。此輩の上に第二の死は權を執こと能ず。彼等は神とキリストの祭司と作キリストと共に千年の間王たるべし。

第十三、未だ救はれざる人に慘酷である

世には何百萬の人々が救はれずに居るのに、基督が審判のため來ることは慘酷であると言て反對する者がある。

我等はかく答へる。かゝる事を言ふのは神の動機を臆測しての批評でないか。かの洪水は慘酷の發現であつたか、或は其洪水後生き存つた人々の爲め罪惡の大潮流を一掃したる神の愛と慈悲の顯現ではなかつたか。確にあれは慈悲の業であつた。此世は三〇〇〇〇〇年毎に死ぬ[㊀]といふ事は我等は知つて置かねばならぬ。人間の生命の平均は此年

限よりは遙に短いのである。[㊁]此世は惡魔の權下にあり、而して[㊂]彼は死の權威を有て居る。彼は新約時代に入てから、五十回も死の劍に由て此世を屠つた。

考へて見られよ。五十以上の世は死の渦中に投せられたのである。其度毎に全く新しき世の光景を呈した。これらの間に極めて僅少の者が救の音信に接したのみで、大多數は難破したる船の如く、暗黑と不信の中に、審判の方に浚はれて居る。

基督の再臨は事物をもつと良き狀態に向はしむるものである。何故なれば主は來り給ふ時は、礙ぐる凡の物は悉く歛められ、[㊃]その國は正義によりて立てらるゝのである。而して此王國の臣民は[㊄](支配する人々でなく)千年王國時代にありても死ぬ事がある

㊀(約壹五〇十九)我儕は神につき擧世は惡者に服するを我儕は知る。

㊁(來二〇十四、十五)それ諸子は偕に肉と血とを具れば彼も同く之を具ふ。是死をもて死の權威を有るもの卽ち惡魔を滅ぼし、かつ死を畏て生涯つながるゝ者を放たん爲なり。

㊂(太十三〇四九、五十)世の末に於ても此の如ならん。天の使等いでゝ義者の中より惡者を取わけ、之を爐の火に投入べし其處にて哀哭切齒すること有ん。　また三一—四三。

㊃(路二十〇三五、三六)彼世に入り死より復生に足ものは娶嫁ことなし。是また死ること能ざるが故なり。蓋天の使と伴く復生の子にて神の子なれば也。　また至二十〇四—六。

けれども、皆長生してからである。されば百歳になつても小兒であつて、その死は福なるものである。此千年時代は完全なる狀態のものでないけれども、罪を犯せる者と神に奉仕せざる國民とは即座に審判せらるゝ事になるのである。

しからば彼が速に來る事は無慈悲の事として取るべきものでない。寧ろ神は今（かの洪水前の如く）忍びて待ち給ふ其忍耐こそ實に驚くべきである。しかし主は其約束を成就し、來るべき者は來り、義を以て其行爲を速に爲し給ふであらう。（羅九〇、二八）。

されば基督の再臨を以て慘酷だとか無慈悲だとか、言ふべきものでない。主は『我必らず速かに至らん』と宣ふた。而して『アメン主イエスよ臨り給へ』と宣ふた聖靈の御心を我等の心としたいものである。（默二十二）。

其時歡び迎へよ、三度歡び迎へよ、爾曹神の記號を帶びし者よ。彼の再臨の外に慰安を與ふるもの別にありや。鎖されたる此世を開放するものは彼の臨在の外にありや。オー曉の明星よ、我望は爾にあり。

第十四、此世

耶蘇は『此事みな成までは此世は逝ざるべし』（路二十一）と宣ふた。また太二十四〇三四、可十三〇三十をも見られよ。

(ホ)（賽六十五〇二十）日數わづかにして死る嬰兒といのちの日をみたさゞる老人とはその中にまたあることなかるべし。百歳にて死るものも尚わかしとせられ、百歳にて死るものを詛れたる罪人とすべし。

(ヘ)（默十四〇十三）われ天より聲ありて我に言ふを聞り。曰なんぢ此言を書せ。今より後主に在て死る死人は福なり。靈も亦いふ然かれらは其勞苦を止て息ん其功これに隨はんと。

(ト)（亞十四〇十六—十九）エルサレムに攻きたりし諸の國人の遺れる者はみな歳々に上りきてその王なる萬軍のエホバを拜み結茅の節を守るにいたるべし。地上の諸族の中その王なる萬軍のエホバを拜みにエルサレムに上らざる者の上には凡て雨ふらざるべし。例へばエジプトの族もし上り來らざる時はその上に雨ふらじ。エホバその結茅の節を守りに上らざる一切の國人を擊なやます災禍を之に降したまふべし。エジプトの罪凡て結茅の節を守りに上り來らざる國人の罪是のごとくなるべし。（また賽六十五〇二十。）

(チ)（彼後三〇九）主その約束し給ひし所を成に遲きは或人の遲しと意ふが如くに非ず。一人の亡ぶるをも欲みの給はず衆人の悔改に至らんことを欲みて我儕を永く忍び給ふ也。

(リ)（彼前三〇二十）この獄にある靈は昔ノア方舟を備る間神の忍て待給へるとき從はざりし靈なり。此方舟にいり水に由て救れし者は僅にして惟八人なりき。

(ヌ)（來十〇三六、三七）なんぢら必ず用べきものは忍耐なり。是神の旨を行ひて約束のものを受んが爲なり。今片時ありて來る者きたらん。必ず遲らじ。

或人は此世とあるを三四十年と註解し、エルサレムは基督がかく言給ふてから四十年内に滅亡したから、主は此出來事について申されたのであるとしてをる。

イスラエルなる此世は逝ざるべし

此所に用ひられたる世なる語はイスラエル民族の在ん限りといふ意味である。次の聖句に參照して見られよ。其所には同じ希臘語が用ひられてある。

詩二十二〇三十には『民の裔のうちにエホバに事ふる者あらん主のことは代々に語り傳へらるべし』とあり、また『斯の如き者は神を慕ふもの丶族類なり』(詩二十四〇六)とある。

箴三十〇十一—十四には義しき世類と惡き世類とは明かに區別されてある。そこでイスラエルの世はエルサレムの滅亡を見るのみでなく、基督の顯現をも、また此時代の終をも見るといふ結論になるのである。(太二十四〇三)。

イスラエル人が今日に至るまでこの十八世紀間、凡の迫害と變轉と流浪を經過し、特種の民として驚くべく保存せられ來つた事は、實に不變の奇跡であつて、これが神の言の眞理なる事を證明し、かつイスラエル人の未來の歷史につける神の計畫を我等に知らしむるところのものである。

フレデリッキ大王は其牧師にかく問ねた事がある。「博士よ、若し卿の信ずる宗教は眞のものとすれば、簡短明瞭なる證據があるべき筈である。卿は一言で其眞なるを證明するものを朕に告る事が出來るか」と。其時この善良なる牧師はイスラエルと答へた。

他の國民は興りまた亡んだ。しかしイスラエル人だけは殘つて居る。彼は逝去らない。神は彼についてかく言給ふた『我しばし汝をすてたれど大いなる憐憫をもて汝をあつめん我忿恚あふれて暫くわが面をなんぢに隱したれど永遠の惠をもて汝をあはれまん』(賽五十四〇七、八)。

(太十一〇十六)我この世を何に譬んや。街に坐し其侶を呼ぶ童子の如し。

(太十六〇四)姦惡なる世は休徵を求るとも預言者ヨナの休徵のほか休徵を予られじ。遂に彼等を離れて去ぬ。

(路九〇四一)イエス答て曰けるは噫信なき浮逆世なる哉。われ爾曹の中に爾曹を忍て幾何時あらんや。爾が子を此に携來れ。

(路十一〇四九—五一)是故に神の智慧いへる言あり。我預言者および使徒を彼等に遣さんに其中の或者を殺し或者を逐ん窘むべしと。創世より以來ながしゝ凡の預言者の血は此代に於て討さんと爲なり。即ちアベルの血より殿と祭壇の間に殺されたるザカリヤの血にまで至る。われ誠に爾曹に告ん之を此代に討すべし。

(腓二〇十五)これ爾曹玷なく雜なく神の子となり曲れる邪なる時代に在て責べき所なからん爲なり。爾曹は此時代に在て光の如く世に顯はれ。

第十五章　イスラエルは恢復せらるべきである

然し多分諸君はかく云はん「予はイスラエル人がカナンに歸り來り、エルサレムは再建せらるゝと信じない」と。

愛する讀者諸君よ、諸君はそれにつける神の宣言を讀まれたか。聖書に明白に記したるものより確かなものはない。我等は悉く其引照の聖句を擧る場所がないから、其一部分だけを茲に擧るのみである。我等は諸君に向ひ注意して讀まれん事を希ふものである。また偏見と先入主の思を諸君の中より取去り、聖靈が其聖言により、神に愛せられ（羅十一〇二八）また『彼の目の珠』（亞二八）の如く愛する、神の選民の榮ある未來をば諸君に示し給ふやう祈るものである。

第一、神アブラハムを召し給ふ。　創十二〇一。
第二、神アブラハムに約束し給ふ。　創十二〇二—七。
同　創十三〇十四—十七。
同　創十五〇十八。
同　創十七〇八。
神イサクに約束し給ふ。　創二十六〇一—五。

神ヤコブに約束し給ふ。　創二十八〇一—十五。
同　創三十五〇十—十二。
第三、土地の境界の設定。出二十三〇三一、民三十四〇、申十一〇二四、三十四〇一—四、書一〇二—六。
第四、土地は一部分所有せらる。王上四〇二一。
第五、不從順のため刑罰預言せらる。利二十六〇十四—三九、申四〇二二、二十八〇十五、三十一〇十六。

㊀（創十二〇一—七）爰にエホバアブラムに言たまひけるは汝の國を出で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ。我汝を大なる國民と成し汝を祝み汝の名を大ならしめん。汝は福祉の基となるべし。我は汝を祝する者を祝し汝を詛ふ者を詛はん。天下の諸〻の宗族汝によりて福祉を獲と。アブラム乃ちエホバの自己に言たまひし言に從て出たり。ロト彼と共に行り。アブラムはハランを出たる時七十五歳なりき。アブラム其妻サライと其弟の子ロトおよび其集めたる總の所有とハランにて獲たる人衆を携へてカナンの地に往んとて出で遂にカナンの地に至れり。アブラム其地を經過てシケムの處に及びモレの橡樹に至れり。其時にカナン人其地に住り。茲にエホバアブラムに顯現れて我汝の苗裔に此地を與へんといひたまへり。彼處にて彼己に顯現れたまひしエホバに壇を築けり。

㊁（創十三〇十四—十七）ロトのアブラムに別れし後エホバアブラムに言たまひけるは爾の目を擧て爾の居る處より西東北南を瞻望め。凡そ汝が觀る所の地は我之を永く爾と爾の裔に與べし。我爾の後裔を地の塵沙の如くなさん。若人地の塵沙を數ふることを得ば爾の後裔も數へらるべし。爾起て縱横に其地を行き巡るべし。我之を爾に與へんと。

第六、イスラエルの罪。士二〇十一—十九、母上八〇六、王下二十一〇十一、二十四〇三、耶十五〇四、此外多くあるが、殊に太二十七〇二五。

第七、記憶すべき約束と復歸は確めらる。利二十六〇四十—四五、殊に四二、四四、四五。申四〇三十、三一。

申三十〇一—十、殊に四、五、六。

母下七〇十、十一。

耳二〇十八—三二。

同三〇一—二一。

歴九〇十一—十五、殊に十五。

何一〇十、十一。

同二〇十四—二三。

㋑(利二六〇四四、四五)かれ等斯のごときに至るもなほ我彼らが敵の國にをる時にこれを棄てまたこれを忌きらはじ。斯我かれらを滅ぼし盡してわがかれらと結びし契約をやぶることを爲ざるべし。我は彼らの神エホバなり。我かれらの先祖等とむすびし契約をかれらのために追憶さん。彼らは前に我がその神ならんとして國々の人の目の前にてエジプトの地より導き出せし者なり。我はエホバなり。

㋺(申四〇三十、三一)後の日にいたりて汝艱難にあひて此もろ〳〵の事の汝に臨まん時に汝もしその神エホバにたち歸りてその言にしたがはゞ、汝の神エホバは慈悲ある神なれば汝を棄て汝を滅さず。また汝の先祖に誓ひたりし契約を忘れたまはざるべし。

㋩(申三十〇一—六)我が汝らの前に陳たるこの諸の祝福と呪詛の事すでに汝に臨み汝その神エホバに逐やられたる諸の國々において此事を心に考ふるにいたり、汝と汝の子等ともに汝の神エホバに起かへり我が今日なんぢに命ずる所に全たく循かひて心をつくし精神をつくしてエホバの言に聽したがはゞ、汝の神エホバ汝の俘擄を解て汝を憐れみ汝の神エホバ汝を顧みその汝を散しゝ國々より汝を集めたまはん。汝たとひ天涯に逐やらるゝとも汝の神エホバ其處より汝を集め其處より汝を携へかへりたまはん。汝の神エホバ汝をしてその先祖の有ちし地に歸らしめたまふて汝またこれを有つにいたらん。エホバまた汝を善し汝を增て汝の先祖よりも衆からしめたまはん。而して汝の神エホバ汝の心と汝の子等の心に割禮を施こし汝をして心を盡し精神をつくして汝の神エホバを愛せしめ斯して汝に生命を得させたまふべし。

㋥(母下七〇十)又我わが民イスラエルのために處を定めてかれらを植つけかれらをして自己の處に住て重て動くことなからしめたり。

㋭(歴九〇十一—十五)其日には我ダビデの倒れたる幕屋を興しその破壞を修繕ひその傾圮たるを興し古代の日のごとくに之を建なほすべし。而して彼らはエドムの遺餘者および我名をもて稱へらるゝ一切の民を獲ん。此事を行なふエホバかく言なり。エホバ言ふ視よ日いたらんとす、その時には耕者に刈者は相繼ぎ葡萄を踐む者は播種者に相繼ん。また山々には酒滴り岡は皆鎔て流れん。我わが民イスラエルの俘囚を返さん。彼らは荒たる邑々を建なほして其處に住み葡萄園を作りてその酒を飲み園圃を作りてその果を食はん。我かれらをその地に植つけん。彼らは我がこれに與ふる地より重れて拔さらるゝことあらじ。汝の神エホバこれを言ふ。

何三〇四、五。
饗二〇二—五。
同九〇六、七。
同十〇二十—二三、殊に二一と二二。
同十一〇十—十六、殊に十一のふたゝび。
同十九〇二三—二五。
同㊇二十七〇十二、十三。
同三十三〇二十—二四。
同四十三〇一—七、殊に五、六、七。
同四十九〇十三—二六、殊に二二、二三。
同六十〇一—二二、殊に八、九、十、十五、十六、十八、二一。
同六十一〇一—十一。
同六十二〇一—十二。
同六十五〇八—十。
同六十五〇十七—二五。
同六十六〇十九—二四。
耶三〇十二—十九、殊に十七、十八。
同十一〇四、五。

耶十六〇十四—十六。
同二十三〇三—八、殊に三、四、六。
同二十九〇十—十四。
同三十〇一—二四、殊に八、九、十、十一、二十。
同三十一〇一—四十、殊に八、九、十、十二、二八、三三、三八。
同三十二〇三六—四四、殊に三七、三九、四十、四一、四二。
同三十四〇七—十七、殊に七、八、十四、十五、十六。
同四十四〇二八。

㊇(饗二十七〇十二、十三)その日なんぢらイスラエルの子輩よ、エホバは打落したる果をあつむるごとく大河の流よりエジプトの川にいたるまでなんぢらを一つ一つにあつめたまふべし。その日大なるラッパ鳴ひゞきアッスリヤの地にさすらひたる者エジプトの地におひやられたる者きたりてエルサレムの聖山にてエホバを拜むべし。

㊉(耶十六〇十四—十六)エホバいひたまふ然ばみよ此後イスラエルの民をエジプトの地より導きいだせしエホバは活くといふことなくして、イスラエルの民を北の地とそのすべて逐やられし地より導出せしエホバは活くといふ日きたらん。我かれらを我その先祖に與へしかれらの地に導きかへるべし。エホバいひたまふ。みよ我おほくの漁者をよび來りて彼らを漁らせまたその後おほくの獵者を呼來りて彼らを諸の山もろ〳〵の岡および岩の穴より獵いださしめん。

同四十六〇二七、二八。
同五十〇四—八。
同五十〇十七—二十。
結六〇八—十、殊に九。
㋕同二十〇三六—四四、殊に四十、四一、四二、四三、四四。
同二十八〇二四—二六、殊に二五、二六。
同三十四〇十一—三一、殊に十一、十二、十三、十四、二三、二四、二五、二八。
同三十六〇一—三八、殊に八、十、十一、十二、十五、二一、二八、三一、三五、三七、三八。
同三十七〇一—二八、殊に十一、十二、十四、十六—二八。
同三十九〇二三—二九、殊に二五、二六、二七、二九。
同四十〇より四十八〇の新しき宮殿。
同四十八〇にある族の落着く順序を見られよ。
米四〇一—七。
㋖同七〇八—二十、殊に十二、十九、二十。
㋗番三〇八—二十、殊に十一、十三、十九、二十。
亞二〇四—十三。
同三〇一—十、殊に九。
同八〇一—二三、殊に四、五、八、十二、十六、十七、二十より二三。

㋕(結二十〇四十—四四)主エホバいふ吾が聖山の上イスラエルの高山の上にてイスラエルの全家その地の者皆我に事へん。其處にて我われらを悅びて受納へん。其處にて我なんぢらの獻物および初成の禮物凡て汝らが聖別たる者を求むべし。我汝らを國々より導き出し汝らが散されたる處々より汝らを集むる時馨しき香氣のごとくに汝らを悅びて受納れ、汝らによりて異邦人等の目のまへに我の聖ことをあらはすべし。我が汝らをイスラエルの地すなはちわが汝らの先祖等にあたへんと手をあげしところの地にいたらしめん時に汝等は我のエホバなるを知るにいたらん。汝らは其身を汚したるところの汝らの途と汝らのもろ〳〵の行爲を彼處にて憶え、其なしたる諸の惡き作爲のために自ら恨み視ん。イスラエルの家よ我汝らの惡き途によらず汝らの邪なる作爲によらずして吾名のために汝等を待はん時に汝らはすなはち我のエホバなるを知るにいたらん。主エホバこれを言ふなり。

㋗(米七〇十八—二十)何の神か汝に如ん。汝は罪を赦しその產業の遺餘者の愆を見過したまふなり。神は憐憫を悅ぶが故にその震怒を永く保ちたまはず。ふたゝび顧みて我らを憐れみ我らの愆を踏つけ我らの諸の罪を海の底に投しづめたまはん。汝古昔の日われらの先祖に誓ひたりしその眞實をヤコブに賜ひ憐憫をアブラハムに賜はん。

㋖(番三〇十九、二十)視よその時われ汝を虐遇る者を盡く處置し足蹇たるものを救ひ逐はなたれたる者を集め彼らをして其羞辱を蒙りし一切の國にて稱譽を得させ名を得さすべし。その時われ汝らを携へその時われ汝らを集むべし。我なんぢらの目の前において汝らの俘囚をかへし汝らをして地上の萬國に名を得させ稱譽を得さすべし。エホバこれを言ふ。

亞十〇五—十二、全部。
同十二〇一—十四、殊に十、十一。
同十三〇一—九、殊に六、八、九。
同十四〇一—二一、殊に十一、十六、二十、二一。
馬三〇十—十二。
太二十三〇三七—三九、殊に三九のまで。
路十三〇三四、三五、殊に三五のまで
同二十一〇二四、殊にまでなる言。

『エルサレムは異邦人の時滿るまでは異邦人に蹂躪さるべし』。

羅十一〇十七—二八、殊に十七、二十、二三より二八。
徒十五〇十三—十六。これは使徒の預言の總括であるから、甚だ肝要である。
詩五十一〇十八、百〇二〇十六。

(亞十〇六—十)我ユダの家を強くしヨセフの家を救ばん。我かれらを憐むが故に彼らをして歸り住しめん。彼らは我に棄られし事なきが如くなるべし。我は彼らの神エホバなり。我かれらに聽べし。エフライム人は勇士に等しくして酒を飲たるごとく心に歡ばん。其子等は見て喜びエホバに因て心に樂まん。我れらに向ひて嘯きて之を集めん。其は我これを贖ひたればなり。彼等は昔殖增たるごとくに殖增ん。我かれらを國々の民の中に播ん。彼等は遠き國において我をおぼへん。彼らは其子等とともに生ながらへて歸り來るべし。我かれらをエジプトの國より携へかへりアッスリヤより彼等を集めギレアデの地およびレバノンに彼らを携へゆかん。その居處も無きほどなるべし。

(馬三〇十一、十二)我また嚙食ふ者をなんぢらの爲に抑へてなんぢらの地の産物をやぶらざらしめん。又なんぢらの葡萄の樹をして時のいたらざる前にその實を圃におとさざらしめん。萬軍のエホバこれをいふ。又萬國の人なんぢらを幸福なる者とゝなへん。そは汝ら樂しき地となるべければなり。萬軍のエホバこれをいふ。

(羅十一〇十一—十三)然ば我いはん彼等がつまづきは倒に及しや。然らず。反て彼等が錯失により救は異邦人に及べり。是イスラエルを激させんが爲なり。若かれらの錯失世の富となり其衰異邦人の富とならんには況て彼等の盛なるに於てをや。我なんぢら異邦人に言ん。我は異邦人の使徒なるが故に我職を敬重ぜり。

(羅十一〇十九—二一)然ば爾枝の折れたるは我が接れん爲なりと言ん。然ご彼等の折れたるは不信仰により爾が立るは信仰に因なれば誇ること勿。たゞ戒懼よ。蓋神もし原樹の枝をさへ惜まずば恐くは爾をも惜まじ。

(羅十一〇二五—二七)兄弟よ我爾曹が自己を智とする事無らん爲に此奥義を知ざるを欲ます。卽ち幾分のイスラエルの頑梗は異邦人の數盈るに至らん時まで也。然てイスラエルの人悉く救るを得ん。錄して救者はシオンより出てヤコブの不虔を取除かん。且その罪を赦す時に我かれらに立ん所の誓は此也と有が如し。

(徒十五〇十三—十七)彼等が言擧りし後ヤコブ答て曰けるは人々兄弟よ我に聞。神初て異邦人を眷顧その中より己が名を崇る民を取給ひし事はシモン既に之を述。預言者の言これと符り。其書に、此後われ反て己に傾圮たるダビデの幕屋を復び起し其破壞の跡を再び造て之を建べし。是その餘の民およびに凡て我名をもて稱らるゝ異邦人に主を尋させん爲なり。此すべての事を行ふ神これを言を錄されたるが如し。

さて讀者諸君、若し諸君は忠實に之等の聖句を研究し、また之を讀るゝなれば、現今のユダヤ人の大多數は、自分等がカナンに歸るといふ確乎たる信仰を有して居る事に驚かるゝであらう。

凡の正統派のユダヤ人は強く此望を執へて居る。しかるに彼等よりも尙大なる光を與へられたる我等はこの感伏せざるを得ない聖言の證を拒んで居られやうか。否々、拒まれない。

諸君は「これらの預言はバビロンから歸つた時に成就せられた」と申すかも知れない。

さうでない、あれは第一回で、また

第二回の恢復

があるのである。

『その日主はまたふたゝび手をのべてその民ののこれる僅かのものをアツスリヤエジプトパテロスエテオピヤエラムシナルハマテおよび海のしまゝより贖ひたまふべし』(賽十一〇十一)。

第一回の恢復の時には『往んと志ざしたる者』のみがバビロンより歸つた(喇七〇十三)。而して多はかしこ埃及及び其他の所に遺つた。しかし將來に於ては即ち第二回の恢

復の時には一人も遺さるゝやうな事がないのである。

『汝たとひ天涯に逐やらるゝとも汝の神エホバ其處より汝を集め其處より汝を携へかへりたまはん』(申三十〇四)。

『懼るゝ勿れ、我なんぢと偕にあり、我なんぢの裔を東よりきたらせ西より汝を集むべし、われ北にむかひて釋せといひ南にむかひて留る勿れといはん。わが子輩を遠きよりきたらせわが女らを地の極よりきたらせよ。すべてわが名をもて稱へらるゝ者をきたらせよ。我われらをわが榮光の爲に創造せり。われ曩にこれを造りかつ成なをはれり』(賽四十三〇五—七)。

『主エホバかく言たまふ我みづから我群を索して之を守らん。牧者がその散たる羊の中にある日にその群を守るごとく我わが群を守り之がその雲深き暗き日に散たる諸の處よりこれを救ひとるべし。我われらを諸の民の中より導き出し諸の國より集めてその國に携へいり、イスラエルの山の上と谷の中および國の凡の住居處にて彼らを養はん』(結三十四〇十一—十三)。

『彼等すなはち我エホバの己の神なるを知ん。こは我われらを國々に移し又その地にひき歸りて一人をも其處にのこさゞればなり』(結三十九〇二八、二九)。

第一恢復の時に歸つた者はユダヤ人のみであつた。

第二回即ち今後の恢復の時にはユダ(二族)とイスラエル(十族)とが歸さるゝのである。

＊この場合は例外として、我等は廣い意味に於て即ち十二族全體を呼ぶにイスラエルなる語を用ふるもの

である。

『その時ユダの家はイスラエルの家とともに行みて北の地よりいで我なんぢらの先祖たちに嗣しめし地に偕にきたるべし』(耶三〇十八)。

『我汝等の上に人を殖さん。是皆悉くイスラエルの家の者なるべし。邑々には人住み墟址は建直さるべし』(結三十六〇十)。

エゼキエルは二の木をとりて一をユダとなし一をヨセフと名け、之を手の中に合せて一となし、人々が是は何の意であるかと問ねたならば、かく言へと主は命じたまふた。

『主エホバかく言たまふ我イスラエルの子孫をその往るところの國より出し四方よりかれを集めてその地に導き。その地に於て汝らを一の民となしてイスラエルの山々にならしめん。一人の王彼等全體の王たるべし。彼等は重れて二の民となることあらず再び二の國に分れざるべし』(結三十七〇十五―二二)。

第一回には再び逐出さるゝために歸つた。しかし第二回には居据る爲に歸り、再び出で往ぬのである。彼等は崇められ、安全に往み、而して異邦の民は彼等に集ひ來るのである。

永久の恢復

『我かれらをその地に植つけん。彼らは我がこれに與ふるより重れて拔さらるゝことあらじ。汝の神エホバこ

れを言ふ』(摩九〇十五)。

『彼等は重て國々の民に掠められゝ事なく野の獸かれらを食ふことなかるべし。彼等は安然に住はん。彼等を懼れしむる者なかるべし』(結三十四〇二八)。

『我汝らの上に昔時のごとくに人を住しめ汝らの初の時よりもまされる恩惠を汝等に施すべし……我わが民イスラエルの人を汝らの上に歩ましめん……重れて彼等に子なからしむることあらじ』(結三十六〇十一、十二)。

『なんぢ前にはすてられ憎まれてその中をすぐる者もなかりしが今はわれ汝をとこしへの華美よゝの歡喜とさん。なんぢら亦もろ〳〵の國の乳をすて王たちの乳房をすひ而して我エホバなんぢの救主なんぢの贖主ヤコブの全能者なるを知るべし』(賽六十〇十五、十六)。

諸の國民はイスラエルに來り就ん

『エホバ宣給く、われは活なんぢ此等をみな身によそほひて飾となし新婦の帶のごとくに之をまとふべし……主エホバいひたまはく、視よわれ手をもろ〳〵の國にむかひてあげ旗をもろ〳〵の民にむかひてたてん。斯てかれらのその懷中になんぢの子輩をたづさへ、その肩になんぢの女輩をいせきたらん。もろ〳〵の王はなんぢの養父となり、その后妃はなんぢの乳母となり、かれらは其面を地につけて汝にひれふし、なんぢの足の塵をなめん。而してなんぢわがエホバなるを知り、われを俟望むもの〳〵耻をかうぶることなきを知らん』(賽四十九〇十八、廿二、廿三)。

『末の日にいたりてエホバの家の山、諸の山の巔に立ち諸の巔にこゑて高く聲へ萬民河の如く之になな

ながれ歸せん。卽ち衆多の民來りて言ん去來我儕エホバの山に登りヤコブの神の家にゆかん。エホバその道を我らに敎へて我らに其道を歩ましめたまはん。律法はシオンより出でエホバの言はエルサレムより出でければなり』(米四〇一、二)。

『萬軍のエホバかく言たまふ國々の民および衆多の邑の居民來り就ん、卽ちこの邑の居民住てかの邑の者に向ひ我儕すみやかに往てエホバを和め、萬軍のエホバを求めんと言んに我も往べしと答へん、衆多の民强き國民エルサレムに來りて萬軍のエホバを求めエホバを和めん、萬軍のエホバかく言たまふ其日には諸の國語の民十人にてユダヤ人一箇の裾を拉へて言ん、我ら汝らと與に往べし其は我ら神の汝らと偕にいますを聞たればなり』(亞八〇二十—二三)。

『エルサレムに攻さたりし諸の國人の遺れる者はみな歲々に上りきてその王なる萬軍のエホバを拜み結茅の節を守るにいたるべし』(亞十四〇十六)。

第一回の時には彼等は盲目で石の如き固き心があつた爲め、耶穌を拒み、これを殺した。しかし今後の回復の時には彼等は之を悔ひ、清き心を以て彼等の王なる基督を受るやうになる。

我を仰ぎ觀る

『我ダビデの家およびエルサレムの居民に恩惠と祈禱の靈をそゝがん、彼等はその刺たりし我を仰ぎ觀、獨子のために哭くがごとく之がために哭き長子のために悲しむがごとく之がために痛く悲しまん、其日にはエルサレムに大なる哀哭あらん是はメギドンの谷なるハダデリンモンに在し哀哭の如くなるべし、國中の族おの〳〵別れ居て哀哭べし卽ちダビデの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哭きナタンの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭かん、レビの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭き、シメイの族別れ居て哀哭きその妻等わかれ居て哀哭かん、その他の族も凡て然り、すなはち族おの〳〵別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭べし』(亞十二〇—十四)。

『彼ら悲泣來らん我われらをして祈禱をもて來らしめ、直くして躓かざる途より水の流に歩みいたらしめん、我はイスラエルの父にしてエフライムは我長子なればなり。萬國の民よ汝等エホバの言を聞き之を遠き諸島に示していへイスラエルを散せしものこれを聚め牧者のその群を守るが如く之を守らん……然るかの日の後に我イスラエルの家に立んところの契約は此なり、卽ち我わが律法をわれらの裏におきその心の上に錄さん我は彼らの神となり彼等は我民となるべしとエホバいひたまふ』耶卅一〇九、十、卅三)

イスラエルの潔め

『我汝等を諸の民の中より導き出し諸の國より集めて汝等の國に携いたり、清き水を汝等に灑さて汝等を清くならしめ汝等の諸の汚穢と諸の偶像を除きて汝等を清むべし、我新しき心を汝等に賜ひ新しき靈魂を汝らの裏に賦け汝等の肉より石の心を除きて肉の心を汝等に與へ、吾靈を汝らの裏に置き汝らをして我が法度に歩ましめ吾律法を守りて之を行ほしむべし、汝等はわが汝らの先祖たちに與へし地に住みて吾民とならん我は汝らの神となるべし、我汝らを救ひてその諸の汚穢を離れしめ穀物を召て之を增し饑饉を汝らに臨ませず』(結卅六〇廿四—廿九)。

『彼等またその偶像とその憎むべき事等およびその諸の愆をもて身を汚すことあらじ、我われらをその罪

を犯し、諸の住處より救ひ出してこれを清むべし、而して彼等はわが民となり我は彼らの神とならん。わが僕ダビデ彼等の王とならん。彼ら全體の者の牧者は一人なるべし……彼らは我僕ヤコブに我が賜ひし地に住ん。是其先祖等が住ひし所なり。彼處に彼らと其子およびその子の子長へに住ん。吾僕ダビデ長久にかれらの君たるべし。……我が住所は彼らの上にあるべし。我かれらの神となり彼らわが民とならん』（結卅七〇廿三―廿七）。

『われ我群の遺餘たる者をその逐ひなちたる諸の地より集め、再びこれを其牢に歸さん。彼らは子を産て多くなるべし。我これを養ひ牧者をその上に立ん。彼等は再び慄かず懼ずまた失じとエホバいひたまふ。エホバいひたまひけるは視よわがダビデに一の義き枝を起す日來らん。彼王となりて世を治め榮え公道と公義を世に行ふべし。其日ユダは救を得イスラエルは安に居らん。其名はエホバ我儕の義と稱へらるべし』（耶廿三〇三―六）。

『我彼等の上に一人の牧者をたてん。其人かれらを牧ふべし。是我僕ダビデなり。彼は彼らを牧ひ彼らの牧者となるべし。我エホバかれらの神とならん。吾僕ダビデかれらの中に君たるべし。我エホバこれを言ふ』（結三十四〇廿三、廿四）。

結四十章から四十八章に記されてあるやうな宮殿は未だ建てられた事がない。これにはまた各族が住ふところの場所を明白に示してある。此事は彼等が今後の大恢復の時に定めらるゝ所のものである。四十八章を見られよ。

イスラエルと教會とを混同する事

若し公平なる思想を有る讀者が此力强き證により、イスラエルの爲に今後榮光ある恢復が備へあることを曉る事であると思ふ。しかし多の人は此等の聖句は精神的に解すべきものとなし、而してこれを迫害せられたる宣言の要旨と力とを漸々無くするやうな事をして居る。

これは非常の誤謬である。これは重にパウロが其書翰中に論じたる事を誤解する事から起ると思ふ。パウロが『イスラエルより出る者ことゞくイスラエルに非ず』と言るはイスラエルと教會とを混同したのではない。また彼は我等は信仰に由てアブラハムの子となると言たのは教會とイスラエルとを混同したのでない。彼は寧ろ我等は信仰に由てのみ立つものを力說して居る。㋑哥前十〇三二に於てパウロはユダヤ人と異邦人と神の教會（此時代に於て基督を受るユダヤ人は教會の一部となる）との間に判然したる區別をして居る。教會にも特別なる恩がある、イスラエルにも特別なる恩がある。性來のイスラエル人は必ずしも眞のイスラエル人にあらざる事をパウロは明白に示して居る。㋺靈に由て心に割禮

㋑（哥前十〇三二）ユダヤ人をもギリシヤ人をも亦神の教會をも礙かする勿れ。

㋺（羅二〇二九）反て隱にユダヤ人たる者は實のユダヤ人なり。又割禮は靈に在て儀文に在ず。心の割禮は眞なり。其譽は人に由ず神に由り。

を受たる者のみが眞のユダヤ人である。イスラエルの大多數は不信仰の中に過去たけれども、パウロはなほ救はるゝ遺の者があると明言して居る。彼は㊁彼等ユダヤ人の爲ならば基督から離れ、自己を犧牲にし得るほど彼等を愛したのである。彼は野の橄欖の枝が其原樹に接るゝ如く、今後ユダヤ人が榮ゆる事を見たのである。㊃之れは恰も死たる者の中より生るやうなものである。耶蘇は『人々刀刃に斃れ且とらはれて諸國に曳れエルサレムは異邦人の時滿るまでは異邦人に蹂躪さるべし』(路二十一〇二四)と宣ふた。パウロは其秘義を曉つてかく申して居る、『幾分のイスラエルの頑硬は異邦人の數盈るに至らん時まで也しかして……救者はシオンより出てヤコブの不虔を取除かん』(十羅一〇二五、二六)。

此事は次の引照によりて明確にせられて居る。亞麽士書の八章と九章にイスラエルの上に懼るべき災難が來る事を示し、彼等は萬國の中にて篩はれ、而して主は彼等を集め、彼等を植ゑ、倒れたるダビデの幕屋を興し給ふのである。使徒は長老等がエルサレムに於る第一會議の時、イスラエルと敎會に關する同じ問題に就て考へ、聖靈がヤコブの心を此アモスの預言に導き、イスラエルがかく篩はるゝ間、神は己が名を崇むる民を異邦人の中より取給ふ事、また其後にダビデの幕屋を建る事について示させ給

ふた。(徒十五〇十三—十七)。されば我等はこの恢復の預言を敎會に適用る事が出來ない。敎會なるものはイスラエルとエルサレムが恢復せらるゝ前に先づ取出さるべきものである。彼等の恢復に關して最も特色ある預言の一は、其民でなく、㊄イスラエルの山々に告られた事である。これは文字通の意味のものである事は毫も疑ふべき餘地がないものである。

㊀(羅九〇二七)イザヤもイスラエルに就て呼り曰けるはイスラエルの子の數は海の沙の如なれども救るる者はたゞ僅々ならん。

(羅十一〇五)是の如く今もなほ恩の選に由て遺れる者あり。

㊁(羅九〇三)若わが兄弟わが骨肉の爲にならんには或はキリストより絶れ洗淪に至らんも亦わが願なり。

㊂(羅十一〇十五)若かれらの棄らるゝこと世の復和とならば其收納さるゝは死たる者の中より生るに同からず乎。

㊃(結三十六〇一)人の子よ汝イスラエルの山々に預言して言べし。イスラエルの山々よエホバの言を聽け。

(結三十六〇八—十一)然ごイスラエルの山々よ汝等は枝を生じわが民イスラエルのために實を結ばん。此事遠らず成ん。視よ我汝らに臨み汝らを眷みん。汝らは耕されて種をまかるべし。我汝等の上に人を殖さん。是皆悉くイスラエルの家の者なるべし。邑々には人住み墟址は建直さるべし。我なんぢらの上に人と牲畜を殖さん。是等は殖て多く子を生ん。我汝らの上に昔時のごとくに人を住しめ汝らの初の時よりまさる恩惠を汝等に施すべし。汝等は我がエホバなるを知にいたらん。

ヤコブの患難の日

イスラエルは恢復せらるべきは確實である。しかし恐るべき患難の時が其上に來るのである。彼等の罪は山の如く高い。彼等は罪なきの者の血を流し、殊に耶蘇の貴き血を流したる事について罪がある。(太二十七〇二五)。

忠實なる預言者は次の如く書いた時に其を知て居た。

『エホバのイスラエルとユダにつきいひたまひし言はこれなり』。

『エホバかくいふ、我ら戰慄の聲をきく驚懼あり平安あらず』。

『汝ら子を產む男あるやを尋ね觀よ、我男ゞ皆子を產む婦のごとく手をその腰におき且その面色皆青くなれるをみる。こは何故ぞや』。

『哀かなその日は大にして之に擬ふべき日なし。此はヤコブの患難の時なり。然ど彼はこれより救出されん』(耶三十〇四—七)。

『汝らはその惡き途とその善らぬ行爲を憶えてその罪とその憎むべき事のために自ら恨みん』(結三十六〇三一)。

然り、彼等は悔改め、また自己を恨むであらう。

彼等は『艱難の海を通るべし』。

多の者は死し、三分の一のみ救はるゝのである。

『我その三分の一を携さへて火にいれ銀を熬分るごとくに之を熬分け金を試むるごとくに之を試むべし。彼らわが名を呼ん、我これにこたへん、我これは我民なりと言ん彼等またエホバは我神なりと言ん』(亞十三〇九)。

これは皆基督の再臨と密接の關係あるもので、携擧の時でなく、顯現の時に起るところのものである。(第八章の圖解を見られよ。)

之はかく書されてあるからである。『エホバはシオンをきづき榮光をもてあらはれたまへり』(詩一〇二〇十六)。

(亞十〇十一)彼艱難の海を通り海を擊破りたまふ、ナイルの淵は盡く涸る、アッスリヤの傲慢は卑くせられエジプトの杖は移り去ん。

(結七〇一—四)エホバの言また我にのぞみて言ふ。汝人の子よ主エホバかくいふイスラエルの地の末期いたる。此國の四方の境の末期來れり。今汝の末期いたる。我わが忿怒を汝に洩し汝の行にしたがひて汝を鞫き汝の諸の憎むべき物のために汝を罰せん。わが目は汝を惜み見ず我なんぢを憫まず。汝の行のために汝を罰せん。汝のなせし憎むべき事の報汝の中にあるべし。是によりて汝等はわがエホバなるを知らん。

(結七〇八、九)今我すみやかに吾憤恨を汝に蒙らせわが怒氣を汝に洩しつくし汝の行爲にしたがひて汝を鞫き汝の諸の憎むべきところの事のために汝を罰せん。わが目は汝を惜み見ず我汝をあはれまず。汝の行のために汝を罰せん。汝の爲し憎むべき事の果報汝の中にあるべし。是によりて汝等は我エホバ汝を擊なるを知ん。

これは主は其聖徒（教會）と偕に諸の民とイスラエル人の上に審判を行んとて燃る焰を顯はし給ふ時である。（撒後一〇七—十、猶十四）。其イスラエル人とは太二十五〇三六以下にある三分の一で、諸國民の中に算へられざる者をいふのである。民廿三〇九。此事は主は煞分る者、潔る者として座する時に起るものである。

『視よ我わが使者を遣さん、かれ我面の前に道を備へん、また汝らが求むるところの主すなはち汝らの悅樂ぶ契約の使者忽然その殿に來らん、視よ彼來らんと萬軍のエホバ云たまふ』。

『されど其來る日には誰か堪えんやその顯著る時には誰か立えんや、彼は金をふきわくるもの、火の如く布晒の灰汁のごとくならん』。

『かれは銀をふきわけて之を潔むる者のごとく坐せん、彼はレビの裔を潔め金銀の如くかれらをきよめん、而して彼等は義をもて献物をエホバにさゝげん』。

『その時ユダとエルサレムの献物はむかしの日のごとく又先の年の如くエホバに悅れん』。

『われ汝らにちかづきて審判をなし巫術者にむひ姦淫を行ふ者にむかひ僞の誓をなせる者にむかひ傭人の價金をかすめ寡婦と孤子をしへたげ異邦人を推枉げ我を畏ざるものどもにむかひて速に證をなさんと萬事のエホバ云たまふ』（馬三〇一—五）。

㊐主は確に患難の爐をもてイスラエルを煉り潔め給ふのである。それから彼等は起て光を發ち、彼等の光來るのである。

起よ、朽ざる者やぎを以て輝き出よ、
汝の光來り、汝の王顯はる！
數世紀を經て大門開かれ、
新しき曉—千年期—となれり。

我等はイスラエルは如何にして恢復せらるゝかに就て、註釋するなれば一卷の書を著す程あるが、我等が爲んと欲ふ事は、これは爭ふべからざる預言の事實であつて、我等の主の顯現と密接の關係ある事を示すのに過ぎない。この事は我等は充分爲した事と信ずるものである。

㋖（太二十五〇四十）王こたへて彼等に曰ん我まことに爾曹に告ん、既に爾曹わが此兄弟の最微者の一人に行へるは卽ち我に行しなり。

㋗（賽四十八〇十）視よわれなんぢを煉たり、されど白銀のごとくせずして患難の爐をもてこゝろみたり。（詩六十六〇十）神よなんぢはわれらを試みて白銀をねるごとくにわれらを煉りたまひたればなり。

㋘（賽六十〇一—四）起よひかりを發て、なんぢの光きたりエホバの榮光なんぢのうへに照出たればなり。視よくらきは地をおほひ闇はもろ〳〵の民をおほはん、されどなんぢの上にはエホバ照出たまひてその榮光なんぢのうへに顯はるべし。もろ〳〵の國はなんぢの光にゆき、もろ〳〵の王はてり出るなんぢが光輝にゆかん。なんぢの目をあげて環視せ、かれらは皆つどひて汝にきたり、なんぢの子輩はとほきより來り、なんぢの女輩はいだかれて來らん。

彼等の恢復につける方法や其悔改または基督を受るにつける細い事は我等にとりて餘り大切なる事でない。何故なれば教會につける者は携擧の時に先づ取去られ、㊫イスラエル人が遭遇せねばならぬ種々の事を逃るゝからである。

かゝる事を細く調べて大なる恩を受たる人が多くある事は眞である。本書十八章の羔の婚姻の所に至るなれば其事が分る。しかし今は其等の順序を明白に知る事が出來ないのである。何故なれば教會が携へ擧られて後、また聖書がもつと完全に封が開れた時でなければ、イスラエル人が知るやうな工合に行ぬのである。(但十二〇四)。

我等にとりては、僞基督が顯はれ、其が來るべきユダヤ人の王なる耶蘇によりて滅亡され(撤後二)、而して其民なるイスラエル人は遠らず歸る(結三十六〇八)のが、末の日(賽二〇)に起るものであると知つて居ればそれで充分である。

㊫(路二十一〇三六)是故に爾曹儆醒て此臨んとする凡の事を避また人の子の前に立得やうに常に祈れ。

第十六章　預言の研究

耶蘇は『其日其時を知る者なし』(太二十四〇三六)また『父の其權にて定め給へる時また期は爾等が知べき所に非ず』(徒一〇七)と云ひ給ふ事により、預言の研究を非とするものあるかも知れない。

愛する讀者諸君よ、預言の研究とは惟時日を定めたり、或は今後起る事を先見する事とのみ思ふてはならぬ。主は其來るべき日と時をば我等に明示せざるは理由のある事である。しかし主はパリサイ人を僞善者と呼だのは、時の徵を辨へる事が出來なかつたからである。主は我等に目醒むべき事を命じ、預言を學ぶ事によりて恩を受る事を告げ給ふた。

㊫ペテロは我等に預言の確實なる言に注意すべき事を勸めた。『聖書はみな神の默示に

㊫(默一〇三)この預言の書を讀者と之を聞て其中に記しある所を守る人々は福なり。蓋時近ければ也。(默二十二〇七)われ速かに至らん。此書の預言の言を守る者は福なり。(路十一〇二八)イエス答けるは然。されど神の道を聽て其を守る者の福には若す。

㊫(彼後一〇十九)殊に預言者の確言われらに在。この言は暗處に輝る燈の如きものなり。夜の明るまで明星の爾曹の心の中に出るまで之を顧みば善。

して教誨と督責また人をして道に歸せしめ又義を學ばしむるに益あり』（提後三）。

聖書の大部分は預言から成立て居る。若し信者はよく之に注意するなれば、現在の奉仕から迷ひ出るやうな事がない。反つて彼等は其歩む途に於て多の光を與へられ、其奉仕に實際的の奬勵を多く與へらるゝのである。彼等の信仰は神の性質と其道をより濶く又より深く知る事によりて定まるもので、其靈的眼界は以前よりも尙一層明了に展開さるゝのである。

「しかしこれを十分に了解するには、聖書の皮相の研究や、又は今後の出來事をただ預想するよりも以上勉めねばならぬ。聖書を讀んで其奥深き教訓と、其說明、其譬喩、其歷史の中に含める驚くべき深き意味と、來るべき榮光に關する輝ける預言の言の光輝を知らなければならぬ」。かくの如く神の聖言を學ぶ事は、現代の懷疑論者に對するに最も緊要の事である。「何故なればかくして神の武庫の兵器を供せられ、神の戰爭の學校に於て訓練せらるゝからである」。神は如何に哲學者及び懷疑論者と戰ふために預言の眞理を用ふるかを見るべきである。また神は既に成就せられたる預言をば新事件を成遂げらるゝ保證として示し給ふのである。『いまだ兆さゞるさきに我まづ汝等に聞せん』。神は其告げ給ひし言と、また彼は神なる事を諸國民の前に、イスラエル人

を證人となし給ふのである。

彼等は現在その通りである。

㊀（賽四十一〇二一—二三）エホバ言給くなんぢらの道理をさり出せ。ヤコブの王いひたまはく汝等のかたき證をもちきたれ。これを持來りてわれらに後ならんとする事をしめせ。そのいやさきに成るべきことを示せ。われら心をとめてその終をしらん。或はきたらんとする事をわれらに聞すべし。なんぢら後ならんとすることをしめせ。我儕なんぢらが神なることを知ん。なんぢら或はさいはひし或はわざはひせよ。我儕ともに見ておどろかん。

㊁（賽四十二〇八、九）われはエホバなり。是わが名なり。我はわが榮光をほかの者にあたへず、わがほまれを偶像にあたへざるなり。さきに豫言せるところはやなれり。我また新しきことをつげん。事いまだ兆さざるさきに我まづなんぢらに聞せんと。

㊂（賽四十三〇九—十二）國々はみな相集ひもろ〳〵の民はあつまるべし。彼等のうち誰かいやさきに成るべきことをつげ之をわれらに聞することを得んや。その證人をいだして己の是なるをあらはすべし。彼等きゝて此はまことなりといはん。エホバ宣給く、なんぢらはわが證人わがえらみし僕なり。然ばなんぢら知てわれを信じわが主なるをさとりうべし。我よりまへにつくられし神なく我よりのちにもあることなからん。たゞ我のみ我はエホバなり。われの外にすくふ者あることなし。われ前につげ、また救をほどこし、また此事をきかせたり。汝等のうちには他神なかりき。なんぢらはわが證人なり。われは神なり。これエホバ宣給るなり。

預言は彼等の歴史である。

かく彼等を保ちしは神でなくて誰であらふか。

神でなくて誰が彼等の歴史を預言し得るか。

「神の武庫より取出す此武器のみが人の凡の詭辯と反對論を一刀兩斷し得るものである」。

されば神は預言を藐視する事を禁じ給ふたのである。(撒前五〇二十)。

『地よ地よ地よエホバの言をきけ』(耶二十二九)。

第十七章　實行的教理

我儕はすでに主の來臨の眞理は、全く實際的のものなることを斷言した、故に今ここに左の引照を列記し、以てイエスと使徒等が我等を奬勵する動機としてその再臨を預言したることを示し、以て我儕が所論の證とするものである。

一、豫備に關し(太廿四〇四十二—四十四、同廿五〇十三、可十三〇)、
二、節制に關し(撒前五〇二—六、彼前一〇)、十三、同四〇七、同五〇八)、
三、悔改に關し(徒三〇十九—廿一、默三〇三)、
四、誠實に關し(太廿五〇十九—廿一、路十二〇四十)、二—四十四、同十九〇十二、十三)、
五、耶蘇を羞恥と爲すべからざることに關し(可八〇)、
六、俗化に反對すべきことに關し(太十六〇廿)、六、廿七)、
七、寛容及び溫和なるべきことに關し(腓四)、〇五)、
八、忍耐に關し(來十〇廿六、廿七、)、雅五〇七、八)、
九、肉慾を殺すことに關し(西三〇)、三—五)、
十、眞實に關し(腓一〇)、九、十)、

十一、全身全靈全生の實際的聖潔に關し（撒前五〇廿三）、
十二、傳道上の忠實に關し（提後四〇一、二）、
十三、使徒の命令を守るべきことに關し（提前六〇十三、十四）、
十四、牧師の勉勵及び潔白に關し（彼前五〇一—四）、
十五、己を清潔にすることに關し（約壹三〇二、三）、
十六、イエスに居ることに關し（約壹二〇廿八）、
十七、夥多の誘惑及び信仰の試に耐ゆべき事に關し（彼前一〇七）、
十八、我儕主の爲困苦を忍ぶことに關し（彼前四〇十三）、
十九、言語を謹しみ及び神を敬ふ事に關し（彼後三〇十一—十三）、
二十、互に相愛すべきことに關し（撒前三〇十二、十三）、
廿一、我儕は天國の市民たるを忘却せざることに關し（腓三〇廿一）、
廿二、イエスの再臨を愛慕すべきことに關し（提後四〇七、八）、
廿三、キリストを渴望すべきことに關し（來九〇廿七、廿八）、
廿四、キリストは其事業を成就し給ふことを信ずることに關し（默二〇廿五）、
廿五、この希望を末世迄確守すべきことに關し（同三〇十一）、

廿六、世の慾を去り神を敬ひつゝ生活することに關し（多二〇十一—十三）、
廿七、イエスの來臨は不意なるが故に豫備すべきことに關し（路十七〇廿四—卅）、
廿八、輕々しく審判すべからざることに關し（哥前四〇五）、
廿九、充分に報を希望すべき事に關し（太十九〇廿七、廿八）、
三十、使徒等に喜ぶ時あるを保證すべきことに關し（哥後一〇十四、腓二〇十九）、
卅一、イエスは使徒等と別るゝため彼等を慰むることに關し（約十四〇三、十六、撒前二〇十九）、
卅二、イエスの再來を信仰する者は主の日に於て無上の恩寵を蒙り全く責なきことに關し（哥前一〇四—八）、
卅三、キリストの再來は信者が待つところの重なる事件である（撒前一〇九、十）、
卅四、キリストの再來は恰も從僕と會計する時の如くである（太廿五〇十九）、
卅五、天下萬民を審判することに就て（太廿五〇卅一—四十六）、
卅六、聖徒の復生に就て（哥前十五〇廿三）、
卅七、聖徒の現出することに就て（哥後五〇十四三〇）、
卅八、其來臨はイエスにありて寐れる死者に就て悲む人を安慰むる源泉であると言れてある（撒前四〇十四—十八）、

卅九、其來臨は不信者の爲に患難の時であると言はれてある(撒後一〇)、四十、其來臨は主の晩餐を食する毎に告られて居る(哥前十一〇廿六)、

これらは新約聖書中に此教理に關し用ひたる聖句の或一部である。これは世論に訴ふる事の助となり、議論を正確にし、また勸告を強むるために用ひられてある。此教理以外にこれよりも尙實際的の教理は決してない。我等は此事に關する聖句を充分に引照する餘地あればよいと欲ふが、しかし讀者諸君自ら聖言に來り、之を探り出すなれば、諸君にとりて大なる恩となる事と思ふ。我等は携擧に關する聖句と顯現に關する聖句とを區別するものでない。二つとも前述したる實際的目的を遂る爲の動機として同樣に用ひられてあるからである。

次の章にある聖書の概要と其順序は曾てロンドンで發刊したる小冊子から重に取たものである。これは千年期前再臨について簡潔に記したるもので、其明瞭なる證據となる聖句は引照と研究のため都合よく排列されてある。引用したる聖句は簡單であるけれども、其聖言の前後の脈絡を讀むなれば大なる益となるのである。

又八章と二十一章にある圖解を對照して見るなれば、基督は新郎として又王として來り給ふ事に關する事件の順序を知る事は祈深き讀者には容易なる事であると、我等は信ずるものである。

第十八章　主の再臨

及び教會の將來に關して續いて起り來る出來事。

『眞理の靈の來らんとき……來らんとする事を爾曹に示すべければ也』(約十六〇十三)。

主の約束

我なんぢらの爲に所を備へに往く、もし往きて我なんぢらの爲めに所を備へば又來りて爾を我に納くべし(約十四〇二、三)。

我往きて復なんぢらに來らん(約十四〇二十八)。

暫せば爾曹我を見じ復暫くして我を見るべしこれ我父へ往くなり(〇十六)。

我又爾曹を見ん其時爾曹の心喜ぶべし(約十六〇二十二)。

主はその約束し給ひし所を成す遲にあらず(彼後三〇九)。

認はす所の望を動かさずして固く守るべし蓋約束せし者は誠信なればなり……其日いよ〳〵近よるを見て益此の如くなすべし(來十廿

主は約束を履行する事

（三、廿五）。今片時ありて來るもの來らん必ず遲からじ（來十〇）。蓋主の臨り給ふこと近ければ也（雅五）。我必ず速かに至らんアメン（默廿二）。

彼は復罪を負ふことなく己を望むものに再び顯現て救を施すべし（來九〇）。

教會の希望

我等の國は天に在我等は救主即ちイエスキリストの其所より來るを待（腓三〇）。

我儕も自ら心の中に歎きて子と成んこと即ち我儕の身體の救はれんことを俟（羅八〇）。

我等の主イエスキリストの顯はれんことを俟てり（哥前一）。

望む所の福を望待しむ（十三）。

キリストの忍耐に導き給はんことを（撒後三）。

その子の天より臨るを待と云へば也その子は即ち神の死より甦らし處のイエスなり（撒前一）。

㊀教會とは現代の凡の信者を云ふ。哥前十二〇、十二、十三、二七。

㊁國とは國籍である。約十七〇十六、弗二〇十九、來十一〇十、十三、十六、十二〇二二。

携擧

主が其教會の爲めに新郎となりて空中に來臨する事

それ主號令と使長の聲と神の筩を以て自ら天より降らん（撒前四〇）。

我儕みな末の筩の鳴んとき忽ち瞬息間に化せん（哥前十五）。

イエスに由る所の既に寢れるものを神かれと偕に携へ來らん（撒前四十）。

キリストにありて死し者先に甦へり（撒前四）。

キリストに屬ける衆の人は生べし、……キリストの來らん時彼に屬するものなり（哥前十五〇）。

死し人よみがへりて壞ず（哥前十五）。

壞ざる者に甦され……榮ある者に甦され……強き者に甦され……靈の體に甦さるゝ也（哥前十五〇四十四）。

基督に在て死し者復生る

生て遺れる信徒の榮化

主の來らん時に至り活て存れる我儕は直に寢れる者よりも先だゝじ（撒前四）。

我儕悉く寢るにはあらず我儕みな末の筓の鳴らんとき忽ち瞬息間に化せん（哥前十五〇五十）。

主キリストは我儕が卑しき體を化して其榮光の體に象らしむべし（腓三〇廿、二十一）。

㈧『此日いづれの時きたるかを知ざれば爾曹つゝしみて目を醒し祈禱せよ』（可十三〇三二、三七、撒前五〇六）。

㈨ 主は具體的に顯はるゝのであるが、信者以外の者には見へない。約十四〇十九、徒一〇三、四、九、九〇七、十〇四十、四一、哥前十五〇五—八。

㈩ 此聲は信者にばかり聞ゆる。約十二〇二八、二九、徒九〇四、七。

㈠ 主はシナイ山に降り給ふた時に筓が二度鳴つた。その如く主は敎會を携へ擧る爲に來る時は第一の筓にてキリストに在て死し者先に甦り、第二の筓にて生て存れる聖徒が榮化するのである。

㈡ 舊約の聖徒は此時榮化するのである。來十一〇三九、四十。

㈢『其時……死は勝に呑れん』哥前十五〇五四）『生に死べき者呑れん』（哥後五〇四）。

㈣ 路一〇四八、徒八〇三三、腓二〇八。

生死兩者共に携擧せらる

われら土に屬ける物の狀を有かくの如く後また天に屬るものゝ狀を有ん（哥前十五四十九）。

此くつるものは必ずくちざるものを衣此死ざるものは必ず死ざる者を衣るべし（哥前十五五十三）。

後に活きて存る我儕かれらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇べし（撒前四十七）。

我儕の主イエスキリストの臨り給ふこと及ひ我儕が彼の所に集ること（撒後二一）。

我等いつまでも主と偕に居らん

我等いつまでも主と偕に居ん（撒前四十七）。

我居る處に爾曹をも居らしめんとて也（約十四三）。

我に事ふる者は我が居る處に居ん（約十二二六）。

彼等我居る所に我と偕に居りて我が榮えを見ん（約十七二四）。

彼等いつまでも亡びず（約十二三八）。

我生れば爾曹も生ん（約十四十九）。

彼と偕に生かしめんとて也（撒前五）。
極て大なる窮なき重き榮を我儕に得せしむる也（哥後四）。
窮なき世嗣（來九〇十五）。
彼は此より再び出ることなし（默三〇）。

基督の臺前

㋐われら必ず皆キリストの臺前に出で善にもあれ惡にもあれ各々身に居りて爲し所の事に循ひ其報を受べきものなれば也（哥後五）。
我等皆キリストの臺前に立つべきものなり、……我等各己の事を神に訟ふべし（羅十四〇）。
われ速に至らん必らず報應あり各人の行ふ所に循ひてこれに報ゆべし（默二十二）。

㋐『買受し者の救』（羅八〇二三、弗一〇十四）。
㋑ 基督信者のみが奉仕に關係す。羅十四〇四、十、十二。
㋒ 聖徒の教會。哥後一〇一。

工の顯はるゝ事

各人の工は明かならん夫日これを顯はす可れば也此は火にて顯はれん其火各人の工の如何を試むべし（哥前三）。
然ば主の來らん時迄時いまだ至らざる間は審判する勿れ主は幽暗にある陰れたる情を照し心の計謀を顯はさん（哥前四）。

善報

若その建る所の工たもたば賞を得ん（哥前三）。
各々行ふ所の善によりて主より報を受けん（弗六八）。

惡報

不義を行ふ者は亦其不義の報を受く（西三〇二十五）。
若その工やかれなば損を受くされど己は火より脫出るが如く終には救はれん……蓋は神の殿は聖きものなれば也この殿は即ち爾曹なり（哥前三〇十、十七）。

報賞

各々功力に循ひて其賞を得べし（哥一八三）。
上へ召して賜ふ所の褒美を得ん（腓三〇十四）。
報賞なる嗣業を受けん（西三〇二十四）。
王國（雅二〇五）生命の冕（默二〇十）義の冕（提後四〇八）榮の冕（彼前五〇四）壞

ざる冕（哥前九）。

神の己を愛する者の爲めに備へ給ひしもの（〇九）。

其時各人神より譽を得べし（哥前四）。

羔の婚姻の期すでに至り其婦すでに自ら備をなし畢りければなり、婦は潔くして光ある細布を衣ことを許さる此細布は聖徒の義なり（默十九〇）。

キリストは教會を愛し其爲めに己を捨て給へり、……また點汚なく皺なく凡て此の如き類なく聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建ん爲めなり（弗五〇廿五、廿七）。

羔と教會の婚姻

㋐ 礎は耶蘇基督である。賽二十八〇十六、哥前三〇十一。

㋑ 主に事ふることである。弗六〇七。

㋒ つみせられず。約五〇二四、羅八〇一。

㋓ 基督と教會。弗五〇三二。

〔携擧と現出の間七年間を患難の時代と稱する（一）其初年に於て彼の猶太人中未だ信ぜずして歸國せしもの（二）又彼等の殿を再建したる者又再建しつゝ居る者は（三）僞基督と七年間の契約をなすのである。（四）三年半

の後彼は其罪の人たるの本性を顯はし（五）其時預言しつゝあるところの二人の證者を殺し（六）久しく守り來りし日々の犧牲の式を廢し（七）而して聖所に自己の肖像を立るのである。（八）惡魔及その使等は地上に投落され彼等の時逼れるにより大なる憤怒を發し（九）殘れる三年半の間に於て（十）聖都を蹂躙する（十一）竟に患難の時が來る。その患難は世の始より今に至るまで有じ又後にも有ざる患難にして（十二）彼の僞基督（十三）及其預言者の下に（十四）全世界の上に來るのである（十五）獸の像を拜するとを拒むものは死に處せられ（十六）其印誌を受けざるものは非常の迫害を受る。（十七）ユダヤ國民中三分の一は其艱難中を經過し（十八）主によりてエルサレムに集められ（十九）渣滓より潔めらるゝのである。（二十）そこで諸國民はエルサレムの都城を襲ひ其市民を脅かし其半を捕へて囚虜とする。（廿一）其後人民は僞基督に背きイスラエルの聖者なる主に歸する。（二十二）地上の諸王はエホバの神及びキリストに敵し戰を挑む（二十三）其時主出來り（二十四）其聖徒と共に敵を亡しその人民を救ふのである。（廿五）。

以上の引照左の如し。

（一）但九〇廿七、默十一〇（二）賽六〇十三、同十七〇十、十一、同三、七、同十三〇五（三）賽六十六〇一、二、（四）但九〇廿七、默十一〇一、二、四、（五）但九〇二十七、撒後二〇三、十八〇四、五、同六十六〇三、默十一〇一、八、默十三〇十一、十（六）默十一〇（七）默十三〇十五四十三默十一〇七、同十三〇一、同十二〇十七、同十一、撒後二〇四、默十三〇十、十（十五）默三〇十（十六）默十三〇十五默十三〇十、十五、默十二〇、默十一〇二（十二）耶三十〇七、但十二〇四、默十三〇十（十三）但七〇二十一、廿五、撒後（十四）默十三〇十四、默十三〇十一、默十三〇一、默十九〇廿（十七）默十三〇十（十八）亞十三〇（十九）結廿二〇（廿）賽一〇廿一—廿五、同四〇四、結廿二〇十一）亞十四（廿二）賽四〇三、同十〇廿、廿一、同十七〇六—八、（廿三）詩二〇一—三、默十六〇十四、同十七〇十四、何五〇十五、亞十三〇九、十六、同十七〇十四、同十九〇十九（廿四）賽十三〇三—六、同廿六（廿五）賽五十〇二、同六十六〇五、六、何五〇十五、〇廿一、亞十四〇三亞十二〇九、十、馬四〇一—三、路廿一〇廿八

顯現

爾曹を離れ天に擧られし此イエスは爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く來らん（徒一〇）。

其日其足は橄欖山に立たん（亞十四）。

此等の日の患難の後直に彼等人の子の權威と大なる榮光を以て天の雲に乘來るを見ん（太廿四〇廿九、卅、可十三、路廿一〇二十七）。

人の子大權の右に坐し天の雲の中に顯はれ來るを爾曹見るべし（可十四〇六十二、太廿六〇六十四）。

地の王として主の來臨する事

視よ彼は雲に乘りて來る衆の目彼を見ん（默一七）。

彼等その刺したりし我を仰見ん（亞十二〇十）。

主イエス其能力の諸使と偕に天より顯はれん（撒後一〇七、太廿五〇卅一）。

我また天の闢くを見しに一匹の白馬あり之に乘る者忠信又誠實と稱せらる（默十一九）。

視よ主其處を出でゝ地に住むものゝ不義をたゞし給はんとす（賽廿六〇廿一米一〇三）。

贖者シオンに來りヤコブの中の愆をはなるゝ者につかんと（賽五十九〇二十）。

シオンの女よ歌ふて樂め視よ我來りて爾の中に居らんと主曰ひ給へり（亞二〇十）。

主は教會と偕に來臨する事

天にある諸軍皎く輝ける細布を着白馬に乘りて之に從へり（默十九〇十四）。

彼と偕にありし者は皆召れ選れたる忠信の者なり（默十七〇十四）。

我主なる神將に至らん且諸聖徒も彼と偕に至らん（亞十四〇五）。

視よ主其聖萬軍と偕に來る（猶十四）。

我等の主イエスその諸の聖徒と偕に臨らん（撒前三〇十三）。

我等の命なる基督の顯はれん時我等も之と偕に榮の中に顯はるゝなり（西三〇四）。

彼顯はれん時我儕は必ず神に肖ん（約壹三〇二）。

神の諸子顯れん（羅八〇十九）。

（僞基督の權威は主の聲に依て破壞滅亡せらる（一）僞基督と僞預言者は捕はれて硫黄と火の池に投ぜらる（二）十人の同盟の王と其諸軍は諸王の王の口より出る所の劒を以て殺さる（三）惡魔は底なき坑の中に千年間縛置か

る(四)此時の間僞基督の下に殉教者となりし者は第一復生の完了せるため甦らされ主耶蘇及び其聖徒と偕に地上に王となる(五)」

右の引照

(一)賽十一〇四、但七〇(二)賽三十〇三十一、三十三十一、撒後二〇八(三)默十七〇九、默十七〇十四、同十九〇二一(四)默廿〇二、三(五)默廿〇四—六

㈢生命を得る爲に復生る

又耶蘇の證及び神㊥の道の爲めに首斬れたる者の靈魂を見たり、此は獸と其像を拜せず其印誌を額或は手に受けざりし者の靈魂なり皆生て基督と偕に千年の間王となれり(默廿〇四)。

善事をなせし者は生を得るに甦る(約五〇二十九)。

目を醒し其中永生を得る者あらん(但十二〇一)。

是第一の復生なり(默二十〇五)。

㈠『此細布は聖徒の義なり』(默十九〇八)。

㈡召れたる者、預じめ知り給ふ者、(羅八〇二九、三十、太七〇二三、默一〇六)選まれたる者、(弗一〇四)信ずる者(弗一〇一)。

㈧聖徒、西一〇二。

㈨其他の死人に就ては、默二十〇五。

㈩僞基督の下に、默六〇九、十三〇十五。

(イ)『初はキリストの來らんとき彼に屬する者なり』(哥前十五〇二三)また僞基督の下に殉教者となりし者(落穗)(默二十〇四)。

主㊥全地に王となる

この王等の日に天の神一の國を建給はん是は何時までも滅る事無らん(但二〇四十四)。

視よダビデに一の義き枝を起す日來らん彼王となりて世を治め榮え公道と公義を世に行ふべし(耶廿三五)。

又主なる神其先祖ダビデ王の位を彼に予へん(路一〇三十二)。

我王を我が聖きシオンの山に立てたり(詩二〇六)。

萬軍のエホバシオンの山およびエルサレムにて統治め且其長老たちの前に榮光あるべし(賽二十四〇二十三、米四〇七)。

イスラエルのエホバ汝の中にいます(番三〇十五)。

かれ諸の敵を其足の下に置く時迄は王たらざるを得ざればなり(哥前十五〇二十五)。

諸〻の王はその前に俯伏し諸〻の國はかれに事へん(詩七十二〇十一)。

此世の諸〻の國は我等の主及キリストの屬となる(默十一〇十五)。

また其政治は海より海にいたり河より地のはてにおよぶべし(詩七十二〇八亞九〇十)。

ヱホバ全地の王となり給はん其日には只ヱホバのみ只其名のみにならん（亞十四、〇九）。

主は其新婦即ち教會と偕に王たるべし

諸王の王諸主の主（默十九、〇十六）。

我儕彼と偕に王と爲べし（提後二、〇十二）。

神の後嗣即ちキリストと偕に後嗣となり……偕に榮をも受べし（羅八、〇十七）。

勝を得る者には我と偕に我寶位に坐する事を許さん（默三、〇、二十一）。

爾は我儕の神の爲めに我儕を王となし祭司となし給へば也我等地に王たるべし（默五、〇、九、十）。

王となし祭司となして其父の神に屬けしむ（默一、〇六）。

父は我等を其愛子の國に遷し給へり（西一、〇十三）。

我多くの座位を見しに其上に座するものあり彼等審判の權を與へられる（默廿、〇四、默十九、〇八、十四參考）。

聖徒世を鞫かん（哥前六、〇二）。

(ト) 僞基督と其同盟の王、但七、〇二四、默十七、〇十二、十三。

(チ) 『すべての膝はわが前に屈み』（賽四十五、〇二三）、腓二、〇九、十一。

〔天國は建られ躊躇となる凡の物は地より歛められてから（一）主イエスは第一に彼に對する忠信に關し自己の民たる猶太人を審判し（二）而して後地上の萬民を神の民が艱難に在りしとき彼等の扱方に關して審判す（三）潔の後イスラエルの十族は（四）其地に持來され（五）而して猶太の二族と共に一國民となる（六）主は其民イスラエルと猶太と新約を立て給ふ（七）彼等の罪を赦し其罪を憶ひ給はない（八）而るに主の敵は罰を蒙り（九）ゴグと其軍勢も其中にあり（十）是皆破られ滅さるゝものとなる（十一）猶太人民は其全土を悉く領す（十二）是約束あるが故である（十三）「番紅の花の如く花咲く」所の大沙漠も其領地の中に包含す（十四）神殿（十五）と府城は（十六）神の雛形に從て再建せられレビ人の獻物と禮拜の方法はもつと附加られて再興せられ（十七）聖山に於ては凡て害され或は滅さるゝものがなくなる（十八）主復た其手を垂れて地の四極より再び其民イスラエルと猶太の遺族を回復す（十九）エルサレムは全地の讃美する處喜の所となる（二十）エルサレムの中央に在す主は（廿一）其榮華と永遠の燈となり又夜あることがない（廿二）萬民來りて主を拜し幕屋の節を守る（廿三）地は主の榮光を以て充滿せらる（廿四）〕

次の引照。

（一）賽十三、〇九、同三十三、〇十（二）太廿五、〇十四—卅、路十九、〇十二—廿七（三）耳三、〇二、十二、太廿五、〇卅（四）結二十、〇四、太十三、〇三十、四十一（五）賽四十九、〇十二—廿三、結廿、〇四十一—四十（六）賽十一、〇十三、結三十七、〇（七）耶卅一、〇卅一—三十三、同八、〇九、十（五）二、同卅六、〇二十四、慶九、〇十四、十五（六）賽十一、〇十三、結三十七、〇（七）耶卅一、〇卅一—三十三、同廿二、〇四十、同五十、〇四、五、結卅七、〇廿（八）賽六十、〇廿一、耶卅一、〇卅四、同卅三、〇八、同五十、〇廿、六、羅十一、〇廿六、廿七、來八、〇八—十一（八）結三十六、〇廿五—三十三、來七、〇十八、十九、來八、〇十二（九）賽二、〇十七—廿一、同廿六、〇九、同卅四、〇二、結廿八、〇廿六、來五、〇十五、拿一、〇八（十）結三十八、〇十八—一、十七（十一）同三十九、〇廿一、（十二）結四十、七、〇十

三—同四十（十三）創十五〇十八、申十八〇廿九、書一〇四（十四）賽三十二〇十五、同三十五〇一、二、同一〇廿四、結三十六〇三十三—三十六（十五）結四十〇一、七〇十（十六）賽六十〇十、耶卅一〇卅八、四十、結四十八〇（十七）結四十三〇十八—同四十（十八）賽十一十五—十七、三十—三五、亞十四〇十四〇十、十一六〇二十四、馬三〇三、四（十九）賽十一九、同卅三〇廿四、同卅五〇九、同五十五〇十三、同六（十九）五、結三十一〇十一、十二、耶五十〇四、十五〇廿五、結卅四〇廿五、何二〇十八、默廿二〇三（廿一）結四十八〇三十五、耳三〇十七、廿（廿二）賽六十十八〇二、賽一〇廿六、同六十〇十四、同六十二〇三（廿一）一、番三〇十五—十七、亞二〇十〇七、同六十五〇十八、耶卅一〇廿三、亞八〇三（廿四）詩四廿、亞二〇五、（廿三）賽二〇一—三、耶三〇十七、米四〇二、默二十二〇五亞八〇二十—廿二、同十四〇十六—十九（廿四）民十四〇廿一、詩七十二〇十九、賽十一〇九、哈二〇十四

新婦の家庭なる天の城

七人の天使の一人來りて我に語りて曰けるは、來れ我爾に羔の妻なる新婦を見せんと、彼又我に大なる城聖きエルサレム神の所を出て天より下るを示せり（默廿一〇）。

我神の京城即ち天より我が神の所より降る新しきエルサレム名を之に書さん（默三〇十二）。

其高大と美麗

此に大なる高き石垣ありて十二門あり、其門に十二の天使居れり、門の上に名を書せりイスラエルの十二の支流の名なり（默廿一〇十二）。

城の石垣に十二の基趾あり其上に羔の十二使徒の名あり（默廿一〇十四）。

石垣は金剛石にて築き城は清潔なる玻璃の如き純金にて造れり（默廿一〇

八十）。

城の石垣の基趾は各樣の玉にて飾れり（默廿一〇十九）。

十二の門は十二の眞珠なり一の眞珠にて一の門を造り城の衢は澄徹る玻璃の如き純金なり（默廿一〇廿一）。

其榮光と清純

われ城の中に殿あるを見ず蓋は主たる全能の神及羔其殿なればなり、又城に日月の照す事を需めず蓋は神の榮光之を照し且羔城の燈なればなり（默廿一〇廿二、廿三）。

其城の光輝くこと至寶き玉の如く澄徹る金剛石の如し（默廿一〇十二）。

萬の國の民此光に藉て歩まん、地の諸王己の榮と尊貴とを以て此城に來らん、其門は終日閉ぢず此に夜あることなし、萬の民己の榮と尊貴を以て此城に來らん（默廿一〇廿四—廿六）。

凡て潔らざる者及憎むべき行を爲すもの或は謊を言ふ者は必ず此に入ることを得ず、唯羔の生命の書に錄されたる者のみ入るなり（默廿一〇廿七）。

〔千年の終に於てサタンは暫く其囚獄より放たれ（一）地上の四方の民とゴグとマゴグの民を欺き戰を爲さんと

て人々を集め(二)彼等諸聖徒の陣營と夫の愛さるゝ城を圍む(三)而して神天より火を降して彼等を亡す(四)而して彼等を誘ひし惡魔は火と硫黄の池に投ぜらる彼の獸と僞預言者も亦此にあり、皆永遠限なく夜も晝も苦痛しむ(五)〕

(一)默廿〇(二)〇八(三)默廿(エルサレム)賽四〇三　(四)默廿〇九(五)默廿〇十

全地の審判者

われ白き大なる寶座とこれに坐する者を見る(默廿〇十一)。

生けるもの死ねる者を審判するイエス、キストリト(提後四〇一)。

生ける者死者の審判人に神より定められし者(徒十〇四十二彼前四〇五)。

審判は凡て子に委たり(約五〇廿二)。

我又死し者の大と小との別なく皆神の前に立を見たり(默廿〇十二)。

海其中の死人を出し死と陰府と其中の死人を出せり(默廿〇十三)。

刑罰の爲めに復生する事

㊀ 第一の復生に與らざりし者、默二十〇五、六。

㊁ 子の前、約五〇二二、羅二〇十六。

最後の審判

其處に書ありて展く別に又一つの書ありて展く是生命の書なり、死し者は皆書に錄せる所の事に由り其行に從ひて審判を受くるなり(默廿〇十二)。

凡て生命の書に錄されざる者も亦火の池に投げ入れられたり(默廿〇十五)。

火と硫黄の燃ゆる池にて其報を受くべし是第二の死なり(默廿一〇八)。

最後の敵

最後に滅さるゝ敵は死なり(哥前十五〇廿六)。

死と陰府と火の池に投入れられたり是第二の死なり(默廿〇十四)。

天地の廢滅

天地は廢せん(可十三〇三十一)。

天は大なる響ありて去り體質盡く焚毀れ地と其中にある物皆焚盡ん……天熱毀れ體質焚け鎔ん(彼後三〇十・十二)。

天は烟の如くきえ地は衣の如くふるびん(賽五十一〇六)。

此等は亡ん……此等は凡て衣の如く舊びん爾此等を袍の如く捲む又彼等は變らん(來一〇十一、十二)。

新天新地

(地と天と其前を遁れて再び止まるべき所を得ず(默廿〇)。

寶座に坐するもの吾に曰けるは視よ吾萬物を新にせん(默廿一)。

視よ吾新しき天と新しき地とを創造す(賽六十五)。

われ新しき天と新しき地を見たり先の天と先の地は既に過ぎ去り海も亦あることなし(默廿一)。

新しき天と新しき地を望み待てり義其中にあり(彼後三)。

神は凡の物の上に主たる事

後彼諸の政及諸の權威と能を滅して國を父の神に付さん是終なり(哥前十五)。

萬物彼に服ふ時は子も亦自ら萬物を己に服はしゝ者に服ふべし是神すべての物の上に主たらん爲めなり(哥前十五)。

羔の新婦

(㊫)吾聖城なる新しきエルサレム備整ひ神の所を出でゝ天より降るを見る其狀は新婦其新郎を迎ん爲に修飾たるが如し(默廿一)。

(㊫) 創六〇十一、十三〇九、十一、十六、賽二十四〇五、彼後三〇七參考。
(㊫) 詩六十八〇八、翁一〇五、伯十五〇十五、二十五〇五。
(㊫) 弗二〇七、哥前二〇九、十、哥後五〇五、弗三〇二一、彼後三〇十四。

神人と偕に住み給ふ

吾大なる聲の天より出づるを聞けり云く、神の幕屋人の間にあり神人と共に住み人神の民となり神又人と共に在して其神と爲り給ふなり神彼等の目の涕を悉く拭とり復死あらず哀み哭き痛あることなしそは前事既に過去ばなり(默廿一〇)。

引照

便宜の爲め聖書中に記せる順序に從て、主の再臨に係る緊要なる聖句を左に記し、又區別するが爲め其要點を示したる言を擧ておく。

シナイ山、シナル山、變貌及び再臨(申卅三)。

子の產業等(詩二)。

萬民を審判しまた支配する(詩六十)。

主審判せん爲めに臨る(詩九十六〇十—十三、同九十八〇九)。

シオンを建て榮光を以て顯るゝ(詩百二)。

人の子其國を領せんとて來る(但七〇十三)。

彼前と後の雨の如く臨る(何六三)。

イスラエル基督を見て受納るゝ(亞十二〇十)。
彼は橄欖の山に立つ(亞十四〇四)。
諸聖徒と偕に臨る(亞十四〇五)。
其父の榮光をもて來らん(太十六〇廿六、廿七)。
其榮光の寶座に坐す(太十九〇廿八)。
答へられたる三疑問(太廿四〇)。
新郎(太廿五〇一—十二)。
僕等の審判(太廿五〇三—三十)。
萬民の審判(太廿五〇一—四十六)。
天の雲に乘りて來る(太廿六〇十四)。
人の子も其來る時知らずと言はるゝ人の事(可八〇廿八)。
答られたる三疑問(可十三〇)。
天の雲に乘りて來る(可十四〇六十二)。
人の子も其來る時知らずと言はるゝ人の事(路九〇廿六)。
腰に帶し燈を燃す(路十二〇廿五—四十八)。

ノア及ロト等(路十七〇廿—廿七)。
信を世に見んや(路十八〇八)。
領地を受けて歸らんとて往くことゝ十人の才能ある僕(路十九〇十一—廿八)。
答へられたる三疑問(路廿一〇)。
天闢け天使降る(約一〇五十一)。
約束。來りて爾曹を受る(約十四〇三)。
吾爾曹に來らん(約十四〇十八)。
去りて復來らん(約十四〇廿八)。
彼若し我來る迄存らへるとも(約廿一〇廿二)。
此イエスは復來る(徒一〇十、十一)。
安舒日(徒三〇九—廿一)。
再臨を待つ(哥前一〇四—八)。
主の來る迄は審判せざる事(哥前四〇五)。
彼の來る迄の聖餐(哥前十一〇廿六)。
復生の順序と基督の來らん時彼に屬ける者(哥前十五〇廿三)。

詛はるべし主臨らん（哥前十六、○廿二）。
主の日に於て誇る（哥後一、○十四）。
基督の日迄（腓一○、六—十）。
基督の日に於て欣ぶ（腓二○、十六）。
死人の中より復生る（腓三○、十一）。
國籍、救主を待望む（腓三○廿、）。
主は近し（腓四、○五）。
彼と共に顯はるゝ（西三○、三—五）。
天より其子の臨るを待つ（撒前一、○九）。
主の臨らん時の望と喜と冕（撒前二、○十九）。
其來らん時責べき所なし（撒前三、○十三）。
携擧（撒前四○十、三—十八）。
時と期、夜と晝（撒前五、○一—十）。
其來らん時咎なからしめん（撒前五、○廿三）。
火焰の中に顯はるゝ（撒後一○、七、十）。

惡者が彼の來臨の光輝に依て滅さる（撒後二○、一—八）。
其顯はれん時迄誡を守れ（提前六○十、三—十五）。
顯はるゝ時の審判と王國（提後四、○一）。
彼の顯を慕ふ凡の者に冕備はる（提後四、○八）。
望む所の福と榮の顯の事（多二○十、一—十五）。
三の顯現（來九○廿、四—廿八）。
信仰と望と愛（來十○廿、二—廿四）。
日近けり（來十○、廿五）。
暫時の忍耐（來十○廿、五—廿七）。
忍びて主の來るを待つべし。前と後の雨（雅五○、七、八）。
信仰の試（彼前一、○七）。
終りまで望む（彼前一、○十三）。
彼の榮光の顯はれん時（彼前四、○十三）。
牧者の長の顯はれん時（彼前五、○一—四）。
戲謔者—主の日（彼後三、○）。

彼の顯はれん時我儕懼なし(約壹二)。
今神の子たり、神に肖んと、此望を懷く、自己を潔む(約壹三〇)。
肉體となりて來る(約貳)。
主審判を行はんとて諸聖徒を率て來る(猶十四、十五)。
視よ彼は雲に乘りて來る(默一)。
我來る迄堅く守れ(默二〇)。
若し目を醒し居らずば我盜賊の如く汝に至らん(默三)。
試煉の時より免れしむ、われ迅速に來らん(默三〇十、十一)。
地は刈收らる(默十四〇十)。
視よ我盜賊の如くして來らん、目を醒し居る者は福なり(默十六)。
主耶蘇よ來り給へ(默廿二)。

第十九章　詛か慰か

此問題に關して嚴かなる意味を示すところの聖句は多くあるけれども、特に次の二句を擧げたい。其一は哥前十六章の二十二にあるパウロの挨拶の言である。彼は祝福を述る前に左の語を以て、耶蘇を愛せざる者を排斥して居る。『もし人主イエスキリストを愛せざれば

詛はるべし主臨らん』。

アナセマとは詛はる、罰せらる、滅亡に定めらるといふ意味である。
マラン―アサとは主は臨るといふ意味である。
彼をして詛はれしめよ、主は來る、(直譯)。
神は忍びて待ち給へる今の時に、人が主耶蘇を拒み、輕んじまた嫌ふことは、いと易き事である。しかし耶蘇は來りつゝある。『家の主人おきて門を閉し後に』主を拒む者は禍である。パウロには此が解つたから『凡の人には我その衆の人の狀に循へり是いかにもして彼等數人を救ん爲なり』(哥前九二)と言たのである。『これ來らんとする怒より拯ふ』(撒前一)爲である。オーかの人々は『遇ことを得る間にエホバを尋ね』『來んとす

る怒を避る』やうになる事を願ふ者である。

尙一の聖句は約貳七節である、『惑に誘ふ者おほく世に出イエスキリストの肉體となりて臨り給ひつゝあることを認はさず此惑に誘ふ者は乃ちキリストの敵なれば也』。この臨るといふ語はエルコメノンであるが、正しき譯は臨りつゝあるである。耶蘇は殊

㋐(彼前三〇十九、二十)彼その靈を以て獄にある靈に宣傳へたり。この獄にある靈ば昔ノア方舟を備る間神の忍て待給へるとき從はざりし靈なり。此方舟にいり水に由て救れし者ば僅にして惟八人なりき。

(彼後三〇九)主その約束し給ひし所を成に遲きは或人の遲しと意ふが如くに非ず。一人の亡ぶるをも欲み給はず衆人の悔改に至らんことを欲みて我儕を永く忍び給ふ也。

㋑(路十三〇二五)家の主人おきて門を閉し後に、爾曹外にたち門を叩て主よ主よ我に啓と曰んに、主人こたへて我なんぢらは何處より來しか知ずと曰ん。

(可十三〇三五—三七)是故に爾曹も怠らずして守れ。蓋家の主人あるひは夕あるひは夜半あるひは鷄鳴時あるひは早晨に歸るかを知ざれば也。恐くは不意の時きたりて爾曹が眠るを見ん。われ怠らずして守れと爾曹に告るば卽ち凡の人に告るなり。

㋒(箴五十五〇六)なんぢら遇ことをうる間にエホバを尋れよ。近くゐたまふ間によびもとめよ。また拾後六〇二。

㋓(太三〇七)バプテスマを受んとてパリサイ及サドカイの人々の多く來れるを見て彼等に曰けるは蝮の裔よ誰なんぢらに來んとする怒を避べきことを告しや。

に『來べき者』と呼れた。これらの惑に誘ふ者は化身卽ち基督が肉體となりて—過去に於ても將來に於ても—來ることを否定したのである。アルフォード、ジヤミーソン、フオセット及びブラオン諸氏の著書を見られよ。

これは特別に注意すべき事である。

耶蘇基督の肉體となりて來る

ことを拒む者は誘惑者であり又一の僞基督である。卽ち彼は遂には一大存在者なる僞基督として個人的に顯るゝ者の靈に憑れて居る者である。

この聖句が我等の聖書に間違つて譯せられた事は殘念なる事である。これは耶蘇が肉體となりて來りつゝあると强く斷定したものであるが、今日廣く流布して居るところのかの不正なる聖書の心靈的解釋なるものを確に拒ぎ得るものである。

㋔携擧の時には耶蘇は自ら臨り給ふ。これは主は㋕顯現の時再び此地上に來り給ふのであるが、其は同じ耶蘇で、㋖其往き給ひし時と同じ狀態で來り給ふのである。

㋔(太十一〇三)曰せけるは來べき者は爾なるか又われら他に待べき乎。

(來十〇三七)今片時ありて來る者きたらん必ず遲らじ。

(默一〇七、八)視よ彼は雲に乘りて來る。衆の目かれを見ん。彼を刺たる者も亦これを見べし。且地の諸族これが爲に哀哭んアメン。主たる神いひ給へり我はアルパ也オメガなり始なり終なり今あり昔あり後ある全能の者なり。

(默四〇八)この四の活物おの〳〵六の翼あり其内外こと〴〵く目なり。此もの夜晝息ずしていふ聖かな聖かな聖かな、昔し在し今在し後いまします主たる全能の神と。

(約六〇十四)人々イエスの行し奇跡を見て此は誠に世に臨るべき預言者たりと曰。

(撒前四〇十六—十八)それ主號令と使長の聲と神の筺を以て自ら天より降らん。其時キリストに在て死し者先に甦へり。後に活て存る我儕かれらと偕に雲に携へられ空中に於て主に遇べし。斯て我儕いつまでも主と偕に居ん。是故に此等の言を以て互に慰むべし。

(約十四〇三)もし往て我なんぢらの爲に所を備ば又きたりて爾曹を我に納べし。我をる所に爾曹をも居しめんとて也。

(撒後二〇七—十)それ不法の隱たる者すでに働けり。今これを抑るもの除るゝまで隱なり、其時に至りて不法の者あらはるべし。主イエス其口の氣を以て彼を滅さん。其臨るとき發す所の榮光を以て彼を廢せん。彼サタンの行爲に循ひて各樣の僞なる能と徵と奇跡、かつ不義の諸の詭譎を以て顯れかの淪亡者の中に在なり。蓋かれら眞理を愛するの愛を受ずして救を得ざる者なれば也。

(徒二〇十一)曰けるはガリラヤ人よ何故に天を仰て立るや。爾曹を離て天に擧られし此イエスは爾曹が彼の天に昇るを見たる其如く亦きたらん。

視よ、主は雲に乘りて降り給ふ、
曾て愛する罪人の爲に死にわたされたり。
千々萬々の聖徒其側にあり、
其列に連り凱歌を奏す、
ハレルヤー
神は王となりて地上に顯はれ給ふ。

主耶蘇を愛せざる者には降り懸る審判と報の恐るべき前兆があるけれども、主の顯はるゝのを慕ふ者にとりては、これは

最も心地よき慰藉

である。

此事は教會の地位を眞に了解する者には明白である。教會なる者は來るべき神の國と同視すべきものでなく、また舊約の聖徒等をも含んで居るものでない。何故なれば教會は基督が降臨したまふてから設立せられたものであるからである。其はペンテコステの日から始まつたもので(徒二)、携擧の時に完成するものである。撒前四〇十七。其は神が其民イスラエル人に關係して居る其間に起るところの者である。イスラエル人は不信の故を以て折られてあるけれども、教會は接れたのである。

教會は其主の苦難を分擔するものとなり、㋟主の跡に隨ひ、㋠主は卑賤に居しとき、自己を卑して行み（腓二〇二—八、）し如く行む事によりて、㋡主と偕に崇められるゝ時、最も大

㋞（太十六〇十八）我また爾に告ん爾はペテロなり。我も教會をこの磐の上に建べし。陰府の門は之に勝べからず。

㋛（羅十一〇十七）もし幾數の枝を折れたるに爾野の橄欖なるそれを其中に接れ共に其根により共に其汁漿を受るならば。

㋜（徒五〇四一）使徒等はイエスの名の爲に辱を受るに足者とせられし事を喜びて議員の前を去る。（腓一〇二九）そは爾曹に賜ふ所の恩はキリストの爲に第これを信ずること而已ならず亦これが爲に苦を受ることをも賜たればなり。

㋝（約十三〇十五）我なんぢらに例を示せり。此は我なんぢらに行し如く爾曹にも行しめん爲なり。（彼前二〇二一）爾曹の召れたるは之が爲なり。蓋キリスト爾曹の爲に苦をうけ爾曹をして己の跡に隨はしめんとて式を爾曹に遺し給へば也。

㋞（徒八〇三三）かれ卑賤に居しとき義判を奪れたり。誰か能その世の狀を述得んや。蓋かれの生命地より滅れたれば也。

㋟（腓二〇五—十一）爾曹キリストイエスの意を以て意とすべし。彼は神の體にて居しかども自ら其神と匹く在ところの事を棄難さこと〳〵意はず、反て己を虛うし僕の貌をとりて人の如なれり。既に人の如き形狀にて現れ己を卑くし死に至るまで順ひ十字架の死をさへ受るに至れり。是故に神は甚しく彼を崇て諸の名に超る名を之に予へ給へり。此は天に在もの地に在もの及び地の下にある者をして悉くイエスの名に由て膝を屈しめ、且もろ〳〵の舌をして悉くイエスキリストは主なりと稱揚して父なる神に榮を歸せしめん爲なり。

なる恩を受るに足るものとせらるゝのである。

基督の新婦

耶蘇は新郎であつて、教會は其新婦である。洗禮の約翰はモーセ的時代の最後の代表者として顯はれたが、かく申された。『我はキリストに非ず……新婦をもてる者は新郎なり新郎の友たちて其聲を聞ば之に緣て喜び多し我いま此喜び滿ることを得たり』（約二〇二八、二九）こゝには舊約の聖徒と基督の新婦との間の明白なる區別を示してある。

舊約の聖徒は全ふせらるゝであらう。神は『彼等も我儕と偕ならざれば成全すること能はざる爲に更に愈れる者を預じめ我儕に備へ給へり』（來十一〇四十）。これ教會は彼等よりも尙價値があるからでなく、神が勝れて豐かなる恩を以て、基督の天的新婦として教會を選び給ふたからである。

イスラエルは地的新婦であつて、一時的の恩を以て慰められた。またその所まで回復せらるゝのである。今は不信の爲に荒されて居るけれども、其子孫は海の砂の如くなるのである。賽五十四〇、耶三〇一—十八、三十一〇三二、結十六〇、何一〇十、十一、二〇三。十五章を見られよ。

教會は基督の體である。基督との其貴き一致は以弗所の書翰に最も明白に錄されてある。其を見れば教會は靈的に生されたるもの、甦りし主と偕に天の處に坐せしめ

られ、『世基を置ざりし先よりキリストの中に簡ばれ』、愛によりて神の前に聖く疵なき

㋝(撒後一〇五)これ神の義鞫の表なり。爾曹をして神の國に入べき者とならしめん爲なり。爾曹いま神の國の爲に患難を受。

(羅八〇十七)我儕もし子たらば又後嗣たらん。即ち神の後嗣にしてキリストと偕に後嗣たるものなり。我儕もし彼と偕に苦を受なば彼と偕に榮をも受べし。

㋡(弗二〇七)これ今より後の世々キリストイエスの中にて我儕に施す所の仁慈をもて其恩の勝て豐なることを顯さん爲なり。

㋢(哥前十二〇二七)爾曹はキリストの體にして亦おのゝ其肢なり。

㋣(弗二〇一)神は愆と罪に死し所の爾曹をも生し給へり。

㋤(弗一〇二十)即ちキリストに行ひし所にして彼を死より甦らせ諸の政と權威と能力と宰治又此世のみならず來らんとする世にも凡て稱ふる所の名の上に置き天の處にて己の右に坐せしめ能也。

㋥(弗一〇三)神即ち我儕の主イエスキリストの父は頌べきかな。彼キリストに由て諸の靈の恩を以て天の處にて我儕を己に惠みたり。

(弗二〇六)又イエスキリストに在われらを彼と偕に甦らせ共に天の處に坐せしめ給へり。

㋦(弗一〇四―六)それ神我儕をして其前に聖く疵なからしめん爲に世基を置ざりし先より我儕をキリストの中に簡び、その意のまゝにイエスキリストに由て我儕を己の子と爲んことを愛を以て預じめ定たり。その恩の榮を讃しめんため也。すなはち愛する者に在われらに賜ふ所の恩なり。

ものとせらるゝとある。また『恩の榮を讃る者……愛する者に在』者、『業を嗣の質な
る約束の聖靈を以て印せられ』たる者としてある。

我等は何卒して『其召を蒙りて有つ所の望と聖徒に賜ふ所の業の榮の富』とを識る
爲に『智慧と默示の靈』を得んことを願ふものである。(弗一〇、七、十八、十)。我等は『今よりの
ち異邦人の如く』行まず、『愛を以て眞理を行ひ長て凡のこと首なるキリストに效ひ……
……其體を育……愛に由て德を建』かくて『神の子を信じ之を知り全人すなはちキリス
トの滿足るほどと成までに至り』たいものである。(弗四〇十三、十五―十七)。即ち敎會は體で、基
督は首であり、かくて一箇の全き人となるのである。『二人のもの一體と爲なり』。これ
は『義と潔にて造れる新人』(弗四〇二四)である。婦人の眞の裔は蛇の首を碎くのである。

されば敎會は『神の聖靈をして憂しむること勿れ爾曹救を得る日の爲に彼の印を受
し者なり』(弗四〇三十)と警告されて居るのである。また『互に仁慈と憐恤あるべし』(四〇三十
二)『愛を以て行ひ』(五〇二)『光の子輩の如く行ふべし』(五〇八)『つゝしみ……智者の如く
し機を窺ふべし』(五〇十五、十六)『靈に滿さるべし』(五〇十八)『保養へ』(五〇二九)とある。かく
て基督の新婦は『點汚なく皺なく凡て此の如き類なく聖にして瑕なき榮なる敎會』と
して主の前に提供せらるゝやうに潔めらるゝところまで行くのである。『我儕は彼が身

の肢なり』。耶蘇は其新婦を御自身の許に迎んとて來るといふ思想よりも尙貴きものは

㊃(弗一〇十三、十四)爾曹も眞の道すなはち爾曹を救ふ福音を聞し後キリストを信じ我儕が業を嗣の質なる約束の聖靈を以て印せらる。神聖靈をもて印したまふは其買受し者を救ひ且おのれの榮を顯さんため也。

㊄(太十九〇四—六)答て彼等に曰けるは元始に人を造り給ひし者は之を男女に造れり。是故に人父母を離れて其妻に合二人のもの一體と爲なりと云るを未だ讀ざるか。然ばにや二には非ず一體なり。神の合せ給へる者は人これを離すべからず。

(弗五〇三一)是故に人は父と母を離れ其婦に配ひ二のもの一體になるべし。

㊅(創三〇十五)又我汝と婦の間および汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨を置ん。彼は汝の頭を碎き汝は彼の踵を碎かん。

(羅十六〇二十)平安の神なんぢらの足の下に於てサタンを速かに碎くべし。我儕の主イエスキリストの恩なんぢらと偕に在んことを願ふ。

㊆(弗五〇二五—二七)夫なる者よキリスイの教會を愛し其爲に己を捨給ひし如く爾曹も婦を愛すべし。おのれ己を捨しは水の洗を以て道に因て教會を潔め之を聖なる者とせんが爲なり。また點汚なく皺なく凡て此の如き類なく聖にして瑕なき榮なる教會を自ら己の前に建ん爲なり。

(弗五〇三十—三二)我儕は彼が身の肢なり彼が肉より出われが骨より出たり。是故に人は父と母を離れ其婦に配ひ二のもの一體になるべし。この奥義は大なり我いふ所はキリストと教會を指なり。

他にあるだらうか。これ實に仁慈と愛に充る事である。主は御自身に新婦を受るために爲ぬ事とては一もないであらう。其會合の喜悅は到底筆や舌では書き盡す事が出來ない。『神の己を愛する者の爲に備へ給ひしものは目いまだ見ず耳いまだ聞ず人の心いまだ念はざる者なり』(哥前二〇九)。我等は聖靈によりて『質』を有し、來るべき喜の前觸として『初て結べる實』を有て居る者である。しかしかの時には教會は遺れる愛—親しみの充實—主に抱かるゝ大悅を實驗し、主の愛の美麗に滿足するのである。

此慰藉は教會と神の國との間に確然たる區別をして置かなければ失はるゝところのものである。教會は支配せらるゝものでなく、㊇基督と偕に支配するところのものであ

心の苦痛と悲哀は更に無るべし、
耶蘇來らん時。
唯平和と喜悅と滿足あるのみ、
耶蘇來らん時。

我途の悲慘なりしを主は知り給はん、
耶蘇來らん時。

我足の疲れ果しを主は知り給はん、
耶蘇來らん時。

我を苦しめし者は何なるやを主は知り給はん、
耶蘇來らん時。

オー、主のおん腕は我を息しむべし、
耶蘇來らん時。

我等の主の再臨の問題はかく重要なるもので、聖書全體の中に織り込れ、研究すべき無限の原であり、眞理の無盡藏の鑛山である。此事に關して喜んで言んと欲する者は多くあり、また此小書籍は既に豫想以上に書して居るけれども、其時期に關してなほ數言を加へたく思ふものである。

此問題に關し尙深く知りたいと思ふ人々に我等は其助としてムーデー氏の說敎、ブルックス博士の「マランアサ」、チング博士の「彼來らん」、ダブルユー、トラター氏の「預言問題の畧解」などを紹介するものである。また英國の大會に於る講演集の印刷せられたるもの、例へば「福なる望につける十六說敎」、「我等の神は來るべし」、また殊にニューヨークの預言大會に於る千年期前再臨の論文またヂョーヂ・エチ・ペンバー氏の「大預言」は有益である。

㋐（提後二〇十一、十二）爰に信ずべき話あり。我儕もし彼と共に死なば彼と共に生べし。我儕もし忍ばゞ彼と共に王と爲べし。我儕もし彼を知ずと言ば彼も我儕を知ずといはん。

第二十章　時期

先づ我等は携擧の時と顯現との間に明白なる區別を置かねばならぬ。（第八章の圖解を見られよ）。此區別をせざる爲に多の人々は我等の主の歸り來る日を定むる樣な悲しむべき誤謬に陷つて居るのである。

携擧に關する重なる思想は、それが今にも起るかも知れぬといふ事である。携擧の休徵や日に關しては聖書の中に明白に示されてない。されば何時でもよいやうに、常に目を醒し待望み居るべきである。

㋑敎會は患難を脫るゝ爲に此世から携へ擧らるゝ前に、㋺無花果の樹の徵が起り始めるのを見るやうになるのは眞なる事である。

是等の徵とは、殊に戰爭、地震または『諸國の人哀み海と波との湍涛』であるが、過去十八世紀間の敎會は當然これらの徵が各世紀每に始まりつゝあつた事を信ぜねばならぬ。

されば携擧の日なるものが分らないのである。たゞこれが顯現前にある事だけが分つて居る。即ち基督は其敎會と偕に來る前に、㋻敎會を受んが爲に來るのである。其二の間をば患難の時代といふのである。

㋐(路二十一〇三四—三六)爾曹みづからを慎よ。恐くは飲食に耽り世事に累れ爾曹の心昏迷なりて慮らざる時に此日なんぢらに臨ん。これ機檻の如く遍く地の上に居者に臨むべし。是故に爾曹儆醒て此臨んとする凡の事を避また人の子の前に立得やうに常に祈。

㋑(路二十一〇二五—三一)また日月星に異象あるべし。地にては諸國の人哀み海と波との溺潔に因て顛沛、人々危懼つゝ世界に來んとする事を俟惱むべし。是天の勢ひ震動すべければ也。其時人々は人の子の權威と大なる榮光を以て雲に乘來るを見るべし。此等の事の成初め時には起て爾曹の首を擡よ。蓋なんぢらの贖ちかづけば也。イエス譬を彼等に語けるは無花果と凡の樹を見よ。既に萌ば爾曹これを見て自ら夏はゝや近と知。此の如く爾曹も此等の事成を見ば神の國の近を知。

㋺(猶十四、十五)アダムより七代に當れるエノク此輩の事を預言して曰けるは視よ主其聖萬軍と偕に來りて衆人を鞫かん。

㋩(撒前四〇十六、十七)それ主號令と使長の聲と神の筮を以て自ら天より降らん。其時キリストに在て死し者先に甦へり。後に活て存る我儕かれらと偕に雲に攜へられ空中に於て主に遇べし。斯て我儕いつまでも主と偕に居ん。

顯現の時については利未記二十六章、但以理書または默示錄のうちに、多の預言の時期中に示されてある。しかし其表號的の語や我等の不完全なる曆學のために、其を解釋する事は困難でまた不確實である。今茲に十分考究するの餘裕がないが、我等はこれを熱心にまた祈り深く研究したる結果、其時が速でまた終に近いて居るといふ事を確實に言ひ得る大膽を有して居る者である。

顯現に先んじて左の出來事が起らねばならぬ。其はイスラエル人(少なくも其一部)の恢復と僞基督の出現である。此二は顯現の接近を示すものである。

僞基督は、撒後二〇七にある如く、携擧の後でなければ顯はれぬものである。またイスラエル人の恢復(不信なる一部をのぞき、番二〇一、二)も其事の後に起ることは眞實である。何故と言に、『エルサレムは異邦人の時滿るまでは異邦人に蹂躪さるべし』(路二十一、二四)とある。而してまたダビデの幕屋は、神が其聖名の爲に異邦人の中より一の民を取り給ふまでは再建せられないとある。(徒十五〇十、四—十六)。

㋩(結二十二〇十九—二二)此故に主エホバかく言ふ汝らは苦渣滓となりたれば視よ我なんぢらをエルサレムの中に集む。人の銀銅鐵鉛錫を爐の中に集め火を吹かけて鎔がごとく我怒と憤をもて汝らを集め入て鎔すべし。卽ち我汝らを集め吾怒の火を汝らに吹かけん。汝らはその中に鎔ん。銀の爐の中に鎔るがごとくに汝らはその中に鎔け我エホバが怒を汝らに斟ぎしを知にいたらん。

㋥(亞十三〇八、九)エホバ言たまふ全地の人二分は絶れて死に、三分の一はその中に遺らん。我その三分の一を携へて火にいれ銀を熬分るごとくに之を熬分け金を試むるごとくに之を試むべし。彼らわが名を呼ん。我これにこたへん。我これは我民なりと言ん。彼等またエホバは我神なりと言ん。

(撒後二〇七、八)それ不法の隱たる者すでに働けり。今これを抑るもの除るゝまで隱れり。其時に至りて不法の者あらはるべし。主イエス其口の氣を以て彼を滅さん。其臨るとき發す所の榮光を以て彼を廢せん。

是等の出來事が近いて居るといふ事を徵を以て證據立る事は神の喜び給ふ事である。これによりて我等は其日の近き事を知るのである。しかし前にも述たとほり、是等の徵は敎會が各世紀毎に繰返されて見せられたところのものである。敎會には其携擧の時を明白に示すところの日も徵候も與へられて居らぬといふ事は、故意とせられた事であると我等は信ずる。されば敎會はいつでも寢らずに氣を付て居るべきである。萬事は神の計畫の中にある。されば是等の出來事が明にせられたる事は、敎會にとりて常に目を醒し守り居る事の刺激となるものである。

祭司の長がたゞ獨り至聖所に入つた時は、全會衆は彼が獻物をなして、民を祝福せん爲に其處より出て來るまでは、外に居て待て居たものである。（利十六〇、三一二六、民六〇二、路一〇十一）。その如く我等の祭司の長は眞の聖所に我等凡の爲に一度入り給ふた。而して敎會は彼

(ヘ)（來十〇二五）會集を輟る或人に倣ふことなく共に相勸め其日いよ〳〵近るを見て益〳〵此の如くなすべし。

(ト)（來九〇二四—二八）キリストは眞の物の模なる手にて造る聖所に入ず今より永く我儕の爲に神の前に顯れんとて眞實の天に入ぬ。また彼は祭司の長の年ごとに他の物の血をもて聖所に入如く屢おのれを獻ることをせず。もし然ずば彼創世より以來しば〳〵苦難を受べきなり。然ど已た犧牲となして罪を除かんが爲に今世の季にひとたび顯現たり。一たび死ること〳〵死て審判を受ることゝは人に定れる事也。如此キリストも多の人の罪を負んが爲に一たび犧牲とせらる。彼は復罪を負ことなく已を望む者に再び顯現て救を施すべし。

が復罪を負ことなく再び顯はるゝまで、熱心に主を待望み居るのである。されば敎會は『腰に帶し火燈を燃して居り……主人を待人の如く』目を醒し居らねばならぬ。我等は一日々々と暮しつゝ、我等の救は信仰の初より愈々近いて居るといふ確信を有て居るものである。敎會は其歷史中に幾度も其日が近いて居るといふ證據を示されたが、現代に於る其證據とは何であるか。其は特別なる意味のあるものである。

我等は時の休徵なるものを眞實に見るなれば、かの共產主義と虛無主義と無政府主義との無神不法の三組が、今日諸國民の間に滲み渡つて居る汚れたる靈で、僞基督の先觸である事を見るものである。

歸りつゝあるユダヤ人

ユダヤ人は今エルサレムに歸りつゝある。

聞く所によれば、十九世紀の初に、土耳古政府はかの都にこの嫌がるゝ民三百人以上住居する事を許さぬ事にした。それから四十年後に其制限が除かれたが、別な規則が設けられ、都市の或一部にのみ住居する事を許可せられた。しかし其は反つて狹いところであつた。千八百六十七年にはこの規則も取除かれ、其後はユダヤ人の其舊都に移住する進步は非常なものとなつた。空家になつて居た古い家は悉く買求られ、新

しき宏大なる家が多く都市の各所に建らるゝやうになつた。學校、病院また宗教上の會館は大規模で始められ、工業及び農業の學校も設立せらるゝやうになつた。

現在（千九〇八年）エルサレムの都は石垣の外の地にまで發展して居る。宏大なる無料宿泊所、旅館、教會、倉庫などが建られ、最も著るしきは住民の大多數はユダヤ人である事である。

都市の內外に住居して居る現在のユダヤ人の數は四萬人乃至五萬人と言れ、全人口の半數以上である。此外テベリヤ、サフエド、ヨッパ、ヘブロンなどにも大殖民地があり、國內の各所に小さい殖民地がある。パレスタインに於るユダヤ人の全人口は八萬人以上であると言れて居る。して見るとゼルバベルと偕にバビロンから歸つた四萬九千六百九十七人よりも尙多の人々が既に歸つて居る勘定である。（喇二〇六、六五）。

獨國、墺國または佛國に於るセム種族排斥運動又は露國及び羅國に於る烈しき迫害は、鵰のその巢雛を喚起すが如く、全世界のユダヤ人を激動せしめたものである。（申三十二一〇十一）。

⑨（羅十三〇十一）此の如く行べし我儕は時を知り。今は寐より寤べきの時なり。蓋信仰の初より更に我儕の救は近し。

斯民の希望と生氣は遂に歐洲及び米國を通じてチヨヴェヴィザイオン（シオンの愛者）會又はショヴ ザイオン（殖民）會となりて、其出口を見出す事が出來た。地は買取られ、賦拂制度で入費は集められ、鬪引で移住民は順番に送らるゝやうになつて居る。

また今ヨッパから鐵道が全通するやうになり、機關車はナホムの火炬のごとく（翁二〇三）エルサレムに往復して居る。『其行伍を立る時には戰車の鐵灼爍て燃る火炬の如し』。其行伍は大路で行はるゝものである。大路はアラビヤ人のトレク エル コッと呼ぶもので、希伯來語のデレヒ ハコデシ（聖道、賽三十五〇八）と同意義のものである。

此大路が突然起る事は希伯來語のマスロルといふ言で分るが、これは主の民がシオンに歸るために特に備へらるゝものである。（賽三十五〇十）。

また外の鐵路はヘブロン、エリコ、アクル、テベリヤ、またはダマスコの方に向つて設計せられ、其中の或者は實際布設中である。

かの國に對する土耳其の掌握は漸々弱りつゝある。而してユダヤ人の國となるといふ話は大に注意すべきものである。そこで主は今其民の恢復の爲に『ふたゝび手をのべ』つゝあるといふ結論に我等は達し得ぬであらうか。

『イスラエルを散せしものこれを聚め牧者のその群を守るが如く之を守らん』（耶三十一〇）。

此外なほ我等に外の證據がある。衆多の人々は旅行の大路を彼地此地と跋渉り、預言の眞の意味を知らんとて、隅から隅まで力を盡して穿鑿する事は（但十二四）、『終末の時』の一の徴候である。

有名無實の大敎會に於る靈的生涯の恐るべき饑饉はまた一の徴候である。

各國民が不安と苦悶の狀態に居るは何かの暗示である。此外我等は語らんとする證據は種々あるが、悉其目が近きつゝあるといふ事實を證據立るところのものである。（來十二五〇）。

最後に述べたい事がある。主の再臨をば遙か距つた未來のやうに言ふのは全く非聖書的で不當な事である。また主は其新婦の爲に來る日や時を定て言ふのも非聖書的で不當な事である。しかし主は天より降り給ふ時に、地上に生存へて居る特種の民があ

㋟（賽十一〇十一）その日主はまたふたゝび手をのべてその民のゝこれる僅かのものをアッスリヤエジプトパテロスエテオピアエラムシナルハマテおよび海のしまゝより贖ひたまふべし。

㋠（撒前四〇十六）それ主號令と使長の聲と神の笛を以て自ら天より降らん。其時キリストに在て死し者先に甦へり。

㋡（哥前十五〇五一、五二）視よ我なんぢらに奥義を告ん。我儕ことゝく寢るには非ず。我儕皆末の笛のならんとき忽ち瞬息間に化せん。蓋笛ならんとき死し人よみがへりて壞ず我儕もまた化すべければ也。

つて、彼等は皆不意に携へ擧らるゝと言て居る者があると思ふ。主は往き給ふてから後の凡の時代は、暗黑で不敬虔であつた事もあつたけれども、眞面目に主を待望むところの群がいつの時代にもあつたものである。

基督は最初に降臨し給ふ少し前の事であつた。聖靈はダニエルに由て七十週といふ明白なる預言を與へ給ふたが、義しくかつ敬虔あるシメオンにも特別なる默示を與へ給ふた。彼は『イスラエルの民の慰められん事を俟る者』であつたが、『主のキリストを見ざる間は死じ』との示を受た。路二〇二六。此事は我等にかゝる質問を起さしむるものである。即ち、老たるシメオン（多分老たるアンナも）に此大事件を示し給ふた同じ恩ある聖靈は、眞面目に主を待望み、其喜の眼を以て主の顯はるゝを見んことを願ひ、其までは死なじと信じて居る或愛せられて居る者又は選れたる少數にも亦示し給はぬだらうかとの事である。その如く今も最も熱心にして忠實なる神の民の多は、國の內外を問はず、凡の敎派中に在て、主の再臨は近いといふ確信を眞面目に有して居るのである。

これらは『共に相勸め其日いよ〳〵近るを見て益々此の如くなすべし』（來十〇二五）との使徒の命令を强むるところの充分なる證據であるに相違ない。

若し日即ち顯現が近いて居るとすれば、携擧の日は尙更近い譯である。聖書研究者と熱心なる基督信徒とが一般に曉つて居る事は、顯現に係る大預言の時期が殆んと終末に近くなつて居るといふ事で、また政治家と科學者をこめて多の人々の深い心證は何か大事件が起る事が近いといふ事である。そこでかゝる質問が起る。

斥候よ、夜はなにの時ぞ

アダムとエバの犯罪以後此世は暗黑の場所で、(ヨ)道德上の夜である。信仰に由て信者

(ヲ)路二〇三六—三八)アセルの支派パヌエルの女にアンナと云る預言者あり。彼は甚老邁なり。其處女なりしとき夫に適て七年ともに居たり。この老女は齡おほよそ八十四歲の嫠なりしが殿を離ず夜も晝も斷食と祈禱を爲て神に事ふ。此時この老女も側に立て主を讃美し亦エルサレムにて贖を望る凡の人に此子の事を語れり。

(カ)約十一〇二六)凡て生て我を信する者は永遠も死ることなし。爾これを信ずるや。

(ヨ)(彼後一〇十九)殊に預言者の確言われらに在この言は暗處に輝る燈の如きものなり。夜の明るまで明星の爾曹の心の中に出るまで之を顧みげ善。

(タ)(約一〇五)光は暗に照り暗は之を曉らざりき。

(約一〇十)かれ世にあり世は彼に造れたるに世これを識ず。

(約三〇十九、二十)罪の定る所以は光世に臨しに人その行の惡に因て光を愛せず、反て暗を愛すれば也。凡て惡をなす者は光を惡み其行を責られざらんが爲に光に就らず。

は來らんとする榮光の日なる其日をば預言によりて望んで居る。其時は今信仰と望に由て得て居る救が、(ソ)その壯嚴と榮光とを以て顯はるゝ時である。此日に向つて神の民の心が渴望して居るのである。

『斥候よ夜はなにの時ぞ』。

『斥候よ夜はなにの時ぞ』。

斥候答へて曰く『朝きたり夜またきたる』(賽二十一〇)。

信者にとりては其は朝であるであらう。

不信者にとりては其は夜であるであらう。

(チ)耶穌は曙の明星である、また義の日である。朝早く起る人のみが曙の明星を見る事

(レ)(羅八〇二四、二五)我儕が救を得は望によれり。然ど望を見ば亦望なし。既に見ところの者は何で倘これを望んや。若われら未だ見ざる者を望まば忍て之を待べし。

(ツ)(哥前二〇九)錄して神の己を愛する者の爲に備へ給ひしものは目いまだ見ず耳いまだ聞ず人の心いまだ念ざる者なりと有が如し。

(ツ)(彼前一〇五—七)なんぢら信仰に由て神の能に護られ已に備ある所の末時に顯れんとする救を得なり。之に由て爾曹喜べり。今暫く各樣の艱難に遇て憂ざるを得ずと雖も却て喜をなせり。爾曹の信仰を試みらるゝは壞る金の火に試みらるゝよりも貴くして爾曹イエスキリストの顯れ給はん時に稱讃と尊貴と榮光を得に至らん。

が出來るやうに、眞の忠信なる教會のみが其携擧の時耀く曙の明星なる基督を見る事が出來るのである。

義の日として主は顯現の時イスラエルと凡の世人に顯はるゝのである。

パウロが『夜すでに央て日近けり』（羅十三〇十二）と言れた時は、既に夜の四十世紀を過して居た時であつた。其後十八世紀を經過して、今は殆んど朝にならんとして居る。

されば讀者諸君よ、『晝に屬る我儕は信と愛の護胸をき救の望を冑として慎むべし そは神われらを怒に遭せんと定たるに非ず我儕の主イエスキリストに由て救を得しめんと定め給ひたれば也』（撒前五〇）。『然ば我儕他人の寢るが如く寢ることをせず醒て慎むべし』（六）。

主にある一人の愛する兄弟が次の如き書翰を送られた。「予は多の人が再臨の眞理を知りたいと願ふて居るのを見て居るが、其を受入るゝ人は大體に於て患難に遭て來た

㋟（默二二〇十六）我イエスわが使者を遣して此事を爾曹諸教會に證す。我はダビデの根また其苗裔なり。我は輝く曙の明星なり。

㋠（馬四〇二）されど我名をおそるゝ汝らには義の日いでゝ昇らん。その翼には醫す能をそなへん、汝らは牢よりいでし犢の如く躍跳ん。

人か、さもなくば主に甚だ近く生活して居る人である。此世の豐饒なる地に生活して居る人はかの大地主を見る事に頓着せないやうなものである。しかし主は來り給ふ。ハレルヤ。主は來り給はん。然り、主は來りつゝ居給ふのである。新郎を知れる新婦が、彼が來りつゝあると言は眞である。『主イエスよ臨り給へ』。臨り給へ！臨り給へ!!臨り給へ!!!!哀れなる詛れたる地も（羅八〇十九—二二）臨り給へと嘆き叫んで居る。天に感謝せよ、主はかく言給ふ。

『我必ず速かに至らん』（默二十二〇二十）

主よ、我爾を待望む、
主よ、爾の美麗を見んがため。
我爾を待望む、
爾の再び來り給ふを。

主よ、爾は其處に往き給へり、
主よ、處を備へんため。
我は爾の第宅に宿らん、
爾の再び來り給ふ時に。

主よ、危險と恐懼の中に、
主よ、我は此處にありて屢〻疲る。
其時は近し、
爾の再び來り給ふ時は。

主よ、爾の在ざる間、
主よ、我は躓きまた迷ふ。
オー其日を早め給へ、
爾の再び來り給ふ時を。

『主人きたりて其目を醒し居を見なば此僕は福なり誠に我なんぢらに告ん主みづから腰に帶し僕を食に就せ前て之に供事すべし』(路十二三七)。

『我來るまで商賣せよ』

朝を待ちつゝ。(默十九〇七)

世にある宮殿又は茅屋を問はず、
其境遇の下に重荷に苦しむ人なき所はなし。

地は苦痛と涙にて沈み、いよ〳〵暗黑に近き、
主なる基督の來るまでは癒す乳香あらざるべし。

オー朝に、夏の鳥の如く我心は釋放たるゝ時、
聖姿を其まゝ見奉らん時、我神よ、我は爾に肯ん。
爾の如く！汚點なく白き此心意は爾に肯ん。
オー神の愛！オー基督の血！オー天の恩と能力！

渴き慕ふ心の願を知り給ふ我救主よ、
オー新郎よ、何故ぞ、聖車を遙か離れて駐め給ふは。
何時まで目は悲哀にて曇り、心は憂にて塞がるべき。
何時まで空中より響く爾の聖聲を聞くべく懊むべき。

さびしき者よ、爾の首を擧て、筵のために爾を裝へよ。
長く待詫し主は近し、輝は東にあり。
オー曙の明星よ、速やに爾の選み給へる者を導けよ。
オー義の太陽よ、永遠の日に導き入よ。

贖は近し。（路二十一〇二八）

我靈魂はヨベルの歌を叫び求む。
我心には喜悦満つ、我舌を以て讃美せん。
蓋エヂプトの暗黑はなほ下れども、
釋放の時は數代にあらず、數時間後なればなり。
舟人の如く、未だ岸は見へずとも、
勝鬪に見ゆる陸に由て、其到着の間近きを知る。
耳を傾け聞く時は、
今は主は近しとの低聲を耳にするを得。
主は近し。其途には星は備へられ、
彼等に語り告ぐべき休徴を示し給ふ。
世は罪の故に兇惡の姿となり、
其不義の杯は其緣にまで充さる。
詛はながく、ポスフォラスの海邊に營を張り、—
チベル河の濁流に女王の住家あり。—

飢饉と疫病は證人の群に入り、
かくて主は近しと證しせらる。

譯者註す、ポスフォラス云々はマホメット教、チバル河云々は羅馬教である。

長の月日、異邦に彷徨ひ、苦しめり、
なほ一度後の雨の音は地を喜ばしむ。
今は賤しめらるれども、其地の
橄欖山に聖足の立てらるゝ備へをなし居れり。

譯者註す、パレスタインは不思議にも再び雨露のある地となつて居る。

其處に散らされし民集めらる、
東より、西より、日出る所より。
異邦人の時滿て彼等の時となり、
神の嘯はイスラエルの子孫に臨む。

譯者註す、亞十〇八、賽五〇廿六、うそふきとは招きである。

世は往古の如し、萬物の無なるは預言せられ、—
信者は新しき酒に滿さると言れ、—

如何なる困難起るとも、見もせず、聞もせず。
ヘロデの如く、聖言にある如く成しむ。

譯者註す、凡の事は聖言の通りになり、一方に於ては信者は喜に滿ちて居るけれども、他方に於ては如何なる事が起つても世人は頓着せず、嬰兒を殺せしヘロデの如く、預言の通りに振舞ふやうになる。

其時歡び迎えよ、三度歡び迎えよ、汝等神の民よ。
主の臨る事の以外に慰むるものありや。
主の臨在以外に閉されたる地を釋くものありや。
オー曙の明星よ、我望は爾に在り。

（或詩集より拔萃す）

第二十一章　アイオンス（世々）の計畫

本章にある圖解は凡の時代の年代的順序と聖書歴史にある重なる出來事の或者を表すために作つたものである。

時をば日と月と年とに分つ事は地球と月の運行によりて定められてある。世紀なる語は聖書には用ひられてない。年以上の時の大なる計算は（安息の年又はヨベルの年もあるが）希臘語のアイオン或は英語のエオンである。エオンから時代なる語が出來た。此アイオンなる語は新約聖書中に百二十四度用ひられ、英語には八の異なる語に譯せられて居る。即ち三十五度世と譯せられて居る。

太十二〇三二、十三〇二二、三九、四十、四九、二十四〇三、二十八〇二十、可四〇十九、十〇三十、＊路一〇七十、十六〇八、十八〇三十、二十〇三四、三五、約九〇三二、＊徒三〇二一、十五〇十八、羅十二〇二、哥前一〇二十、二〇六、七、八、三〇十八、〃八〇十三、十〇十一、哥後四〇四、加一〇四、弗一〇二一、三〇九、二十一、提前六〇十七、提後四〇十、多二〇十二、來六〇五。＊これらの日本譯に世なる語なし。

世界（worlds）、二度、來一〇二、十一〇三。

行路（course）、一度、弗二〇二。（日本譯には風俗とあり）。

永遠（eternal）、二度、弗三〇十一、提前一〇十七。（日本譯には世々又萬世とあり）。

終り(end)、一度、弗三〇二一。(日本譯には窮とあり)。
世々(ages)、二度、弗二〇七、西一〇二六。
窮なく(ever)、三十度、太六〇十三、＊二十一〇十九、＊可十一〇十四、路一〇三三、五五、約六〇五一、六〇五八、＊八〇三五、十二〇三四、十四〇十六、羅一〇二五、＊九〇五、＊十一〇三六、十六〇二七、哥後九〇九、來五〇六、六〇二十、七〇十七、二十一、＊二四、＊十三〇八、彼前一〇二三、二五、彼後二〇十七、三〇十八、約壹二〇十七、＊約貳二、猶十三、二五。＊印の日本譯は異なれり。
かぎりなく(never)(消極的意味の)、七度、可三〇二九、約四〇十四、約八〇五一、八〇五二、＊十〇二八、＊十一〇二六、＊十三〇八。＊印の日本譯は異ふ。
限なく(evermore)、三度、哥後十一〇三一、來七〇二八、默一〇十八。
世々又は世々限なく(ever and ever)、二十一度、加一〇五、腓四〇二十、提前一〇十七、提後四〇十八、來一〇八、十三〇二一、彼前四〇十一、五〇十一、默一〇六、四〇九、十、五〇十三、十四、七〇十二、十〇六、十一〇十五、十四〇十一、九〇三、二十〇十、二十二〇五。

或は四十二度用ひられてある。此二十一の聖句中にはアイオン又アイオンと重ねて用ひられてある。來一章八節を除いては悉く『世々の世々』と複數になつて居る。次にあるものも皆複數である。

路一〇三三、羅一〇二五、九〇五、十一〇三六、十六〇二七、哥前二〇七、十〇十一、哥後十一〇三一、弗二〇七、三〇九、十一、二一、西一〇二六、提前一〇一七、來一〇二、九〇二六、十一〇三、十三〇八、猶二五。

若し讀者諸君はこれらの聖句を注意して調べ、其處にアイオン又はアイオンスといふ原語を入れて見るなれば、それは物質の世界でなく、定められたる或時の事である事が直ぐ分るのである。

『今アイオンに於ても亦來アイオンに於ても赦るべからず』(太十二〇三二)。

『收穫はアイオンの末なり……此アイオンの末に於ても此の如くなるべし』(太十三、十四)。

『今よりのちアイオンの間果を結ぶことを得ざれ』(太二十一〇十九)。

『爾の來る兆とアイオンの末の兆は如何なるぞや』(太二十四〇三)。

『アイオンの間赦さるべからず、アイオンの罪の危險に居るべし』(可三〇二九)。

『來るべきアイオンには窮なき生を受ん』(可十〇三十)。

形容詞アイオニオスは七十度用ひられてある。

太十八〇八、十九〇十六、二九、二十五〇四一、四六、可三〇二九、十〇十七、三十、路十〇二五、十六〇九、十八〇十八、三十、約三〇十五、十六、三六、四〇十四、三六、五〇二四、三九、六〇二七、四十、四七、五四、六八、十〇二八、十二〇二五、五十、十七〇二、三、徒十三〇四六、四八、羅二〇七、五〇二一、六〇二二、二三、十六〇二五、二六、哥後四〇十七、十八、五〇一、加六〇八、撒後一〇九、二〇十六、提前一〇十六、六〇十二、十六、十九、提後一〇九、二〇十、多一〇二、三〇七、門十五、來五〇九、六〇二、九〇十二、

十四、十五、十三〇二十、彼前五〇十、彼後一〇十一、約壹一〇二、二〇二五、三〇十五、五〇十一、十三、二十、猶七、二一、默十四〇六。

此語は英語には everlasting, eternal 又は forever と譯せられてある。譯者曰く、日本譯には「さりなく、盡ざる又は熄ざるなど」譯せられてある。

永遠、(複數のアイオンス)。路一〇三三、羅一〇二五、九〇五、十一〇三六、哥後十一〇三一、來十三〇八。

(羅九〇五、十一〇三六の日本譯には世々と複數になつて居る)。

限なく、(單數のアイオン)。路一〇五四、約六〇五一—五八、八〇三五、十二〇三四、十四〇十六、哥後九〇九、來五〇六、六〇二十、七〇十七、二一、二四、二八、彼前一〇二五、約壹二〇十七、約貳二、猶十三。

(日本譯には恒にと譯せられて居る所もある。)

『此アイオンの子輩は……光の子輩よりも尤も巧なり』(路十六、〇八)。

『此アイオンの子は娶嫁ことあり彼アイオンに入り死より復生に足るものは娶嫁ことなし』(路二十〇三、四三五)。

『アイオンの間渇く事なし』(約四〇、十四)。

『アイオンの間……ざるべし』(約八〇五一、五二、十〇二八、十一、〇廿六、十三〇八、哥前八〇十三)。

『神はアイオンの始より其すべての所作を知たまへり』(徒十五、〇十八)。

『獨一睿智神に榮アイオンにイエスキリストに由て在んことを願ふアメン』(羅十六、〇二七)。

『このアイオンの智慧に非ず亦このアイオンの有司に非ず我儕の語るは……智慧なり此はアイオンスの先に神の預じめ定めし奥義なり』(哥前二〇、六、七)。

『アイオンスの末に遇る我儕を警むる爲なり』(哥前十、〇十一)。

『此アイオンの神』(哥後四、〇四)。

『今の惡きアイオンより我儕を救出さんとて……捨たまへり』(加一、〇四)。

『此アイオンのみならず來らんとするアイオンにも』(弗一〇、二一)。

『これ今より後のアイオンス』(弗二、〇七)。

『アイオンスの始より以來隱れたる奥義』(弗三、〇九)。

『此は神アイオンスの先より定め給ひし』(弗三〇、十一)。

『教會の中にてアイオンスのアイオンの凡の時代榮を歸せんことを』(弗三〇、二一)。

『アイオンスの王』(提前一、〇十七)。

『デマスこのアイオンを愛し我を棄たり』(提後四、〇十)。

『かれを以てアイオンを造りたり』(來一、〇二)。

『神よ爾の位はアイオンに及び』（來一〇八）。
『來るべきアイオンの權能を嘗ひ』（來六〇五）。
『今アイオンスの季にひとたび顯現たり』（來九〇二六）。
『信仰に由てアイオンスは……造らる』
『今もアイオンの日も』（彼後三〇十八）。
『今も凡のアイオンスも』（猶二十五）。
『その苦めらるゝ烟上に騰てアイオンスのアイオンスに至る』（默十一四）。
『淫婦を焚火の烟のぼりてアイオンスのアイオンスに至る』（默十九〇三）。
『夜も晝も患難痛苦ありてアイオンスのアイオンスに至る』（默二十〇十）。
『かれらはアイオンスのアイオンスの間王たらん』（默二十二〇五）。

我等はかくの如く單數のアイオンもあり、複數のアイオンスもあり、アイオンスのアイオン（即ちアイオンより成立る大アイオン）もあり、また倍加せられたるアイオンスのアイオンスもあることに注意せねばならぬ。

一のアイオンに一の終がある、（太十三〇三九、四十、四九、二十四〇三、二十八〇二〇）。其次に他のアイオンが續ひて來るのである、（太十二〇三二、可十〇三十、路十八〇三十、二十〇三五、弗一〇二一）。其には始がなければならぬ。一の終

と他の始は重なつて來るものである。されば（㊀前十一〇十一）と申したのである。多のアイオンスは過去に於ても未來に於てもあるものである。

㊁耶蘇はアイオンスの君で、其アイオンスは神の計畫のもとに彼に由て造られたるものである。即ち㊂アイオンスの計畫に由るものである。

本章の圖解（三二八頁にあり）はアイオンの七を示し、此無限の計畫の一部を詳細

㊀（來十一〇三）われら信仰に由て諸の世界は神の言にて造れ、如此みゆる所のものは見べき物に由て造れざることを知。
㊁（西一〇二六）この道は歷世歷代隱れたる奧義なりしも今その聖徒に顯れたり。
㊂（弗二〇七）これ今より後の世々キリストイエスの中にて我儕に施す所の仁慈をもて其恩の勝て豐なることを顯さん爲なり。
㊃（提前一〇十七）願くは萬世の王すなはち朽ず見ざる一の神に窮なく尊貴と榮光あらんことをアメン。
㊄（來一〇二）この末日には其子に託て我儕に告たまへり。神は彼を立て萬物の嗣とし、且かれを以て諸の世界を造りたり。
㊅（弗三〇十一）此は神世々の先より定め給ひし旨に循へる也。この旨は我儕の主キリストイエスに由て成就せり。

に説明せんとしたるものである。圖にある所のエデンから放逐後の線は漸々擴がり居るのは、人口の繁殖を示すもので、洪水の時に俄然八人に減じ、また今の時代の終に於て大に減ずる事を表して居る。

一、エデン、無罪の時代、放逐にて終る。

二、洪水前、自由の時代（良心の抑制）、洪水によりて人口がノアと其家族八人に減ずる事に由て終る。此アイオン間にエノクは携へ擧らる、これは教會がやがて携へ擧らるゝ型である。

三、洪水後、政治の時代、民權の下に人が置かるゝ、ソドムの滅亡に終る。

四、族長時代、即ち轉住時代、紅海に於るパロと其軍勢の敗滅に終る。

五、モーセ時代、即ちイスラエルの時代、主の十字架とエルサレムの滅亡に終る。

六、基督教時代、即ち奥義の時代、大なる患難、主再臨、諸國民の審判、及びなほ一度世界の人口の大減少にて終る。此アイオンの間、ユダヤ人は諸國に散さるゝ。

七、千年期、顯現の時代（羅八〇）、サタンの最後の誘惑と大なる白き寶座に於る審判にて終る。

此後に新天新地が起る、義其中に在、多分他のアイオンスが始まるのであらう。此

等の七はアイオンスの一週となる、即ち弗三〇二一にあるアイオンス又は

(1)（默九〇十八）此馬の口より出る火と烟と硫磺と三のものゝ爲に人の三分の一殺れたり。
亞十三〇八、十四〇十二、十三、默十四〇十八—二十、十九〇十九—廿一。

(2)（創九〇五、六）汝等の生命の血を流すたゞ我必ず討さん。獸人の兄弟人の生命を取ば我討すべし。凡そ人の血を流す者は人其血を流さん。其は神の像のごとくに人を造りたまひたればなり。

(3)（來十一〇十三）此等は皆信仰を懷きて死り。未だ約束の者を受ざりしが遙かに之を望て喜び地に在て自ら賓旅なり寄寓者なりと言り。

(4)（太二十四〇二一）其ときに大なる患難あり。此の如き患難は世の始より今に至るまで有ざりき。又後にも有じ。

(5)（太二十五〇三一、三二）人の子おのれの榮光をもて諸の聖使を率來る時はその榮光の位に坐し。萬國の民をその前に集め、羊を牧者の綿羊と山羊とを別が如く彼等を別ち。

(6)（歴九〇九）我すなはち命を下し篩にて物を篩ふがごとくイスラエルの家を萬國の中にて篩はん。一粒も地に落ざるべし。

（路二十一〇二四）人々刀刃に斃れ且さらはれて諸國に曳れ、エルサレムは異邦人の時滿るまでは異邦人に蹂躪さるべし。

(7)（默二十〇十一）われ白き大なる寶座と之に坐する者とを見る。地と天と其前を遁て再び留るべき處を得ず。

(7)（賽六十五〇十七）視よわれ新しき天とあたらしき地とを創造ず。人さきのものを紀念することなく之をその心におもひ出ることなし。

・（彼後三〇十三）然ど我儕は其約束に因て新しき天と新しき地を望み待り。義その中に在。
・（賽六十六〇二二、默二十一〇一。

これらの七のアイオンスから成立たる一の大なるアイオンとなるのと一致するものである。而してイスラエルに命ぜられたる年を七次數ふる事と符合するもので（利二十五〇八—十一）、他の大なるアイオンはアイオンスのアイオンスといふ言表に一致して起るものである。加一〇五及び以上引照したる聖句を見れば分る。多分第五十のアイオンは利二十五章のヨベルの如きものであるかも知れない。さうするとまたアイオンスのアイオンスとなるのである。圖解の下部を見られよ。

かく言へば或人は云ふ、若もアイオンスは定つた時期であるとすれば、凡のアイオンスは定られてなければならぬ、すると不信者の悲哀にも終があり、羔と其聖徒の榮光と國にも終がなければならぬと。否、愛する諸君よ、我等有限の人間が永遠といふ事について有ち得る最善の思想は、其定つた時の長さが續ひて行くといふ事である。これは即ちアイオンスのアイオンスといふ漠とした言表に由て表されたる思想である。

此圖解を見て、アイオンスは同じ期間のものでなく、一つ一つ神が人間を扱ひ給ふ方法に於て變化を示して居る事に注意すべきである。多分過去のアイオンス即ち舊約聖書にある希伯來語のオラムスは地球の地學上の時期又は宇宙の發達に於る種々の時

代を示したものであるだらう。過去は創造者の創造と默示の秩序正しき展開であつたやうに、未來も永遠と呼るゝ無限のアイオンでなく、無限の期間を度る所のアイオンスの無際限の連續であるべきである。時は永遠といふものゝ尺度である、永遠は度られたる時の連續である。例へば、茲に一碼の長い棒があるとする。其は三尺の長さがある。しかし其を以て幾度も轉々量るなれば世界を一週し、月にも、太陽にも、星にも、最極の星雲にも、又想像の最端まで達せしむる事が出來る。其が小さい尺度であ

㉑（默十四〇十一）その苦めらるゝ烟上に騰て（アイオンスのアイオンス）盡る時なし。獸と其像を拜する者また其名の印誌を受る者は夜晝安からざるなり。

（默二十〇十）彼等を惑しゝ硫黃火と硫磺の池に投入られたり。卽ち獸および僞の預言者の居ところ也。こゝは夜も晝も患難痛苦ありて世々（アイオンスのアイオンス）熄時なし。

㉒（默一〇六）我儕をして王となし祭司と爲てその父の神に屬しむる者に榮光と權力世々窮なく有んことを アメン。

（默十一〇十五）第七の天使籥を吹しとき天に大なる聲ありて曰、此世の諸の國は我儕の主および主のキリストの屬と爲り。キリスト世々（アイオンスのアイオンス）窮なく之を治め給はん。

（默二十二〇五）彼處には夜あることなく燈の光と日の光とを用ることなし。蓋主なる神われらを照し給へば也。われらは世々（アイオンスのアイオンス）窮なく王たらん。

つて、進み進み、遂に考へ能はざるところまで行くのである。かくの如くアイオンスにつける聖書の量尺も永遠に續ひて行くものである。

此アイオンの初に於る出來事は我等の主の十字架に釘られし事と昇天及び聖靈の降臨である事は熟知せられて居る。此アイオンの末に於る出來事は

『終極の時』

のもので、次に簡單に述る如である。即ち叫聲と偕に主が降臨する事、耶穌に在て眠れる者の復生、生て存れる信者が瞬息間に化する事(哥前十五〇)、其人々が空中に携へられ、其處にて主に遇ふ事(撒前四〇十一〇二、弗五〇二五—三二、默十九〇七、及び雅歌三—十八)、神の羔なる王の子の婚筵に招かるゝ事(太二十二〇二、二十五〇十、哥後十一〇二、默十九〇七、及び雅歌)。

此事が空中に於て行はるゝ間に、イスラエルは不信のまゝでバレスタインに集められ、其宮殿を再建し、昔時の如く獻物をなし、僞基督が起るまで惡より惡に進み、而して彼等は僞基督と契約を結ぶやうになる。其契約をば預言者イザヤは死と陰府との契約と呼んで居る。それから『ヤコブの患難の時』と稱ふる恐るべき迫害が次いて來るのである。

それから凡の人が全滅したかの如くなつた時に、主は其聖徒と偕に地上に來り、か

(番二〇一、二)汝等羞恥を知ぬ民早く自ら内に省みよ。夫日は糠粃のごとく過ぎさる。然ば詔言のいまだ行はれざる先、エホバの烈き怒のいまだ汝等の臨まざる先、エホバの忿怒の日のいまだ汝等にきたらざるときに自ら省みるべし。

(但九〇二七)彼一週の間衆多の者と固く契約を結ばん。而して彼その週の半に犧牲と供物を廢せん。また殘暴可惡者羽翼の上に立ん。斯てつひにその定まれる災害殘暴る者の上に斟ぎくだらん。

(約五〇四三)我は吾父の名に靠て來しに爾曹われを接ず。もし他の人おのが名に靠て來ば爾曹これを接ん。

(賽二十八〇十五)なんぢらは云り、われら死と契約なたて陰府とちきりをむすべり。漂りあふるゝ禍害のすぐるときわれらに來らじ、そはわれら虛僞をもて避所となし、欺詐をもて身をかくしたればなりと。

(耶三十〇五—七)エホバかくいふ我ら戰慄の聲をきく、驚懼あり平安あらず。汝ら子を產む男あるやを尋れ觀よ。我男が皆子を產む婦のごとく手をその腰におき且その面色皆青く變るをみる。こは何故ぞや。哀かなその日は大にして之に擬ふべき日なし。此はヤコブの患難の時なり。然ど彼はこれより救出されん。

(亞十四〇一—三)視よエホバの日來る。汝の貨財奪はれて汝の中には分たるべし。我萬國の民を集めてエルサレムを攻擊しめん。邑は取れ、家は掠められ、婦女は犯され、邑の人の半は擄へられてゆかん。然ど餘の民は邑より絕れじ。その時エホバ出さたりて其等の國人を攻擊たまはん。在昔その軍陣の日に戰たまひしごとくなるべし。

四、五節節と續十四、撒後二〇八をも見られよ。

の不法の僞基督を滅亡し、『㋟その刺たりし彼を仰ぎ觀』るイスラエルを救ひ、而して㋠一の國民は一日のうちに即ち一時に生るゝのである。主は世にある國民を審判き、其千年王國を樹て給ふのである。詩二〇、但二〇四四、默十一〇十五。

㋡我等は携へ擧られて、空中に於る會合所に於て主に遇ふといふ其日については定りたる日が無といふことを明白に憶へて置くべきである。我等は腰に帶し、燈を燃して、其主人を待つ人の如く此世に在て生活し居るべきである。路十二〇三五—四十。而して我等は種々の出來事が起るのを見て、㋢其日の近れるを知り、㋣其起り始りを見て我等の首を擧ぐべきである。

㋤(亞十二〇九—十四)その日には我エルサレムに攻きたる國民をことゞく滅ぼすことを務むべし。我ダビデの家およびエルサレムの居民に恩惠と祈禱の靈をそゝがん。彼等はその刺たりし我を仰ぎ觀、獨子のために哭くがごとく之がために哭き長子のために悲しむがごとく之がために痛く悲しまん。その日にはエルサレムに大なる哀哭あらん。是はメギドンの谷なるハダデリンモンに在し哀哭のごとくなるべし。國中の族おのゝ別れ居て哀哭べし。卽ちダビデの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀き、ナタンの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭かん。レビの家の族別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭きシメイの族

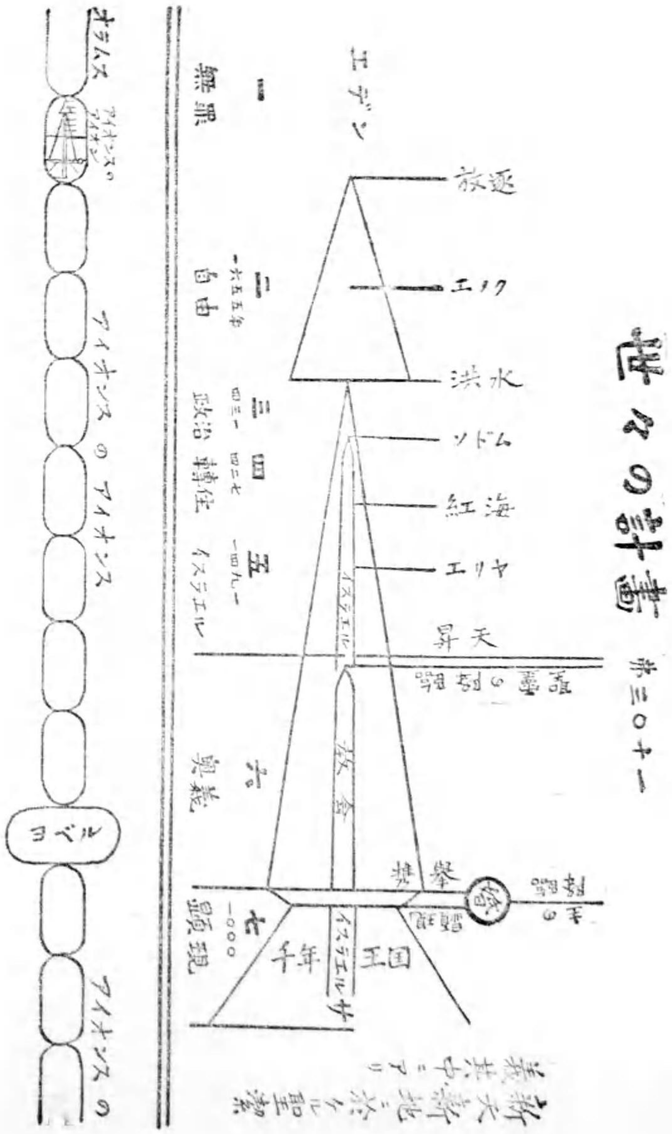
別れ居て哀哭きその妻等わかれ居て哀哭かん。その他の族も凡て然り。すなはち族おのゝ別れ居て哀哭きその妻等別れ居て哀哭べし。

㋥(賽六十六〇八)誰かかゝる事をきゝしや、誰かかゝる類をみしや。一の國はたゞ一日のくるしみにて成べけんや、一つの國民は一時にうまるべけんや、然ごシオンはくるしむ間もなく直にその子輩をうめり。

㋦(可十三〇三二—三七)其日その時を知者は惟わが父のみなり。天にある使者も子も誰も知者なし。此日いづれの時きたる乎を知ざれば爾曹つゝしみて目を醒し祈禱せよ。それ人の子は遠行せんとして其權を僕等に委れ各〳〵爲べき事を任け又關者に怠らず守れと命じて家をさる人の如し。是故に爾曹も怠らずして守れ。蓋家の主人あるひは夕あるひは夜半あるひは鷄鳴時あるひは早晨に歸るかを知ざれば也。恐くは不意の時きたりて爾曹が眠るを見ん。われ怠らずして守れと爾曹に告るは卽ち凡の人に告るなり。

㋧(來十〇二五)會集を輟る或人に效ふことなく、共に相勸め其日いよ〳〵近るを見て益此の如くなすべし。

㋨(路二十一〇二八)此等の事の成初る時には起て爾曹の首を擡よ。蓋なんぢらの贖ちかづけば也。



第二十二章　基督が速に來る表徵

我等は我等の主の臨り給ふ事が、主は御自身千年期前に臨る事で、しかも其が差迫つて居ると信ずるものである。而して携擧即ち主が其聖徒を受んがため空中まで來るといふ、何時起るか知れないところの事（撒前四章）と、顯現即ち主が其聖徒と偕に地上に降るといふ事との間に區別があるとの注意をば記憶して置かねばならぬ。この顯現なるものは證の爲に福音が宣傳へられ、イスラエル人は不信の儘で集められ、僞基督が現はれ、其他預言せられたる出來事が起つてからでなければ、起らぬものである。そこで我等は主の空中再臨と携擧とが近いといふ事を信ずる證據は何であるかを深く思はねばならぬ。其には種々の證據があるが、其中から七つを擧て見たい。

一、旅行と知識の繁昌

『ダニエルよ終末の時まで此言を秘し此書を封じおけ衆多の者跋渉らん而して知識増べしと』（但十二〇四）。

（大二十四〇十四）また天國の此福音は萬民に證せん爲に普く天下に宣傳られん。然るのち末期いたるべし。

近代と現代とを比較べて見るなれば旅行と知識とが非常に驚くべき進歩をなしたる事が分る。

一例を言ふなれば、昔時英國の一婦人が長い間考へた末ある旅行をする事に決た。其朋友が其出立を助けんとて集り來り、それから乘合馬車に乘り一二哩見送り別を告た。ところが其婦人の旅行哩程は僅に五十哩であつたとの事である。

然るに今は蒸氣と電氣の強き力が發明せられ、海や陸に宮殿の如き物が走るやうになつた。されば何人でも愉快と平安のうちに六十日かゝつて世界を一周する事が出來るやうになつて居る。大なる蜘蛛の巣の如く、鐵道は陸を覆ひ、滊船は海に線を曳て居る。

本文には『衆多の人跋渉らん』とある。千八百九十六年中に北米合衆國中で鐵道にて旅行したる人の總數は五億三千五百十二萬〇七百五十六人で、其哩數は百三十億〇五千四百八十四萬〇二百四十二哩であつて、全世界に於る鐵道旅客の總數は二十三億八千四百萬人、其哩數は二百八十六億七千七百萬哩であつた。此に加へて滊船や自家用のもので旅行したる數と、世界の凡の隅に至る探檢又は赤道から兩極に至るまでの探檢等の總數は驚くべきもので、これは確に終末の表徵なるものが文字通に實現し

て居るのである。

また知識も增すとある。

教育上の便宜は未曾有のもので、これは現代に於る著しき特色である。兒童の爲には公立學校あり、高等教育の爲には大學校あり、宗教的教育の爲には教會附屬の學校がある。

新聞紙は報道の不斷の流に充て、非常の增加を以て地球を覆ひ、恰も知識の大木より落ち來る葉の如である。また多の書籍が作るゝ事には際限がない。

郵便、電信又電話によれる交通の便は幾何學的進歩によりて增加せられた。

萬國聯合郵便制度によりて、印刷物は、シカゴ市から次の街にても運ぶやうに、安價を以て愛蘭や支那までも運るゝやうになつて居る。

本文の預言は聖書研究者の增加に殊に關係して居りはせぬかと思はれる。これを見ても此預言が驚くべく應ぜられて居るのである。千八百〇四年以後。聖書や其分冊が二億三千萬冊ほど聖書會社だけで配布した。其外他の印刷によりて何百萬冊か配布されたに相違ない。聖書は二百八十七の語に譯せられ、其一部分は三百四十の語に譯せられて居る。人種の十分の九以上其言で聖書を讀み得るやうになつた。

宗教新聞及び定期刊行物は百萬を以て數ふる程である。萬國日曜學課、聖書學院、チョートーカ夏期學校及び聖書大會などの大組織は神の言を世界的に弘く學ぶまでに進歩した。

これとともに預言をば普ねく研究するやうになり、殊にイスラエルと我等の主の歸り來り給ふ事について學ぶやうになつて居る。懷疑論者と破壞的の批評家が一方に於て神の聖言を爆破せんと勉めて居ると思へば、他方に於ては數千の人々が眞面目に神の聖言を學び、『預言者の確言われらに在この言は暗處に輝る燈の如きものなり』(彼後一〇十九)として居る。

二、危險なる時

『末世に艱の日きたらん爾この事を知』(提後三一)。この危險なる時とは次の如くである。

(1)、物質的には、疫病、飢饉、地震、颶風等である。多分近來地中から吹出すやうになつた石油や瓦斯のやうなものが、[8]太陽から來る新しき熱と電力と結合して一大火焔となる準備かも知れない。

(2)、政治的に又社會的に。

これには虛無主義、社會主義、共產主義及び無政府主義の進歩に關係がある。無政府黨の信條はこれである、第一の虛僞は神で、第二の虛僞は律法であると言ふのである。これより惡いものは此世にあるだらうか。彼等が公然言て居る事は、現社會の制度を打壞すのが彼等の使命であるとの事である。而して彼等は(祭司の長カヤパ斷定したるが如く)かくして後はもつと善い事が起ると預言して居る。

(3)、諸國民の苦痛。

各國民間の嫉妬は彼等をして攻守の軍備をなさしめ、其規模の大なるがため、壓制的徵稅を以て人民の生命を臼にて挽くやうな狀態である。

歐羅巴全體は實際兵士の營所で、二千三百萬の訓練せられたる兵士は互に世界的戰爭の際には飛立んとして居る。其武器たるや、實に精巧を極めた恐しきもので、實に過去の記錄にも何にもない程のものである。

各國の政府は競ふて軍隊と船艦を增加し、其が爲に全く破產するやうな國債を起し、

[8](撒後一〇八)卽ち神を識ざる者および我儕の主イエスキリストの福音に服はざる者に報を予ふ。(彼後三〇七)それ神は其言を以て今の天と地を蓄へ、之を火にて焚ん爲に神を敬はざる人を審判する論亡の日まで存せり。

自殺的政策をとつて居る。

これらの武備が一度切て放たるゝ時は其に伴ふ禍害と殺戮が大なるもので、これを思ふ時は戰慄せざるを得ない。されば政治家は腦を痛めて歐洲の平和を維持せんと苦心慘憺して居るのは無理もない事である。

かゝる眞最中にかの不法が其怪物的頭を擡げ出すのである。資本家が勞働者の復讐の前に畏縮する。人の心は地上に來らんとする事のために恐怖する。然なるだらう。何故なればサタンは地上から神の名を取除かんとて其最高の努力をこれらの武力の統一に注ぐからである。彼は其最寵兒なる無神主義の僞基督に彼等を結び付けるであらう。僞基督は父と子とを拒むところのものである。

三、幽靈教（スピリチユアリズム）

『然ども靈明かにいふ後に至らば或人信仰の道より離れて人を惑す靈と惡鬼の敎に心を寄ん』（〇一提前四）。

近頃の幽靈敎は啻人を騙す位の事でない、眞暗な室や怪しき秘密室を設けて、種々の詐欺や眩惑を行て居る。また其處には確に或秘密や靈の顯現、又は人體に憑きたがる惡鬼や、光よりも寧ろ暗黑を愛する惡靈が居るやうである。

これは確に時の一の表徵である。

また基督敎科學（クリスチヤンサイエンス）（譯者曰く、日本では目下哲理療法といふ名で擴めて居る者がある）は惡魔の敎であつて、かの神智學（セオソフヒー）の如く、基督の贖罪を否定し、各個人自身は其救主であると說て居る。

ボストンと其附近には多の神秘的（クリスチヤンサイエンス）の佛敎徒があつて、其數はオーストラリヤにある土人よりも多いとの事である。基督的科學は野火の如く全國に擴がり、幽靈敎は夥しき信仰者を得て居る。此三の迷信敎が、黑雲の如く、驚くべく擴るのは終が近いて居るといふ事の一の表徵である。

四、背敎

主の日（顯現）は『先に道を離るゝ事なくば』（〇三撒後二）來る事はない。

ラオデキヤは敎會の最終の狀態であるが、主は其口より吐出さんと爲給ふほど傷しきものである。それには殊に主の再臨に關する信仰の大饑饉があるべきである。『然ども人の子來らんとき信を世に見んや』（路十八）。

或老牧師が曾て、彼は主が六萬年間も來るとは信じないと言た事がある。そこで予はそれでは其を目醒て待つなどの事は出來るものでないと結論を與へたのである。

㉑（默三〇十六）爾すでに溫然して冷かにも有ず、熱くも有ず是故に我なんぢを我が口より吐出さんとす。

千年期後再臨論者は主の再臨について語る事が極めて僅少である。米國フロリダ州にある或年長のメソヂストの教役者が主の再臨につける說教を五度より聞た事がないと言た。しかも其が自分で說教したのである。多の大聽衆に聽て見ると、大多數は此福なる望につける說教を一度も聞た事がないと聞て、たゝ驚くのみである。しかも其望については聖書中に澤山記されてあるのである。

今や聖言の宣傳について著しく能力が缺乏して居る。人々は如何にせば多の人々に近き得るかと綿密に論究して居る。しかし大多數は近き得ずに行て居る。

今までは非常に困難なる時と不景氣の時には何時も驚くべきリバイバルが續ひて起つたものであつたが、此末の時に於ては然でない。此困難なる最終の時代に如何して悔改者が少い事であらうか。其に對して明確に答ふべき一の事がある。即ちかの高等批評なる者が聖書の天啓に攻擊を加へてから、傳道者や神學校の教授等が其贊成者となり、其疑を發表した爲に、大多數の信仰が爆破せられ、其が爲に聖書の大眞理が最早彼等の良心に宿つて居らぬやうになり、從來のやうに主の僕等が忠實に奉仕する刺激も無なり、罪人をも悔改に導き得ぬやうになつたのである。希臘教會は政治に結托し、天主教は基督の代りにマリヤを拜むやうになり、*アグリッピナとネロの像の足指

に偶像教徒がする如く接吻する事によりて惠を受るとなし、又新教の諸教會は儀式で硬くなり、不信は其中に漲り、背教が堂々濶步して居るのを見るものである。そこで我等は再び終は近いと結論するものである。

*羅馬の聖ガーカスチンの教會に或婦人と小兒の大理石の像がある。其はアグリッピナとネロであると一般に申して居る。天主教でこの說に反對するけれども、其小兒が一羽の鳥を其胸の上で握り殺して居るところを見ると、其性質が兇惡なる事を示して居るので、證明せらるゝのである。此像は天主教の高僧等によりて處女マリヤと其子イエスであると言れて聖別せられたのである。其土臺石のところにラテン語でかく記されてある、「我等の主法王パイアス第七世はかく布告す。何人と雖ども聖なる教會のためアヴェマリヤを唱へ、此聖像の足に熱心に接吻せば、一日に一度の罪を百度まで赦すことを承認す。千八百二十二年六月七日」。

五、全世界の教化

『また天國の此福音を萬民に證せん爲に普く天下に宣傳られん然るのち末期いたるべし』(太二十、四十四)。

教會は今の世に傳道する現今の使者であるが、何時携擧せらるゝか知れないといふ事を茲で說明する必要があると思ふ。其携擧後に艱難時代の聖徒即ち教會が携へ擧らるゝといふ事實を見て信ずるやうになるところの人々は使者となるのである。蓋神は地上には常に證人を置き給ふのである。この使者は悔改めたるイスラエル人であると

思ふ。㊀最後の使者は天使である。

我等と主の再臨との間には何も休徴や出來事があるものでないから、目醒て待望みつゝ、我等としては晝の中に働くべきである。

しかし今日まで如何なる事が出來て居るかを調ぶべきである。

證人とは何であるか。

我等は聖書中に一の例を示されて居る。即ちヨナがニネベの街に三日間傳道した事がある。

今は世界にある各國民が比較的廣く證を受て居る。たゞ西藏、ネパール、ブータン及びアフガニスタンとスーダンのマホメット教國に傳はらないのみである。西藏には聖書は澤山送りこまれ、宣教師は入藏の機會を窺ひつゝ其戸口に立て居る。

今世紀間に多の宣教師が目立た人間の指導なしに凡の陸や島又は地上の凡の民と種族に行ねばならぬやうになつた事は實に心に銘すべき著しき事である。

オー基督の教會よ、約束せる表徴の遂に顯はるゝを見よ。
福音は全地に宣傳へらる。
見よ、王の來るは近し。

六、富る人

『富者よ爾曹來らんとする災害を思て哭叫ぶべし……爾曹この末の日に在てなほ財を蓄ふることをせり』(雅五〇)。

少數の人々の手中に富を占領する事は殊に現代の特色である。

金錢上の諸王があつて組合または其他種々の操縱法によりて驚くべく財産を殖して居る事については述る必要がない程である。

若しアダムが今まで生て居て、毎年二萬圓宛富を增したとしても、其總額は到底近來蓄積したる數名の財産に及びもつかぬ事である。

この巨萬の富が家と家、田と田とを一括にせんとするのを制限するものは何である㊁かは何人も話す事が出來ない。しかし其について禍が伴ひ來り、又其が末の日の休徴の一である事は我等の知るところである。

㊁(默十四〇六)我また一人の天使の穹蒼の中央を飛るを見たり。彼地にすむ者卽ち諸國、諸族、諸音、諸民に宣傳へん爲に永遠ある所の福音を携ふ。

㊂(賽五〇八、九)禍ひなるかなかれらは家に家をたてつられ田園に田園をましくはへて餘地なあまさず、己ひとり國のうちに住んとす。萬軍のエホバわが耳につけて宣はく、實におほくの家はあれすたれ大にして美しき家に人のすむことなきにいたらん。

七、イスラエル

これは神の日時計である。

若し我等は歴史に於る我等の立場と、事件の進行に於る我等の地位とを知らんと欲はい、イスラエル人を見るがよい。

イスラエルについては神はかく言ひ給ふた。『假令われ汝を散せし國々を悉く滅しつくすとも汝をば滅しつくさじ』(耶三十一)。

テニソンの小川と題する詩の中に、民は來り、民は去り、されど我は永遠に進み行くとあるやうに、イスラエルは廢ざる民である。

イスラエルはバレスタインに復歸し、其處から再び引出さるゝやうな事がなくなる。

イスラエル人がバレスタインに有て居る地上權はエルサレムにあるマホメット教の教廳にあるのでなく、又コンスタンチノープルの政廳にあるのでもなく、今や世界の三百以上の語に譯せられて配布せられてある數億冊の聖書の中にある。

この恢復については昔時エルサレムに於る使徒等の第一會議に再言せられ、其は預言の言に基けるものであるとの結論であつた。

主耶蘇は見給ふた時に葉の外何もなかつた無花果の樹のやうに、イスラエルはある

時代(アイオン)の間除外せられて居た。

エルサレムは異邦人の時盈るまでは蹂躙さるゝとある。

しかし茲に注意したい事は、少し後に主耶蘇はかく言給ふた事である。『夫なんぢら無花果に由て譬を學その枝すでに柔かにして葉めぐめば夏の近を知此の如く爾曹も凡て是等の事を見ば時ちかく門口に至ると知』(可十三〇二八、二九、路二十一〇二九—三二)。

(歴九〇十五 我われらなその地に植つけん。彼らは我がこれに與ふる地より重ねて拔さらるゝことあらじ。汝の神エホバこれを言ふ。

(徒十五〇十三—十八)彼等が言畢りし後ヤコブ答て曰けるは人々兄弟よ我に聞。神初て異邦人を眷顧その中より己が名を崇る民を取給ひし事はシモン既に之を述。預言者の言これと符り。其書に、此後われ反て已に傾圮たるダビデの幕屋を復び起し、其破壞の跡を再び造て之を建べし。是その餘の民および凡て我名をもて稱らるゝ異邦人に主を尋させんなり。此すべての事を行ふ神これを言さ錄されたるが如し。神は世の始より其すべての所作を知たまへり。

(可十一〇十三、十四)遙に葉ある無花果の樹を見てその樹に何か有んとて來しに葉の他なにも見ざりき。是無花果樹の時に非れば也。イエスこの樹に對て今よりのち永久も爾の果を食ふ人あらざれといふ。弟子これを聞り。

(路二十一〇二四)人々刀刃に斃れ且とらはれて諸國に曳れエルサレムは異邦人の時滿るまでは異邦人に蹂躙さるべし。

結三十一章には樹々は諸國民の型としてある。

無花果の樹はユダヤ人で無用の言葉の葉のみあつて、實がないと敎頭アルフォードは申された。

今イスラエルは國民としての休徵を表し、實際パレスタインに歸りつゝあるなれば、今は確に時代の終で『時ちかく門口に至り』居るのである。

就ては茲に語らねばならぬ事は

シオン主義

で、其祖先の國に歸らんとするユダヤ人の現今に於る運動である。

シオン主義とは猶太人の國民的希望と感想を表はす所のもので、近來の語である。

この感想は猶太人中の黨派中で最も極端なる人々の有して居るもので、餘程かけ離れた見解の上に根據を置て居るものである。

よく世間に知れて居るやうに猶太人は過去五十年間に、正統派、現狀派及び改革派の三大派に分れた。

正統派はタルマド書に註釋せられてあるやうに舊約聖書をば神の言其儘のものとして受入れ、また其祖先の望と嗣業を有て居る派である。此派の人々は預言者が屢々繰

返したる言を信じ、何時かはパレスタインに歸り、來るべきメッシヤの支配下に聖くかつ福なる國民として永久に住むやうになる事を信じて居る。

此望は彼等の熱心なる宗敎的生涯の心髓であつて、また彼等の祈禱本中で最も嚴肅なる禮文の中に含れて居るものである。

各國各國民間に散在して居る所の正統派の猶太人は毎朝左の祈禱を捧げて居る。

「我等の救主なる神よ、我等を救ひ給へ。我等を共に集め、我等を諸國民の中より贖ひ出し給へ」。

「永遠の主、我等の神また我等の父祖の神よ、聖旨に適はゝ我等の生るうちに聖所は速に再建せられ、律法にて定め給へる如く我等の嗣業を與へ給へ。彼處にて往古の日の如く爾に畏れ事ふることを得さしめ給へ」。

彼等は嚴肅なる逾越の節を守る時にかく叫び出す。

「我等今此處にて此節を守ると雖ども、來年はイスラエルの地にて守らんことを望む」、また「讃むべき主よ、我等の日の中に聖き城エルサレムを速に造りたまへ」と。

これら正統派の猶太人はかゝる眞實にして熱心なる祈を捧げつゝ、憎惡と追放と排斥の鞭を受て世界の彼地此地に逐ひ廻されて居る間でも、信仰の火と恢復の榮ある望

とを有て居るのである。しかし去十七世紀間彼等はかく熱心に祈つて來たけれども、パレスタインに歸るために何等の努力をした事がない。何故なれば彼等は神自身が超自然の方法を以て彼等を復歸せしむるまで待つべきものと信じて居つたからである。

二百年前から迫害が下火になり、十八世紀に入てから彼等は漸次に自由の身とせられた。かく自由を得るとともに結三十七章にある枯たる骨の如く『音あり骨うごきて骨と骨あひ聯る』やうな事が起つて來た。

汎イスラエル同盟なるものは千八百六十年にパリスに於て組織せられ、それから英國に於て英猶會なるものも起つた。これらの強力なる團體によりて猶太人は全世界を通じて活動するやうになつた。今や僅少の時日の間にチョヴェヴィ（愛する）シオン會又はショヴ（殖民的）シオン會などが組織せられた。それらは重に露國、羅國、獨國、英國又は米國にある正統派の猶太人である。これは彼等がパレスタインに其住家を得んとてなしたる最初の實際的努力である。

現狀派の人々の事を簡單に申せば、彼等は猶太教の精神と近代の要求とを調和せんと勉めて居るところの者で、其大多數は歐洲の西部に居る者である。

改革派は新說派で、聖書の天啓につける信仰を放棄して居る人々である。彼等

は凡の國民的又メッシヤ的希望を吹飛して終ふた。彼等の敎法師等は喜んで猶太敎の使命と聖言の天啓といふ根本を打壞すところの過激なる高等批評とを結び付て說て居る。或者は全く不可思議論者になつて終ふた。

不思議に堪ぬ事は、是等の不可思議論者中よりシオン主義を唱ふる他の一派が起つた事である。彼等は此派に屬するのみならず、首領となる左の人々を起して居る、即ちパリスの博士マクス、ノルドー、ヴェンナの博士セオドア、ハーツルである。

シオン黨といふ旗幟のもとにある正統派の猶太人は最も熱烈なる宗敎的動機に由て活動して居るが、之に反してかの不可思議論者はこれは全く宗敎的運動でないと斷言して居る。それは純粹に經濟的又國民的のものである。博士ハーツルは其創立者で重

（結三十七〇一—七、茲にエホバの手我に臨みエホバ我をして靈にて出行しめ谷の中に我を放賜ふ。其處には骨充り。彼その周圍に我をひきめぐりたまふに谷の表には骨はなはだ多くあり皆はなはだ枯たり。彼われに言たまひけるは人の子よ。是等の骨は生るや我言ふ主エホバよ汝知たまふ。彼我に言たまふ。是等の骨に預言し之に言べし。枯たる骨よエホバの言を聞け。主エホバ是らの骨に斯言たまふ。視よ我汝らの中に氣息を入しめて汝等を生しめん。我筋を汝らの上に作り肉を汝らの上に生ぜしめ皮をもて汝らを蔽ひ氣息を汝らの中に與へて汝らを生しめん。汝ら我がエホバなるを知ん。我命ぜられしごとく預言しけるが、我が預言する時に音あり骨うごきて骨と骨あひ聯る。

なる首領であるが、これを創めた理由は、塊國人の大多數が保持して居るところのセム種族排斥の迫害を遁るゝ最後の手段として之を受入たのである。彼の思想はこれである、即ち若し猶太人がパレスタインを再興し、縱し土耳其帝の宗主權の下にあつても一の政府を立るとすれば、これに由て猶太人は一國民としての立場を有し、世界の諸國民からセム種族排斥の事を除き、而して猶太人が其欲むところに從ひ、何處の民の間に於ても快く住居する事が出來るやうになるとの事である。

凡の正統派の猶太人は此運動に加はつて居る譯でない。實際チョヴェヴィシオン會の首領等も加はらずに居るのである。

博士ハーヅルは發企してシオン主義者の大會を千八百九十七年に瑞西國のバスル市に開いた時は、獨國の教法師と猶太人の新聞紙の多數と富る改革派の猶太人の多から激烈なる反對を受た事がある。それにも關らず歐洲と東洋と北米の各地から代表者が二百餘人も集り、非常の熱心を以て大會の執行順序通り行たのである。

此大會の主旨を賛成する建白書やうのものが猶太人數萬の署名を以て各派より來つた。

此大會に於て中央委員を選擧し、一億圓の資金を募る事を議決した。

これは確に猶太人の態度に一大革新を來し、以西結書にある枯骨が一層密接に相連る事の表となつた事である。

此運動は去十年間驚くべく發達をなし、オットマン帝國には攝理的に途が開かれ、其目的を果し得る機會が來て居るやうである。

シオン主義は猶太人間にありて最も激烈なる爭論の問題になつて居る。正統派の多數はこれを以て神の權限に立入る企謀であると批評して居る。

しかるに他方に於ては、神は彼等ユダヤ人が爲し得る事をする爲に敢て奇跡的の事を爲給ふ事が無と言てる者もある。

改革派の中多の人々は此運動を嘲笑て居たが、今はセム種族排斥運動を減少せしめず、反つて盛んにする法外の大愚論であると誹るやうになつて居る。

彼等はパレスタインに歸らうと願ふて居ない。彼等は恰もカンザス州の或リバイバル集會に出席した人のやうに、天國にも行きたくない、カンザスの其地に居りたいと言た人のやうである。

斯の如く彼等改革派に屬る猶太人は歐洲西部や北米に於て得たるところの宏大なる住宅や富を差出して、彼等の祖先の國に於て預言せられたるメッシヤ的王國の榮光を

得ることを凡て拒絶して自ら足れりとして居るのである。彼等は露國、羅國、波斯および亞弗利加北部にありて迫害せられ居る同胞に向ひ冷靜に忠告し、セム種族排斥運動が絶滅するまで其悲しむべき迫害を耐忍べよと言て居るのである。

しかしかの同胞等は反つてかく答へて居る、かの用心深き忠告者等が若もセロ・コや露國に住み居るなれば異つた思想を有に相違ない、また歐洲の西部に於てさへセム種族排斥運動は減る代りに寧ろ增て居ると申して居る。

かゝる爭論の眞最中にシオン主義者はアブラハムの神の祐助を遠ざけつゝ、ごしごし歩を進め、不可思議論者を其首領に戴き、無神の國を建んとて狂者の如く此計畫に投じつゝある。

しかし聖書學者は必ずかく言ふであらう、イスラエルをかく無神主義で集る事は、預言者に由て明白に示されたる榮光ある神爲的恢復を成就する道でないと。

實に然でない。神は其大なる奇跡的の能力を彰し給ふてイスラエルを集め給ふ事を幾度も約束し給ひ、『エホバいひ給ふ然ばみよ此後イスラエルの民を埃及の地より導き出せしエホバは活くといふことなくしてイスラエルの民を北の地とそのすべて逐やられし地より導き出せしエホバは活くといふ日きたらん』（耶十六〇十四、十五）とあり、また『汝

等羞恥を知ぬ民早く自ら內に省みよ夫日は糠粃のごとく過ぎさる然ば詔言のいまだ行はれざる先エホバの烈き怒のいまだ汝等に臨まざる先エホバの忿怒の日のいまだ汝等に來らざる先に自ら省みるべし』（番二〇一、二）とある事に大に注意すべきである。此預言は現今のシオン主義者の運動によれるよりももつと文字通に應ぜらるべきでないか。

第一大會の時の辯士の一人は「若し土耳其帝が今我等を受入るゝなれば我等は彼を我等のメッシヤとして受入るゝであらう」と言た。

神いひ給ふ、『なんぢらは價なくして賣れたり金なくして贖はるべし』（賽五十二〇三）。

しかるに博士ハーヅルは「我等はパレスタインを買取ねばならぬ。救は金に由るものである」と言たと報告せられて居る。

かゝる事は此時代の終が近いて居るといふ休徵に外ならない。

この休徵なるものが一位なれば單に注意する位の事であるけれども、それには聖言の中に示されたる澤山の休徵が伴ふて、これを立證して居る以上は、如何して信せずに居られやうか。

我等基督信者は耶蘇のメッシヤであるといふ證據が山なす程あるにも關らず、之を否定する猶太人を責て居ながら、耶蘇は再び來り給ふ時が近いて居るといふ證據が山

ほどあるのに之を拒んで居られやうか。

此第一シオン大會は紀元後六百三十七年マホメット教徒によりてエルサレムが奪れてから千二百六十年目に開かれたといふ事は注意すべき事件である。但十二〇七。異邦人の時なるものが將に充んとし、諸國民は『ヤコブの患難』(耶三十〇、六、七)なる無神的會合と關聯して起るところの事件の大旋渦の中に捲込れんとし、其患難たるや前の世にも後の世にも無といふ恐しきものである(太二十四、二一)事は有りさうな事である。

然し、兄弟よ、我等は夜に屬る者でない。我等は目醒て常に祈り、これらの事を逃れ、人の子の前に立つ得るやうすべきである。(路二十一、三六)。

オー、榮光の望。靈と新婦とが來れといふは尤な事である。また新郎が『我必らず速に至らん』と言は異むべきでない。其に對して我等は歡喜に勝へざる使徒ヨハネとともに

アメン主イエスよきたり給へ

と言ざるを得ないではないか。

『晝の間は我かならず我を遣し〻者の行をなす可なり夜きたらん其とき誰も行をなすこと能はず』(約九、四)。

全世界に擴がつて居る凡の傳道地は我等自身と我等の時と我等の物質をもつて獻げんことを要求して居る。

オー同勞者よ、我等は永遠に向てもつと力を入る〻爲に我等の機會をもつと多く捕へるやういたしたいものである。

耶蘇は再び來りつゝある

『是故に爾曹の主いづれの時來るかを知らざれば怠らずして
守　　**汝**』（太二十四〇四二）。

『然ば怠らずして
守　　**汝**
爾曹その日その時を知ざれば也』（太二十五〇十三）。

『此日いづれの時きたる乎を知ざれば
爾曹つゝしみて
目を醒し
祈禱せよ……是故に爾曹も怠らずして
守　　**汝**
蓋家の主人あるひは夕あるひは夜半あるひは鷄鳴時あるひは早晨に歸るかを知ざれば也恐くは不意の時きたりて爾曹が眠るを見てわれ怠らずして

守　　**汝**
と告るは即ち
凡の人
に告るなり』（可十三〇三三—三七）。

『目を醒し
衣を着をる者は福なり』（默十六〇十五）。

『若し
目を醒し
居ずば我盜賊の如く爾に到らん……
われ迅速に來らん』（默三〇三、十一）

爾曹わが證人と爲べし

讀者諸君よ、我等は主の歸るのを目を醒し待つて居る間に主耶蘇の弟子として爲すべき事は何であるだらうか。我等は個人的に悔改、信仰、赦罪、成子また成聖を實驗して居る位では充分でない、また攝理と預言の深き所を探ね知らんとて聖言を研究し

て居る位では十分でない、我等の心も手も

全世界を教化

するといふ實際的の大事業に從事せねばならぬ。これについて主が我等に命じ給ふ事がある。『徧く世界を廻て凡の人に福音を宣傳よ』（可十六、〇十五）。また主はかく曰給ふた、『また天國の此福音を萬民に證せん爲に普く天下に宣傳られん』（太二十四、〇十四）。教會は地上にある間は『爾曹地の極にまで我證人と爲べし』（徒一〇八、路二十四、四〇四七、四八）と主耶蘇が命じ給ふた目的を果すところの使者である。

さればこそ我等は力を盡して全世界に行き渡り居る傳道事業に關係すべきである。而して我等は之が爲に物資を供給し、之が爲に祈り、また道路や藩籬の邊又は遠國に傳道のために行く人を勵ますべきである。羅十〇十五。若し出來るなれば我等は自ら行き、『われは常に爾曹と偕に在なり』と仰せ給ひし主と同心なる事を表すべきである。

かくすれば主を最も悅ばす事であると思ふ。

かくすれば主の日を早むる事であると思ふ。（彼後三〇十二、太二十四〇十四）。

今日まで爲れたる傳道の進歩は尙一層努力するやうに我等を鼓舞するものである。

此世は敎化運動の多の團體を以て包まれて居る。グリンランドからパタゴニヤまで、

ノルウエーから喜望峰まで、サイベリヤからタスマニヤまで、又海の島々に至るまで、多の福音宣傳者は生命の言を宣傳へて居る。なほ僅少の所がサタンの配下になつて、證を受ずに居る。しかし其中のネパールとチベットは待望んで居る宣教師に門戸を開かんとして居る。また中部亞弗利加は各方面から突進せんとして居る英雄等の爲に長年固く閉したる門木を拔んとして居る。諸君は若し宣教運動に關する定期刊行物を讀み、殊に其報告を見るなれば、諸君の靈魂は今でも證は殆んど完成されて居ると望を以て喜ぶことであると思ふ。而して後戰友よ、立れよ。やがて主の公使等が召還せらるゝ時に善かつ忠なる僕ぞと主の歡迎の聖言を聽く時まで、進軍の命令に服從しやうではないか。

殆んど凡の傳道會社は其定期刊行の雜誌を有して居るが、我等は熱心に各讀者は其一か二の雜誌の講讀者たらんことを勸むるものである。

譯者中す。著書はこゝに四五十位の雜誌の名を擧て居るけれども我邦の讀者に必要が無と思ひ、これを省略する事にした。

此外本書に對する諸大家の批評もあるけれども省略することにした。

耶蘇は來る 終

本書引照聖句索引

創一〇二……一七四頁
同一〇三……七〇
同一〇二六……一七四
同二〇……四三
同三〇一五……二九二
同五〇二四……一〇四
同六〇三……一七四、一七五
同九〇一、二……五三
同九〇五、六……三二
同一二〇一—七……四五、二五
同一三〇一四—一七……二五
同二二〇……二六
同二四〇……二六
同二四〇五六—五八……一七六
同一九〇五、六……二〇二
同二十〇八……四三
同三三〇一六……二〇二
同一六〇……二九八
同二三〇一五、一六……四三
同二三〇二七、二八……四三
同二五〇四、八—一一……四三、四四
同二六〇……一〇〇
利二六〇一八—二八……四四頁
同二六〇四四、四五……二二六
民六〇二三—二六……九二九
同二三〇七—九……一三八
同二三〇九……二〇二
申四〇三十、三一……二二六
同卅〇一—十……二二七
同卅二〇十一……三〇〇
同卅三〇二……二七七
母前九〇一六……五二
同十〇二四、二五……一五二
同十三〇十三……五二
母後七〇十、十一……二二七
王上一九〇十八……二二六
喇二〇六四、六五……三〇〇
同七〇十三……二二四
伯一九〇二五—二七……二二二
詩二〇八、九……三、一八七
同二〇十二……五
同廿二〇……一九
同廿二〇卅……二二二
同廿四〇六……二二二
詩廿七〇五……一〇五頁
同卅一〇廿……一〇五
同五七〇一……一〇五
同八五〇……一二〇
同九十〇……四四
同百〇二〇十六……七、一二〇
同百十〇一……五四
同百廿二〇八……一三八
箴卅〇十一—十四……二二二
饗一〇廿六、廿七……一〇四
同二〇一—廿一……一四〇
同二〇十二……六六
同四〇一—六……一五三
同五〇八、九……三三九
同七〇十四……一九、七〇
同九〇六、七……三、五三、一二二
同十一〇二—四……一七七
同十一〇四—九……一二二、一六〇、二二六
同十一〇九—十二……六五、一六〇、二〇二
同十四〇十二—十七……一四五、一四八
同二十一〇十一、十二……二〇五
同廿四〇十六—廿三……四九

賽 廿五〇六—八……一六九
同 廿五〇九……八〇
同 廿六〇十九……一三一
同 廿六〇廿……一〇五
同 廿六〇廿一……一〇五、一六六
同 廿七〇十二、十三……二二九
同 廿八〇十五、廿二……一三八、一四三、三三五
同 廿二〇一……五二、一二〇
同 廿三〇十七、廿、廿一……三
同 廿五〇八—十……二〇一
同 四十〇九—十一……一九三
同 四十一〇廿一—廿三……二五一
同 四十二〇八、九……二五一
同 四十三〇一—七……二三五
同 四十三〇九—十二……二五一
同 四十五〇廿三、廿四……一六一
同 四八〇十……二四七
同 四九〇十八—二三……二三七
同 五二〇三……二四九
同 五二〇八……一五三
同 五五〇三……一三六
同 五三〇十一……一七八
同 五四〇七、八……二三三
同 五五〇三、六……一三六、二八四
同 五八〇一……二一六
同 五九〇廿……八
賽 六十〇一—四……八、二四七
同 六十〇一五、十六……二三七
同 六一〇一—三……六七
同 六五〇九、十五、廿二……一〇四
同 六五〇廿……二二一
同 六五〇十七—廿五……三二七
同 六六〇八……三、五三
耶 三〇一—十八……二二一
同 十六〇一四—十六……三二九
同 廿二〇廿九……二五二
同 廿三〇一—六……八、五二、一六三
同 廿三〇三—八……一三二、二四〇、二六九
同 廿五〇十一、十二……四四
同 廿〇四—七……三二五
同 廿〇十一……三四〇
同 廿一〇九、十……三
同 廿二〇廿六—四四……二二一
結 七〇一—九……二四五
同 十一〇十九……一七五
同 廿〇四十—四四……二二一
同 廿一〇廿五—廿七……五三
同 廿二〇十九—廿二……二九八
同 廿四〇……二二一
同 廿四〇十一—廿八……三
同 廿六〇……二二一
同 廿六〇一—廿八……三、二四三
結 廿六〇十—十二……二四三
同 廿七〇……二二
同 廿七〇十二—十四……二三一
同 廿七〇一—廿八……三四五
同 廿七〇十五—廿二……二二六
同 廿九〇二八、二九……二二五
但 二〇廿七、三八……五三
同 二〇四四……一六二
同 七〇十三、一四……八、一九、一二三
同 七〇十八—二七……一二三、一二二、一六二、一七一
同 九〇二……四四
同 九〇廿七……二二八、三二五
同 十一〇廿六……四五
同 十一〇四五……一四九
同 十二〇一……二九
同 十二〇二……六七、六九、七七
同 十二〇三……二二
同 十二〇四……二四八、三〇二、三二九
何 六〇二……六六
同 十三〇十四……五三
同 一〇一五……二九八
耳 三〇十六、十七……二二六
同 三〇十二……八三
同 四〇十二……四
麼 五〇十八、廿……一〇五、二二六
同 九〇九……三二一

麼 九〇十一—十五……二二七
同 九〇十五……二四一
同 四〇一—七……一六一
同 六〇八……一〇四
同 七〇十八—廿……二三一
翁 二〇三……三〇一
番 一〇十四……六六
同 二〇一、二……三三五
同 三〇十九、廿……二三一
基 二〇六、七……八三
亞 八〇廿—廿三……二三八
同 十〇六—十二……一〇四、二三二、二四六
同 十二〇十—十四……一〇五、一六七、二三六
同 十三〇六……一六七
同 十三〇八、九……一〇五、二二九、二五八
同 十四〇一—三……六六、三三五
同 一四〇一—廿一……六六、一四〇、一五三
同 十四〇四、五……九、九七、九九、二六六
同 十四〇六—八……一〇六
同 十四〇十六—二十一……五三
同 十四〇十六—十九……二二一
馬 三〇一—五……二四六
同 三〇十一、十二……二三三
同 四〇一—三……一九五、三〇六、二二七
太 二〇二……二二一
同 三〇二……一〇九、二一四
太 三〇七……二八四
同 四〇一七……二二四
同 五〇八……七
同 五〇十三—十六……一八二、二二七、二五九、二二二
同 五〇十七、十八……一八二
同 七〇十三、十四……二二一、二五九、二八〇
同 十〇六……二二三
同 十〇七……二二四、二九三
同 十〇十五……二三四、二三九
同 十一〇三……二八五
同 十一〇十六……二二三
同 十一〇廿—廿四……二二九、二二三
同 十一〇廿七……二〇六
同 十二〇廿……一五三
同 十二〇四一、四二……二二三
同 十三〇……二二九
同 十三〇十、十一……二二三
同 十三〇廿九—廿……二二一
同 十三〇廿九、四〇……一九
同 十三〇四一、四二……二二一
同 十三〇四三……一二、一六三
十 十三〇四九、五〇……二二九
同 十六〇四……二二三
同 十六〇六—十二……二二一
同 十六〇十八……一〇七、二八八
太 十六〇廿六、廿七……四、二六
同 十六〇廿八……一八三、一八八
同 十七〇一—九……一〇九、一六五
同 十八〇七—九……二二三
同 十九〇四—六……二九二
同 十九〇廿八……五三、六五、一〇八、一一一、二二七
同 廿一〇廿八……一七三
同 廿二〇一—十……三九、二二七
同 廿二〇四四……一一三
同 廿三〇十三—廿九……二二四
同 廿三〇十七—廿九……九〇、一一三、一一五、一六五、一六七
同 廿三〇……二二三
同 廿四〇……二〇六
同 廿四〇十四……一八〇、二三九
同 廿四〇廿一……四九、一〇四、一二九、二三一
同 廿四〇廿二……一〇三、一三一
同 廿四〇廿九、廿……五、四九、一〇二
同 廿四〇廿四—廿六……一九、二二一
同 廿四〇廿五……一九
同 廿四〇廿六……一八三、二四九
同 廿四〇廿七—五一……五〇、八一
同 廿四〇四二……七九、八九、一〇二
同 廿五〇六……二九
同 廿五〇十……八一、九九、一九七
同 廿五〇十三……五、七九

太 廿五〇十四—卅……一三六
同 廿五〇卅一—四六……三、二九、一三六、一七二、二四七
同 廿五〇四二—四四……八九
同 廿六〇廿九……三九、一〇八、一六八
同 廿六〇六四……一六
同 廿七〇十一……一三
同 廿七〇廿五……二六
同 廿七〇卅七……一三
同 廿八〇廿……二九、一八四
同 廿八〇廿……一八九
可 一〇十四、十五……一三
同 六〇卅……一九二
同 八〇十五……二一
同 八〇卅四……一八三
同 九〇一—十……一八三、一八八
同 九〇十……七七
同 九〇五十……二〇八
同 十一〇十三—十四……三四一
同 十三〇廿八、廿九……三四一
同 十三〇卅、卅一……三一
同 十三〇卅二—卅七……七九、二六〇、二八四、三三七
同 十四〇廿五……一〇八
同 十五〇四三……一一〇
同 十六〇廿……一七八、一八〇
路 一〇十……二九八
同 一〇廿六—廿八……二
同 一〇卅一—卅三……二、一四、五三、一六一
同 二〇二六、三六—卅八……二〇四
同 四〇十六—廿一……六七、六八
同 四〇廿二……五二
同 九〇十……二四、一九三
同 九〇廿七……一八三
同 九〇四一……二三
同 十〇九—十一……一〇九
同 十〇廿一……二〇二
同 十一〇二、廿八……一六二、二四九
同 十一〇廿九—卅二……二三
同 十二〇一……二一
同 十二〇卅二……一三、一七一
同 十二〇卅二—四〇……八二、八九、一〇一
同 十二〇卅七—四三……一五四、三〇八
同 十二〇四五、四六……八、二一、七九、八一
同 十三〇三……一九四
同 十三〇廿、廿一……二一
同 十三〇廿三—廿五……一七五、二八四
同 十四〇十四……二七、七五
同 十四〇十五—廿四……三九、一六八
同 十四〇卅一—卅三……七
同 十六〇廿二……二五
路 十七〇廿、廿一……一六四、一一三
同 十七〇廿四—卅……一〇一
同 十七〇廿六—卅七……五一、一〇一
同 十七〇卅四……一二九
同 十八〇八……一八
同 十九〇十一—廿七……一〇七、一一一、一九三
同 二十〇二十……一六五
同 二十〇卅五、卅六……二七、七五、二二九
同 二十一〇廿四……四九、三二、三四一
同 二十一〇廿五—卅一……四、二九六
同 二十一〇二十八……一二、三三七
同 二十一〇卅一、卅二……一〇〇、一三一
同 二十〇卅四—卅六……四、一二、一〇二、一二三、一三九、一四七、二九六
同 二十二〇十九……三七
同 二十二〇十六—十八……一〇八
同 二十二〇廿八—卅……一六八
同 二十三〇四二……一一〇
同 廿三〇四三……二二五
同 廿四〇卅九……一三九、一七三
同 廿四〇四七、四八……二五四
約 一〇五—十……二〇九
同 一〇十一……一六六、一一三
同 一〇十二……一五九

約 三〇三—五……一六九
同 三〇十七—十九……一三四、一三五
同 三〇十九—二十一……三〇四、三〇九
同 三〇廿八、廿九……一三一
同 三〇三四……一七
同 三〇三六……六一
同 五〇廿四、廿五……六九、一三四
同 五〇廿八……六九、一五二
同 五〇廿九……六七、七六、七七
同 五〇四〇……一七八
同 五〇四三……一四三、一六七、二〇五
同 六〇十四……二八六
同 六〇三七……一五八、一七七
同 六〇三九……六四
同 六〇六三……一六九
同 七〇卅八……一六、一七
同 七〇四六……一五二
同 八〇廿三……一六一
同 八〇五一、五二……一八九
同 八〇五八……一九一
同 九〇四……一二九、一五九
同 十〇廿七、廿八……一五九、一六一
同 十二〇廿六……一二九、一六一
同 十三〇十五……一八八
同 十四〇二、三……二五七、二六一、二八六
同 十四〇三……一、一〇、九七
約 十四〇三……二九、三〇、二八六
同 十四〇六……二、一三六
同 十四〇十七—廿六……一七三、二六〇、一八四、一六一
同 十四〇廿三……二九、一八五
同 十四〇廿六……三三、五九、一四二、一七三、一八五
同 十五〇十五……一八七
同 十五〇十九—廿一……五〇、一一六、一六〇
同 十六〇七……三七
同 十六〇八……一四七、一七四
同 十六〇十三—十五……三三、五九、一七三、二五七
同 十六〇廿—廿二……二五七
同 十六〇卅三……三六、五〇、一一六
同 十七〇十一—十六……一九九
同 十七〇十四……一一六、一一七
同 十七〇廿三……一八五
同 十九〇廿四……二九、三七、一七一、一六一
同 十八〇卅六……一六〇
同 二十一〇十八—廿三……二四
徒 一〇七……二四九
同 一〇八……三五四
同 一〇九……三七、一七一、一七三、二六〇
同 一〇十、十一……二、三〇、九九、一七三、一八五、二八六
同 一〇十六……一七三、一七四
徒 一〇四二、四三……七
同 二〇五……一七九
同 二〇卅四—卅六……一一三
同 二〇四一……六〇
同 三〇廿、廿一……五四、五五
同 三〇廿六……一一三
同 四〇二……三、七四
同 五〇四一……二八八
同 七〇一四……六〇、六一
同 七〇卅八……一〇七
同 七〇五一……一七四
同 七〇五五……一七三
同 八〇四……一七九
同 八〇卅三……二八八
同 九〇五……一七三
同 九〇卅一……一二五
同 十〇四一……二六〇
同 十〇四二、四三……一三七
同 十三〇卅四……一三七
同 十三〇四六……一一五
同 十四〇廿一、廿二……一一〇、一八七、一九五
同 十五〇十三—十七……九、一〇一、一一四、一三、一二九、二二七、二三三、三四一
同 十七〇十、十一……三三
同 十七〇十八……三一
同 十七〇廿三……二〇三

徒 十七〇卅、卅一……七、六五、一三八、二二八
同 廿三〇六—八……七七
同 廿四〇十五……六七、七七
同 廿七〇卅七……六一
同 廿八〇十五……九八
羅 一〇四……七六
同 一〇十六……一一三、一二五、一七六
同 一〇卅二……一六三
同 二〇十五、十六……一三九
同 二〇廿九……一四一
同 五〇三、四……一三三
同 六〇十三……七三
同 八〇十一—十七……一三三、一七一、一七三、一八七
同 八〇十五—十八……一六九、一九五、一九八
同 八〇十七—廿三……一一一、一一四
同 八〇十九—廿三……九六、一六三
同 八〇廿一—卅三……一三一、二二六
同 八〇廿三……三、一〇一、二五八
同 八〇廿四、廿五……三〇六
同 八〇卅二……二七
同 八〇卅四……三五、五四
同 九〇三……二四三
同 九〇廿七……二四三
同 九〇廿八……一五三、一六一、一七五
同 十〇十八……一八〇
羅 十一〇五—七……一〇四、二二六
同 十一〇十四……一五九
同 十一〇十五……一三三、二四三
同 十一〇十七—二八……二八八
同 十一〇二十……一七四、二〇九
同 十一〇二十五—二八……一六七、二二三
同 十三〇十一……八二
同 十三〇十二……一四、二二八、三〇五
同 十四〇十—十二……二六三
同 十四〇十七……一六七
同 十六〇廿……二九二
同 十六〇廿五、廿六……一一四
哥前 一〇七……一〇、二五八
同 一〇廿一……二〇二
同 二〇九……三〇六
同 二〇十……五九
同 三〇十三—十六……一三七、一七七、二六三
同 四〇五……一九、一三七、二六三
同 五〇六—八……二二一
同 六〇二—三……六五、一三七、一三九
同 九〇廿二……一三、一五九、一七五
同 十〇卅二……二〇一、二四一
同 十一〇廿六……三七、二五六
同 十二〇十二—廿七……九、一四七、一九七、二九〇
哥前 十三〇十二……一三五、一四七、一五三
同 十五〇廿三—廿六……五五、一三〇、二五九
同 十五〇廿三……二五、七七
同 十五〇四二—四四……一七一、二五九
同 十五〇四五—四九……二五、六〇、一七一、二六一
同 十五〇五〇……一六九、一七〇、一七一
同 十五〇五一—五二……二六、二七、八九、一七一、二五九、二六〇、三〇二
同 十五〇五四、五五……二五、三一
同 十五〇五三……二六一
同 十六〇廿二……二八三
哥後 四〇十七、十八……一三三、二六
同 五〇四……二七
同 五〇八……六八
同 五〇十……一三七、一五八、二六三
同 五〇廿……一七、一九九
同 六〇二……七、一三五
同 六〇一四—一八……一三三、一九七
同 七〇一……二〇一
哥後 十一〇二……一〇、一一七
同 十一〇十四……二〇三
加 一〇四……一九五
同 二〇十九、廿〇……六一
同 四〇十九……一三五、一八五
同 四〇廿四—卅一……一六、一七、一六一

加 五〇七—九……二二一
弗 一〇三……二九〇
同 一〇四—六……二九〇
同 一〇十三、十四……二九二
同 一〇廿、廿一……二九〇
同 一〇廿二、廿三……一二五、一八五
同 二〇一……二九〇
同 二〇六……六一、二九〇
同 二〇七……二九〇、三一九
同 二〇十……一六九
同 二〇十四、十五……一二五、一九六
同 三〇三—六……一一四
同 三〇十一……三九
同 三〇廿一……三一
同 四〇十一、十二……一二五
同 四〇十二、十三……一二五、一七七
同 四〇廿……一七六
同 四〇卅……一四七、一七四
同 五〇八—十一……一九七
同 五〇十四—十六……七四、一九七
同 五〇廿—廿三……一〇
同 五〇廿三—卅二……一〇、一一五、一一六
同 五〇廿五—廿七……三七、九八、一七三、二九二
同 五〇廿六……七、一七三
同 五〇卅—卅二……一七七、二九二
弗 六〇十一—十三……一三五、二〇三
胂 一〇廿九……二八八
同 二〇五—十一……二八八
同 二〇十、十一……一六一
同 二〇十五、十六……二〇九、二二三
同 三〇八—十一……七六
同 三〇十……二七、七五
同 三〇廿、廿一……一三、一七一、一九六、二五八、二六〇
西 一〇六……一八一
同 一〇十八……五七
同 一〇廿三……一七九
西 一〇廿四—廿七……一〇七、一一五、三一九
同 二〇八……二〇三
同 二〇十二、十三……六一
同 三〇一—四……六一、一六一
同 三〇四、五……七
撒前 一〇九、十……一六、一五一、一五九、二五九
同 二〇十九……一二
同 三〇三……五一、一一六、一一七
同 三〇九、十……八一
同 三〇十三……七、九七
同 四〇十三—十八……五六、七三、一三六、一四六、一四七、二五九、二六〇、二六一、二八六
同 四〇十四……九六、九八
同 四〇十五……八九、一〇二
撒前 四〇十六、十七……二五、二九、六三、六八、七七、九七、九八、一二八、一四六、二九六
同 四〇十八……一〇、一〇六、一五四、一七六
同 五〇一—十……一一、一四七、二六〇、二六三
同 五〇二……一〇一、一〇二
同 五〇三……一二、一二八
同 五〇四—八……一二九、二一六
同 五〇八、九……三〇六
同 五〇九、十……一四七、二六二
同 五〇十九……一七五
同 五〇廿……二五二
同 五〇廿三—廿四……七
撒後 一〇四、五……一一〇
同 一〇四—十……九七、一一〇、一二三、一三六
同 一〇五……一八七、二九〇
同 一〇六—十……三、五、三五、五一、一一一、一一八、一三五、二五六、一八七
同 一〇七、八……四九、一〇一、一一九、一三〇、三三三
同 二〇一—八……四八、六三、一三〇、一四四、一四七、一四九、二六一、二九八
同 二〇三—十二……一四三、一四七、一四四
同 二〇五—十五……八七
同 二〇七—十……一四三、一四七、一四八、二八六
同 二〇八……四九、二〇五
同 二〇十一……一四七
提前 一〇十七……八三、三一九

提前一〇十八……七九
同 四〇一……五一、一二五、二〇五
同 四〇一—三……七九
同 六〇十二……七九
同 六〇十三—十五……三、四八、一八九
同 六〇廿……二〇二
提後二〇三……七九
同 二〇十一、十二……一二三、一七三、一八七
同 三〇一……二〇五
同 三〇一—五……一二五
同 三〇十二……五〇、一二一、一二六
同 三〇十三……五一
同 三〇十六……二九、五九、一五五
同 四〇一……一三七
同 四〇一—五……一二五、一五三
同 四〇二—四……五〇、二二六
同 四〇七……七九
同 四〇八……二五、一三八
多 二〇十三……三九、四八、一五四、二五八
同 二〇十四……二〇一
來 一〇二……一七三、三九
同 一〇三……一四二
同 二〇九……一八九
同 二〇十四、十五……二二九
同 三〇八……一三五
來 四〇九……四四
同 四〇十二……七一
同 四〇十四……一七三
同 六〇二……七七
同 六〇八……一九五
同 六〇十八……一九九
同 七〇廿四—廿八……三五、五四
同 九〇廿四—廿六……三五、五四、一七三、二九八
同 九〇廿八……二、三五、二五八
同 十〇十一—十三……一一三
同 十〇廿二—廿五……三九、二一四、二五七
同 十〇廿五……一〇九、一五五、二九八、三三七
同 十〇卅五—卅七……二、三八、八二、八九、三一、二五八、二八五
同 十一〇三……三一九
同 十一〇五……一〇二、二〇五
同 十一〇十三……三九、一九六
同 十一〇十九……七四
同 十一〇卅五……七七
同 十一〇卅九、四〇……一三一
同 十二〇廿二—廿四……一一七
同 十二〇廿六、廿七……八三
雅 五〇一—八……一四、二五八
同 五〇廿……一五九
彼前一〇三……一九四
彼前一〇五—十三……二六、三三、一七九、一九五、二〇六
同 一〇十一—十二……一一七
同 一〇十一……一〇九
同 一〇十二……三九
同 一〇廿五……二
同 二〇九……二〇一
同 二〇十一……三九
同 二〇二十一……二六八
同 三〇二十……六〇、六一、二三一、二八四
同 三〇二十二……五四
同 四〇五……一三七
同 四〇十七、十八……一三六、一三七
同 五〇四、十三……二五
彼後一〇十、十一……一一〇
同 一〇十六—十八……一〇九、一六五、一九〇
同 一〇十九……一四、五四、一五五
同 一〇廿一……五九、一七四
同 二〇二—四……一三八、一三九、二〇五
同 二〇三—九……三、一三八、一三九
同 二〇十七……二二六
同 三〇一、二……一四
同 三〇一—十……四四、六四、一一九、二〇五
同 三〇三、四……五一、一二五、一三九
同 三〇五—十二……一三、二八四、一九五
同 三〇七……三三三

彼後三〇八……四四
同 三〇九……一一七、二二一、二五七
同 三〇十—十二……一〇一、一二七
同 三〇十三……三二一
同 三〇十四……五
同 三〇十八……九五
同 五〇五—十二……三、一一三
約壹二〇一……三五
同 二〇十五……一九七
同 二〇十五—十七……一六〇、二〇三
同 二〇十八……一四一
同 二〇廿二……一四一、一四九
同 三〇二、三……七、一五三、一五六、一七二
同 四〇三……一四一
同 四〇十七……二一三
同 五〇十九……一九四、二二九
約貳七……一四一
猶六……一三九
同 十四、十五……九七、一一九、一三七、一四九、二九六
默 一〇二……一九一
同 一〇三……一〇、七一、二四九
同 一〇六……三三三
同 一〇七、八……二八六
同 一〇十三……一七二
默 二〇十……二五
同 二〇廿五—廿七……三、六五、九九
同 三〇三……三五三
同 三〇十、十一……一〇三、一一八、一四七
同 三〇十二……一七、二六二
同 三〇十四—十八……一二四、二二三、三三五
同 三〇廿一……五四、六五
同 四〇八……二八六
同 五〇六……一七三
同 五〇十—十三……五三、九九、一二三
同 六〇九—十一……二八、一三三、一一三
同 六〇十二—十四……一〇六
同 六〇十五—十七……五、一六五
同 七〇九、十……一七八
同 九〇十八……三二一
同 十一〇十……二八
同 十一〇十五……一三、一六七、三三三
同 十一〇十八……二九
同 十二〇五……九九
同 十三〇十一—十八……六〇、六三、一三三、一四五
同 十四〇六……一八一、三三九
同 十四〇十一……三三三
同 十四〇十三—十六……二五、三二一
同 十六〇三……六〇、六一
同 十六〇九—廿一……一一八
默 十六〇十五……七九
同 十九〇七—九……三九、一二七、一六八、一七四
同 十九〇十一—廿一……一三五、一三六、一七二、一七五
同 十九〇十五、十六……九九、一八九
同 十九〇廿……一三九、一九一
同 廿〇……五九
同 廿〇一—三……一六三、二〇七
同 廿〇一—九……四三、一六三
同 廿〇四—一四……五七
同 廿〇四—六……七六、一三三、一三五、三二八
同 廿〇七—十……一三九、三三三
同 廿〇十—十五……一三五、一三九
同 廿〇十一……三二一
同 廿〇十二—十五……七七、一三三、一三九
同 廿一〇二十……一七
同 二十二〇三……一六三
同 二十二〇五……三三三
同 二十二〇七……七一、二四九
同 二十二〇十六……三〇六
同 二十二〇十七……一五九
同 二十二〇十九……四五
同 二十二〇二十……一六〇、二三〇、二五八

大正六年十二月十二日印刷
大正六年十二月十五日發行

譯者　東京府下豐多摩郡淀橋町大字柏木　中田重治

發行人　東京府下豐多摩郡淀橋町大字柏木　シ、イ、カウマン　イ、エ、キルボルン

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　横濱市山下町百〇四番地　福音印刷合資會社

發行所　東京府下豐多摩郡淀橋町大字柏木　東洋宣教會

終